秋田県文化財調査報告書第393集

森吉家ノ前C遺跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－

２００５・３

秋田県教育委員会

シンボルマークは、秋田県北秋田郡森吉町に所在する
白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

森吉家ノ前Ｃ遺跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－

２００５・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成15年度に森吉町において実施した森吉家ノ前Ｃ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、中世半ばの竪穴状遺構や中世後半期～近世初期の掘立柱建物跡等が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本報告書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

秋田県教育委員会

教育長　小 野 寺　清

例　　言

１．本報告書は、秋田県北秋田市（旧北秋田郡森吉町）森吉字森吉家ノ前114外に所在する、森吉家ノ前Ｃ遺跡の文化財調査報告書である。

２．埋蔵文化財発掘調査は、森吉山ダム建設事業に係る発掘調査として、2003(平成15)年５月13日～８月１日にかけて実施した。

３．調査結果については、2004(平成16)年刊行の『森吉家ノ前Ｃ遺跡発掘調査資料』及び『秋田県埋蔵文化財センター年報22』等において一部公表しているが、本報告書をもって正式のものとする。

４．本報告書において使用した地図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「米内沢」・「大葛」及び国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所作成１/2,500「森吉山ダム貯水池平面図」等をもとに作成した。

５．土層断面図等の土色の表記は、『新版標準土色帖 2002年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠った。

６．発掘調査における一部の作業を下記機関に委託した。
水準測量及び方眼杭設置：株式会社秋田総合建設センター
遺跡空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

７．以下の自然科学的分析は下記機関に委託した。なお、本報告書では本文中（第５章）に引用・編集するにとどめた。
放射性炭素年代測定・樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

８．調査に係るすべての資料は秋田県教育委員会が保管している。

９．平成17年３月22日に、秋田県北秋田郡森吉町・合川町・鷹巣町・阿仁町の４町が合併し、「北秋田市」が発足した。本遺跡が所在する旧森吉町については、「北秋田郡森吉町」の表記を「北秋田市」と読み替える住所表示の変更となったため、例言を除く本報告書本文中において「北秋田郡森吉町」及び「森吉町」と表記した行政名称については、「北秋田市」と読み替えていただきたい。また、他の市町村名及び市町村境界も合併前の状態で示している。なお、抄録中の市町村コードについては合併前の旧コードを記載した。

10．本報告書の執筆・編集は、石川和良（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）が行った。

凡　　例

1．本報告書に掲載した平面図の方位は、日本測地系平面直角座標第Ｘ系座標北である。原点（ＭＡ50）における座標北と磁北との偏角は、西に８°10′である。本文及び巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2．各遺構に付している略記号は以下の通りである。
ＳＫＩ：竪穴状遺構　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＮ：焼土遺構
ＳＫ：土坑　　ＳＫＰ：柱穴様ピット

3．遺構実測図は、原則として１/40を基本とし、適宜１/20・１/30・１/60・１/80の縮尺で掲載した。挿図には、それぞれスケールを付している。また、挿図中に使用した略記号は以下の通りである。
ＲＰ：土器　　ＲＱ：石器　　Ｓ：礫

4．遺物実測図は、原則として１/２を基本とし、適宜１/１・１/３の縮尺で掲載した。挿図には、それぞれスケールを付している。

5．遺物の上下左右は実測図のそれに対応する。石器類では、左側平面を表面、右側平面を裏面とする。

6．挿図中の遺構外出土遺物実測図には、種別を問わず通し番号を付した。これは本文中及び図版中の番号と対応する。

7．挿図中の焼土範囲・白色土（灰）混入範囲・遺跡範囲・河川範囲等は、スクリーントーン及びグレースケールの濃淡をもって表した。

8．挿図中で使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

青磁　　釉薬（灰釉・鉄釉）

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 4

第２章　遺跡の環境 …… 5
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 8

第３章　調査の概要 …… 15
　第１節　遺跡の概要 …… 15
　第２節　調査の方法 …… 15
　　１　発掘調査 …… 15
　　２　室内整理 …… 16
　第３節　発掘調査の経過 …… 16

第４章　調査の記録 …… 19
　第１節　基本層序 …… 19
　第２節　検出遺構と出土遺物 …… 20
　　１　概要 …… 20
　　２　遺構と出土遺物 …… 22
　　（１）竪穴状遺構 …… 22
　　（２）掘立柱建物跡 …… 24
　　（３）焼土遺構 …… 42
　　（４）土坑 …… 45
　　（５）柱穴様ピット …… 53
　第３節　遺構外出土遺物 …… 56
　　１　縄文時代の遺物 …… 56
　　（１）土器 …… 56
　　（２）石器 …… 60
　　２　中世の遺物 …… 66
　　３　近世の遺物 …… 66
　　（１）陶器 …… 66
　　（２）磁器 …… 70

第５章　自然科学的分析 …… 73
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 73
　第２節　樹種同定 …… 73

第６章　まとめ …… 75
　第１節　竪穴状遺構について …… 75
　第２節　掘立柱建物跡について …… 80
　第３節　結び …… 81

図版（１～10）

報告書抄録

挿図目次

第１図　秋田県内主要河川・ダム概要図……２
第２図　森吉山ダム建設事業区域内遺跡分布図……３
第３図　遺跡位置図……５
第４図　秋田県内地質概要図……６
第５図　遺跡周辺図……７
第６図　秋田県内主要史跡概要図……13
第７図　森吉町周辺遺跡分布図……14
第８図　グリッド設定図……18
第９図　基本層序図……19
第10図　遺構配置図……21
第11図　ＳＫＩ41竪穴状遺構……23
第12図　ＳＢ46掘立柱建物跡出土遺物……24
第13図　ＳＢ46掘立柱建物跡……25
第14図　ＳＢ47掘立柱建物跡出土遺物……26
第15図　ＳＢ47掘立柱建物跡……27
第16図　ＳＢ116掘立柱建物跡出土遺物……28
第17図　ＳＢ116掘立柱建物跡……29
第18図　ＳＢ121掘立柱建物跡……30
第19図　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ１～４・14……31
第20図　ＳＢ121掘立柱建物跡出土遺物……31
第21図　ＳＢ122掘立柱建物跡……32
第22図　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉……33
第23図　ＳＢ184掘立柱建物跡……34
第24図　ＳＢ184掘立柱建物跡出土遺物……35
第25図　ＳＢ246掘立柱建物跡……36
第26図　ＳＢ248掘立柱建物跡……37
第27図　ＳＢ266掘立柱建物跡出土遺物……38
第28図　ＳＢ251掘立柱建物跡……39
第29図　ＳＢ266掘立柱建物跡……40
第30図　ＳＢ357掘立柱建物跡……41
第31図　ＳＢ374掘立柱建物跡……43
第32図　ＳＢ391掘立柱建物跡……44
第33図　ＳＮ40焼土遺構
ＳＫ43土坑　ＳＫ44土坑
ＳＫ45土坑　ＳＫ52土坑
ＳＫ53土坑……50
第34図　ＳＫ42・84・85・86土坑
ＳＫ56土坑
ＳＫ90土坑……51
第35図　ＳＫ126土坑　ＳＫ140土坑
ＳＫ174土坑　ＳＫ247土坑
ＳＫ402土坑　ＳＫ414土坑……52
第36図　ＳＫＰ123・ＳＫＰ319柱穴様ピット出土遺物……53
第37図　遺構外出土遺物　縄文土器１……57
第38図　遺構外出土遺物　縄文土器２……58
第39図　遺構外出土遺物　縄文土器３……59
第40図　遺構外出土遺物　石　器１……61
第41図　遺構外出土遺物　石　器２……62
第42図　遺構外出土遺物　石　器３……63
第43図　遺構外出土遺物　石　器４……64
第44図　遺構外出土遺物　石　器５……65
第45図　遺構外出土遺物　中世陶器……67
第46図　遺構外出土遺物　近世陶器１……68
第47図　遺構外出土遺物　近世陶器２……69
第48図　遺構外出土遺物　近世磁器１……71
第49図　遺構外出土遺物　近世磁器２……72
第50図　秋田県内検出竪穴状遺構立地状況図……78

表 目 次

第１表　森吉山ダム建設事業区域内遺跡一覧表……３
第２表　森吉町周辺遺跡一覧表……14
第３表　ＳＫＩ41竪穴状遺構内柱穴一覧表……22
第４表　柱穴様ピット一覧表１……53
第５表　柱穴様ピット一覧表２……53
第６表　柱穴様ピット一覧表３……54
第７表　柱穴様ピット一覧表４……54
第８表　柱穴様ピット一覧表５……55
第９表　柱穴様ピット一覧表６……55
第10表　縄文土器一覧表……56
第11表　石器一覧表……60
第12表　中世陶器一覧表……66
第13表　近世陶器一覧表……66
第14表　近世磁器一覧表……70
第15表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果表……74
第16表　暦年較正結果表……74
第17表　秋田県内検出竪穴状遺構一覧表……79

図版目次

図版１　１　遺跡遠景（北東→）
　　２　遺跡全景（南→）
図版２　１　ＳＫＩ41竪穴状遺構　確認（南東→）
　　２　ＳＫＩ41竪穴状遺構　確認（北東→）
　　３　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ａ－Ｂ断面Ａ側（南東→）
　　４　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ａ－Ｂ断面Ｂ側（南東→）
　　５　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ｃ－Ｄ断面Ｃ側（南西→）
　　６　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ｃ－Ｄ断面Ｄ側（南西→）
　　７　ＳＫＩ41竪穴状遺構　完掘（北西→）
　　８　ＳＫＩ41竪穴状遺構　完掘（北東→）
図版３　１　ＳＢ184掘立柱建物跡　完掘（北東→）
　　２　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　確認（北東→）
　　３　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　現況（北東→）
　　４　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　断面（北東→）
　　５　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　断面（南東→）
図版４　１　ＳＢ46･47･121･357掘立柱建物跡　完掘（北東→）
　　２　ＳＢ47・121・357掘立柱建物跡　完掘（南東→）
図版５　１　ＳＢ116掘立柱建物跡　完掘（北西→）
　　２　ＳＢ246掘立柱建物跡　完掘（南西→）
　　３　ＳＢ248掘立柱建物跡　完掘（北東→）
図版６　１　ＳＢ251・266・391掘立柱建物跡　完掘（南西→）
　　２　ＳＢ266掘立柱建物跡　完掘（南東→）
　　３　ＳＢ374掘立柱建物跡　完掘（南東→）
図版７　１　基本土層断面ＭＤ56付近（北東→）
　　２　ＳＢ46掘立柱建物跡Ｐ５礫出土状況（南東→）
　　３　ＳＢ116掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（南東→）
　　４　ＳＢ251掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（西→）
　　５　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ１礫出土状況（南西→）
　　６　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ２礫出土状況（北東→）
　　７　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ３礫出土状況（北東→）
　　８　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（南西→）
図版８　１　ＳＮ40焼土遺構　確認（北東→）
　　２　ＳＮ40焼土遺構　断面（南西→）
　　３　ＳＫ43・44・45土坑　確認（南東→）
　　４　ＳＫ43土坑　断面（南東→）
　　５　ＳＫ44土坑　断面（南→）
　　６　ＳＫ52土坑　断面（南東→）
　　７　ＳＫ53土坑　断面（北西→）
　　８　ＳＫ90土坑(内ＳＫＰ51)　断面（西→）
図版９　遺構内出土遺物
　　遺構外出土遺物　縄文土器・石器
図版10　遺構外出土遺物　中世陶器
　　遺構外出土遺物　近世陶器・磁器

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

秋田・岩手の県境付近にそびえる中岳に源流をもち、秋田県北部を東から西に流れる米代川は、31の支流を合わせながら日本海に注ぐ河川であり、雄物川・子吉川と並ぶ県内三大河川の一つである。米代川が貫流する秋田県北部の花輪・大館・鷹巣の各盆地では、周囲に山が迫り、川幅も狭い。とりわけ鷹巣盆地では、蛇行が激しいうえ急激に川幅が狭まる。さらに、北流する阿仁川と南流する藤琴川が合流するため、幾度も大洪水に遭っている（Ｐ２／第１図参照)。

なかでも、1972(昭和47)年７月３日、日本列島を縦断した集中豪雨は秋田県内にも未曾有の災害をもたらし、被害総額は約260億円に及んだ。この豪雨が県北部を襲った際、米代川上・中流の無堤部では大氾濫、また次々に堤防も決壊し、下流に位置する能代市・二ツ井町の被害を多大なものとした。この大洪水に対し、秋田県に天災融資法と激甚災害法が適用され、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町の１市５町には災害救助法が適用された。

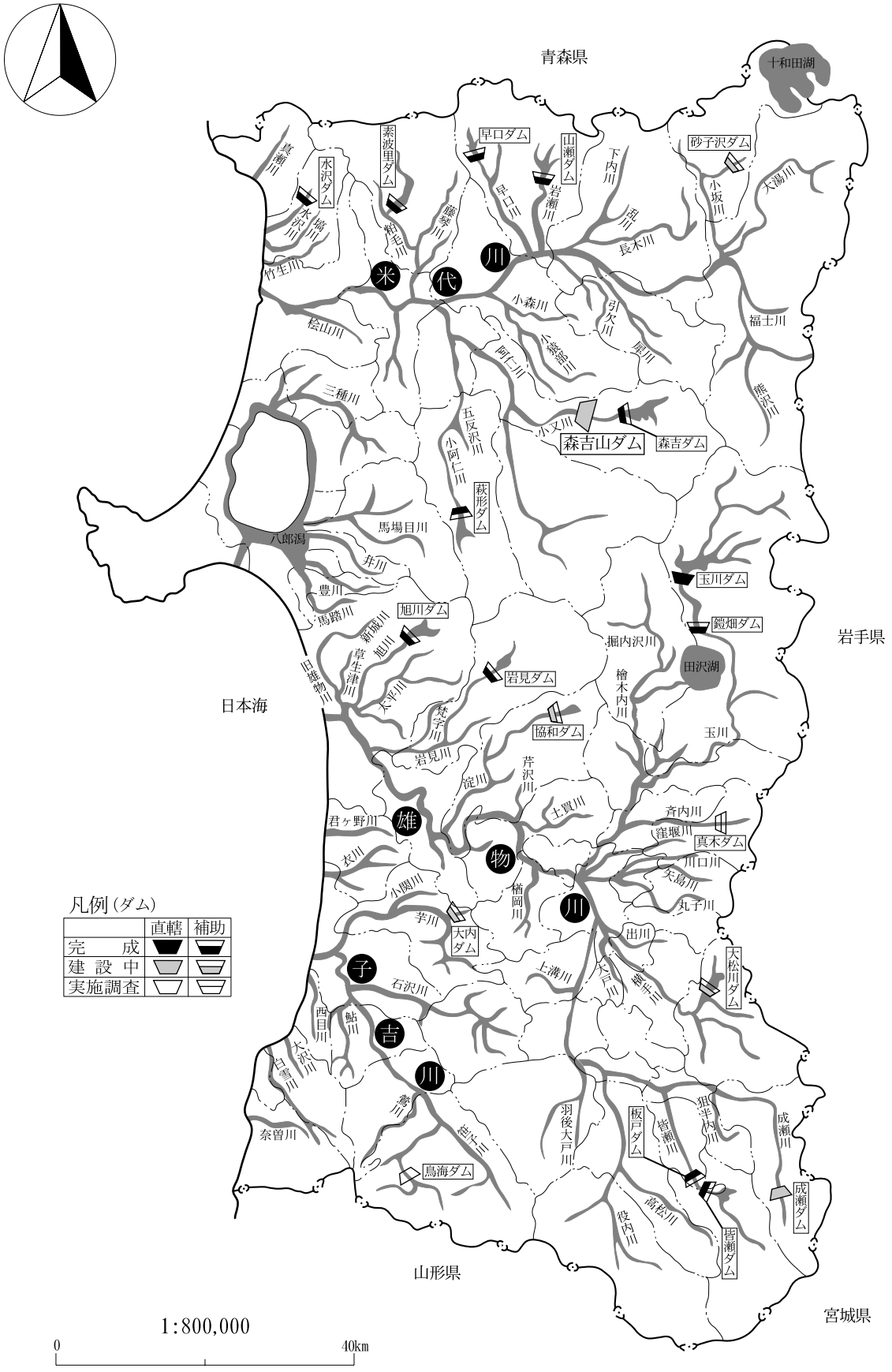
翌1973(昭和48)年、県北部を襲ったこの大洪水を機に「米代川工事実施基本計画」の見直しが行われ、上流ダム群により水量を調節することとなった。この上流ダム群の一つとして、阿仁川右支流の小又川に建設されることとなったのが阿仁川ダムであり、のちに森吉山ダムに改称された。森吉山ダムは、水量調節のほか、灌漑・水道用水の供給や水力発電等を目的とする多目的ダムである。

森吉山ダム建設決定を受け、1994(平成６)年より、ダム建設によって水没する地域を対象として、埋蔵文化財の保護を目的とした遺跡分布調査及び遺跡範囲確認調査が秋田県教育委員会によって逐次実施され、1998年(平成10)年にすべての遺跡範囲確認調査を完了した。貯水予定地周辺地域の遺跡数は、60遺跡に及ぶ（Ｐ３／第２図参照)。

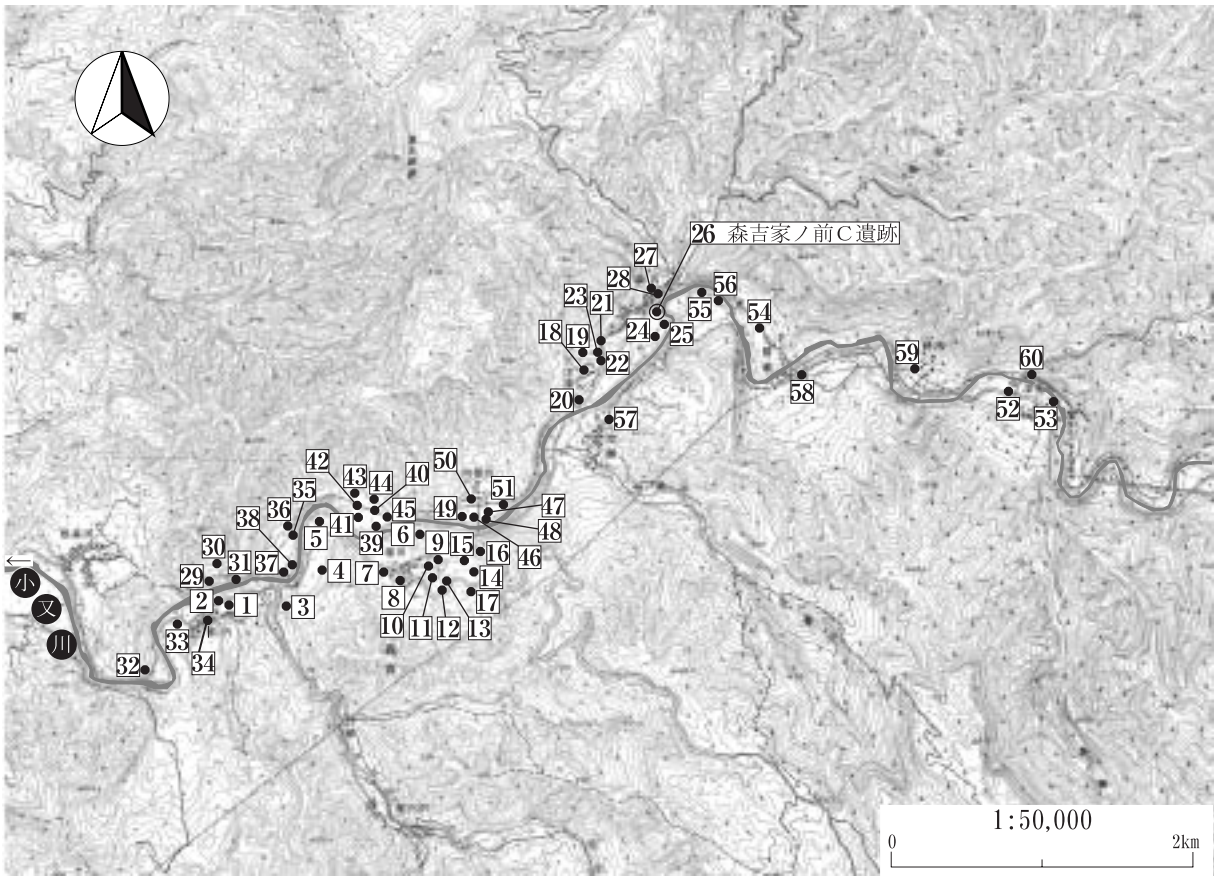
同じく1994(平成６)年より、森吉山ダム関連工事が開始された。下流工事用道路建設から着手され、翌年には事業地内の材料運搬路建設に移った。一方、第12回ジャンボリーが1998(平成10)年に森吉山麓において開催されることが決定し、森吉山ダムの工事用道路と供用する形で、会場までの道路整備が必要となった。これを受け、会場へのアクセス道路部分に位置する、日廻岱Ａ遺跡・砕渕遺跡・上悪戸Ｄ遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡・天津場Ｃ遺跡の発掘調査を、1995(平成７)～1996(平成８)年にかけて森吉町教育委員会が実施した。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、遺跡範囲確認調査を行った遺跡のなかから記録保存の必要なものについて、工事過程に合わせて発掘調査を実施する合意が、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。秋田県教育委員会では、1997(平成９)～2004(平成16)年の８年間で、深渡遺跡、姫ヶ岱Ｃ・Ｄ遺跡、桐内Ａ～Ｄ遺跡、桐内沢遺跡、日廻岱Ａ・Ｂ遺跡、向様田Ａ～Ｆ遺跡、砕渕遺跡、漆下遺跡、森吉家ノ前Ａ遺跡、深渡Ａ遺跡、地蔵岱遺跡の発掘調査を実施している（一部未調査区域もあり)。

森吉家ノ前Ｃ遺跡の発掘調査は、2003(平成15)年５月13日～８月１日にかけて、遺跡総面積6,000㎡を対象に実施した。



第１図　秋田県内主要河川・ダム概要図



第２図　森吉山ダム建設事業区域内遺跡分布図

第１表　森吉山ダム建設事業区域内遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺　跡　所　在　地	時　期
1	桐内Ｃ	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文前～後期
2	桐内Ｄ	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文後期
3	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下タ103	縄文前～後期
4	日廻岱Ａ	森吉町森吉字日廻岱65, 63-1外	縄文前～晩期
5	日廻岱Ｂ	森吉町森吉字日廻岱86, 88, 89, 90, 91	縄文前・後期
6	漆下	森吉町森吉字漆下2-1, 4, 5, 6, 7, 8, 14-2, 37外	縄文前～後期
7	上ハ岱Ａ	森吉町森吉字上ハ岱102, 104, 105, 106外	縄文中～晩期・弥生
8	上ハ岱Ｂ	森吉町森吉字上ハ岱70, 71, 72	縄文前～晩期
9	二重島Ａ	森吉町森吉字二重島31-1, 32-2, 47-1, 106-1, 134, 135	縄文晩期
10	二重島Ｂ	森吉町森吉字二重島11, 99, 100外	縄文中～後期
11	二重島Ｃ	森吉町森吉字二重島93, 94, 95, 96, 97, 110	縄文前～晩期
12	二重島Ｄ	森吉町森吉字二重島39	縄文中～晩期
13	二重島Ｅ	森吉町森吉字二重島65, 66-1, 69, 70-2, 70-3	縄文前・晩期・弥生
14	二重島Ｆ	森吉町森吉字二重島124-1	縄文中～後期・弥生
15	二重島Ｇ	森吉町森吉字二重島80, 81-1, 84-1	縄文早・中～晩期・弥生・近世
16	二重島Ｈ	森吉町森吉字二重島6, 14, 15	縄文後期
17	水上ミ	森吉町森吉字水上ミ42-1, 43-1, 44, 113-6外	縄文中・晩期・弥生
18	天津場Ａ	森吉町森吉字天津場15-3	縄文後期・古代
19	天津場Ｂ	森吉町森吉字天津場16-1	縄文後期
20	天津場Ｃ	森吉町森吉字天津場87-1, 87-3, 88-2	縄文中・後期
21	ネネム沢Ａ	森吉町森吉字ネネム沢26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35	旧石器・縄文後期・古代
22	ネネム沢Ｂ	森吉町森吉字ネネム沢17, 19, 22	縄文後期
23	ネネム沢Ｃ	森吉町森吉字ネネム沢6-1	縄文晩期
24	森吉家ノ前Ａ	森吉町森吉字森吉家ノ前50, 145, 174, 175, 176, 177, 178	縄文前～後期・古代・中世
25	森吉家ノ前Ｂ	森吉町森吉字森吉家ノ前138, 139, 140, 141, 142	縄文中～晩期・中世
26	森吉家ノ前Ｃ	森吉町森吉字森吉家ノ前101-1, 103, 114, 115, 116	中世・近世
27	森吉Ａ	森吉町森吉字森吉95	縄文後期・古代
28	森吉Ｂ	森吉町森吉字森吉69	縄文後期
29	上悪戸Ａ	森吉町根森田字上悪戸4-1, 9, 10-1, 11-1・2, 12-1～4, 13, 14-1, 16-1・2外	縄文中～晩期
30	上悪戸Ｂ	森吉町根森田字上悪戸8-12	弥生後期

番号	遺跡名	遺　跡　所　在　地	時　期
31	上悪戸Ｃ	森吉町根森田字上悪戸7, 8-9	縄文後～晩期
32	上悪戸Ｄ	森吉根森田字上悪戸34-7, 34-29～41, 34-60・61・67・54外	縄文後・晩期
33	桐内Ａ	森吉町森吉字桐内前田5-1, 6-1・3外	縄文早・中～晩・弥生
34	桐内Ｂ	森吉町森吉字家ノ下16、字桐内33-1, 34～37外	縄文晩期
35	姫ヶ岱Ａ	森吉町根森田字姫ヶ岱8, 9-1, 10-1	縄文前～晩期
36	姫ヶ岱Ｂ	森吉町根森田字姫ヶ岱14-10～12	縄文中～後期
37	姫ヶ岱Ｃ	森吉町根森田字姫ヶ岱12-2～11, 15外	縄文早～晩期
38	姫ヶ岱Ｄ	森吉町根森田字姫ヶ岱12-31外	縄文早・中・晩期
39	橋場岱Ａ	森吉町森吉字橋場岱48, 49, 50-1外	縄文中期
40	橋場岱Ｂ	森吉町森吉字橋場岱69, 78外	縄文後・晩期
41	橋場岱Ｃ	森吉町森吉字橋場岱42, 62外	縄文後・晩期
42	橋場岱Ｄ	森吉町森吉字橋場岱110-1	縄文時代
43	橋場岱Ｅ	森吉町森吉字橋場岱109	縄文時代
44	橋場岱Ｆ	森吉町森吉字橋場岱101, 103, 104	縄文晩期
45	橋場岱Ｇ	森吉町森吉字橋場岱6-1, 39, 40, 46	縄文後期
46	向様田Ａ	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8, 9-1・2, 11, 16, 81-1, 82, 83, 84	縄文晩期
47	向様田Ｂ	森吉町森吉字向様田67-1・2, 70, 71-1, 72, 74, 75外	縄文後・晩期
48	向様田Ｃ	森吉町森吉字向様田76, 77, 78, 79	縄文後・晩期
49	向様田Ｄ	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14-1, 17, 18, 19-1, 20	縄文晩期
50	向様田Ｅ	森吉町森吉字向様田家ノ下モ36, 37, 39, 63, 64	縄文前・晩期・古代
51	向様田Ｆ	森吉町森吉字向様田58, 59外	縄文後・晩期
52	深渡	森吉町森吉字深渡104-1外	縄文前～晩期
53	深渡Ａ	森吉町森吉字深渡29外	縄文後・晩期
54	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬80外	縄文後期
55	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文前～後期・古代
56	地蔵岱Ａ	森吉町森吉字地蔵岱124外	縄文中・後期
57	惣瀬	森吉町森吉字惣瀬86外	縄文後期・古代
58	栩岱	森吉町森吉字栩岱74外	縄文後・晩期
59	砕渕	森吉町森吉字砕渕124外	縄文中・後期
60	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬口2-1外	縄文後期

第２節　調査要項

遺　跡　名	森吉家ノ前Ｃ遺跡(略号２ＭＹＩＮＭ－Ｃ)
遺跡所在地	秋田県北秋田郡森吉町森吉字森吉家ノ前114外
調査期間	2003(平成15)年５月13日～８月１日
調査目的	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調査面積	6,000㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	河田　弘幸（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
	石川　和良（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
	藤田　大誠（秋田県埋蔵文化財センター　調査・研究員）
	山田　　宗（秋田県埋蔵文化財センター　調査・研究員）
総務担当者	金　　義晃（秋田県埋蔵文化財センター　総務課長）
	池端　　徹（秋田県埋蔵文化財センター　副主幹）
	藤原　康悦（秋田県埋蔵文化財センター　副主幹）
	高橋　　修（秋田県埋蔵文化財センター　主任）
	田口　　旭（秋田県埋蔵文化財センター　主事）　※職名は調査年度当時のもの
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所
	森吉町
	森吉町教育委員会

《第１章　参考文献》

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

川村公一　『米代川　その治水・利水の歴史』　モリトピア選書５
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1994(平成６)年

秋田県土木部河川課　『あきたの河川と海岸』　1998(平成10)年

秋田県建設交通部河川課　『あきたの川』　2003(平成15)年

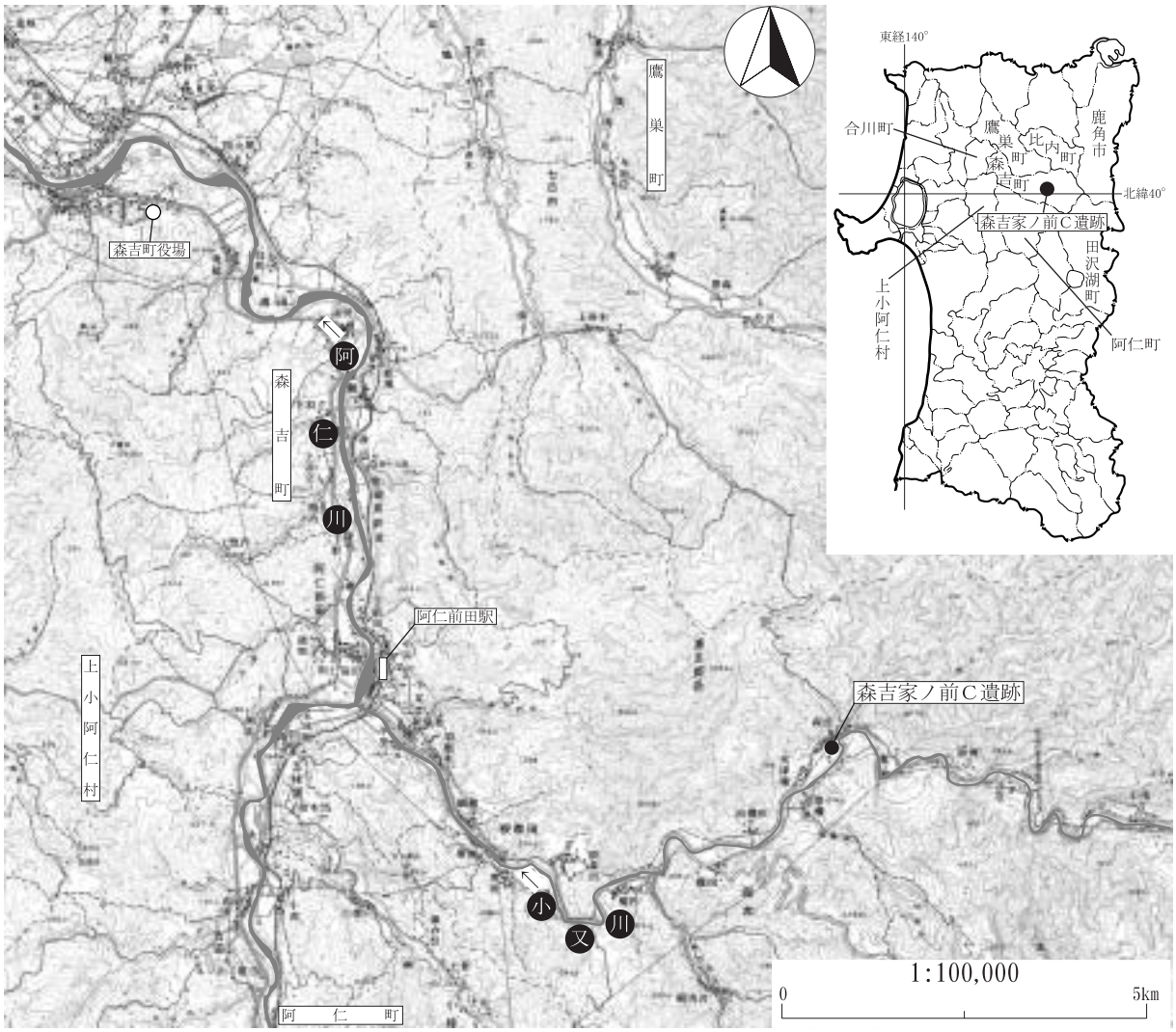
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991(平成３)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財報告書第270集　1997(平成９)年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

森吉家ノ前Ｃ遺跡は、森吉町北部の米内沢地区にある森吉町役場より南東約12km、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅から東方約6.3km、北緯40°03′05″、東経140°29′33″に位置している。調査範囲は森吉山北麓を西流する小又川右岸に形成された広い河岸段丘上に位置する。遺跡の標高は150～152m程度である。遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と、鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川流域からなる。南の北秋田郡阿仁町との境には、町名の由来となった森吉山（標高1,454m）があり、その東側一体は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には谷底平野である小又川低地をはさみ、北北東に小繋森（標高1,010m）・北に高烏帽子（標高764m）・北西に源五郎岳（標高559m）等が東西に連なり、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11kmである。これらは分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

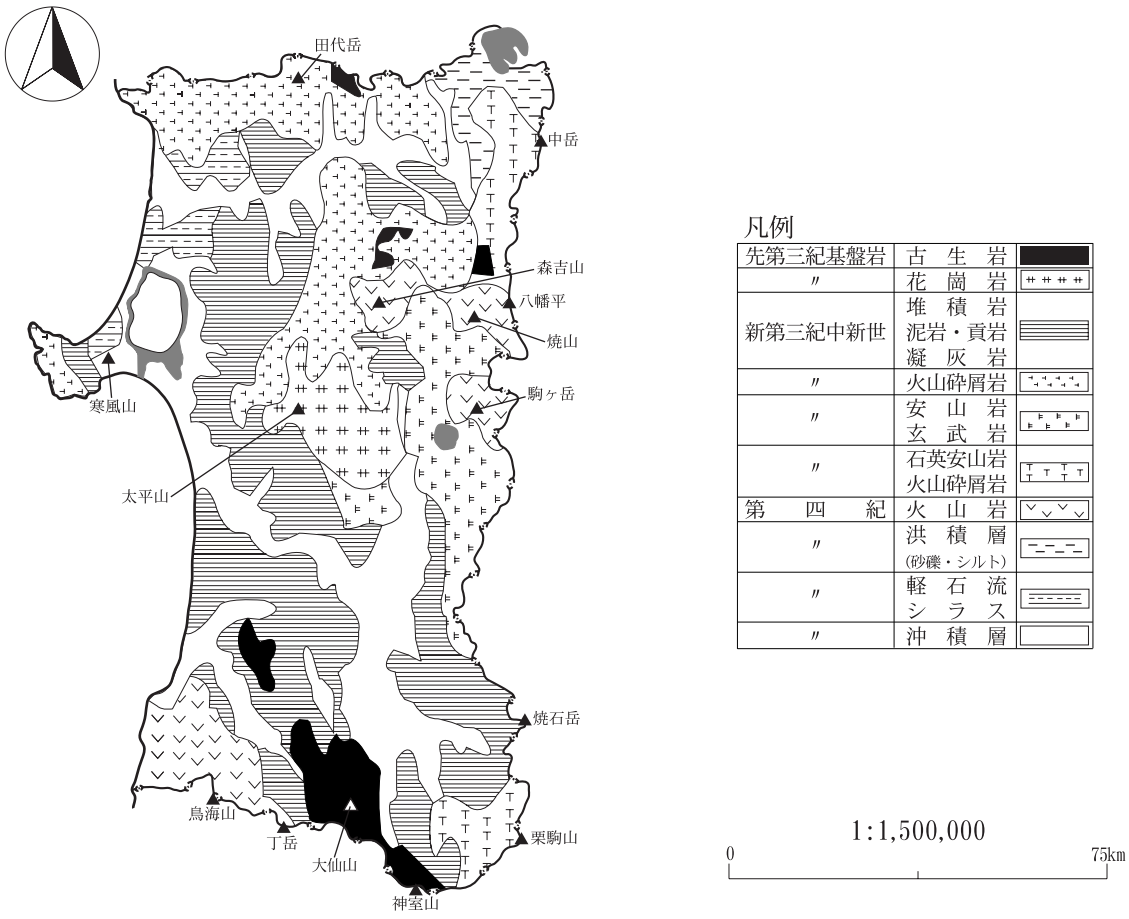


第３図　遺跡位置図

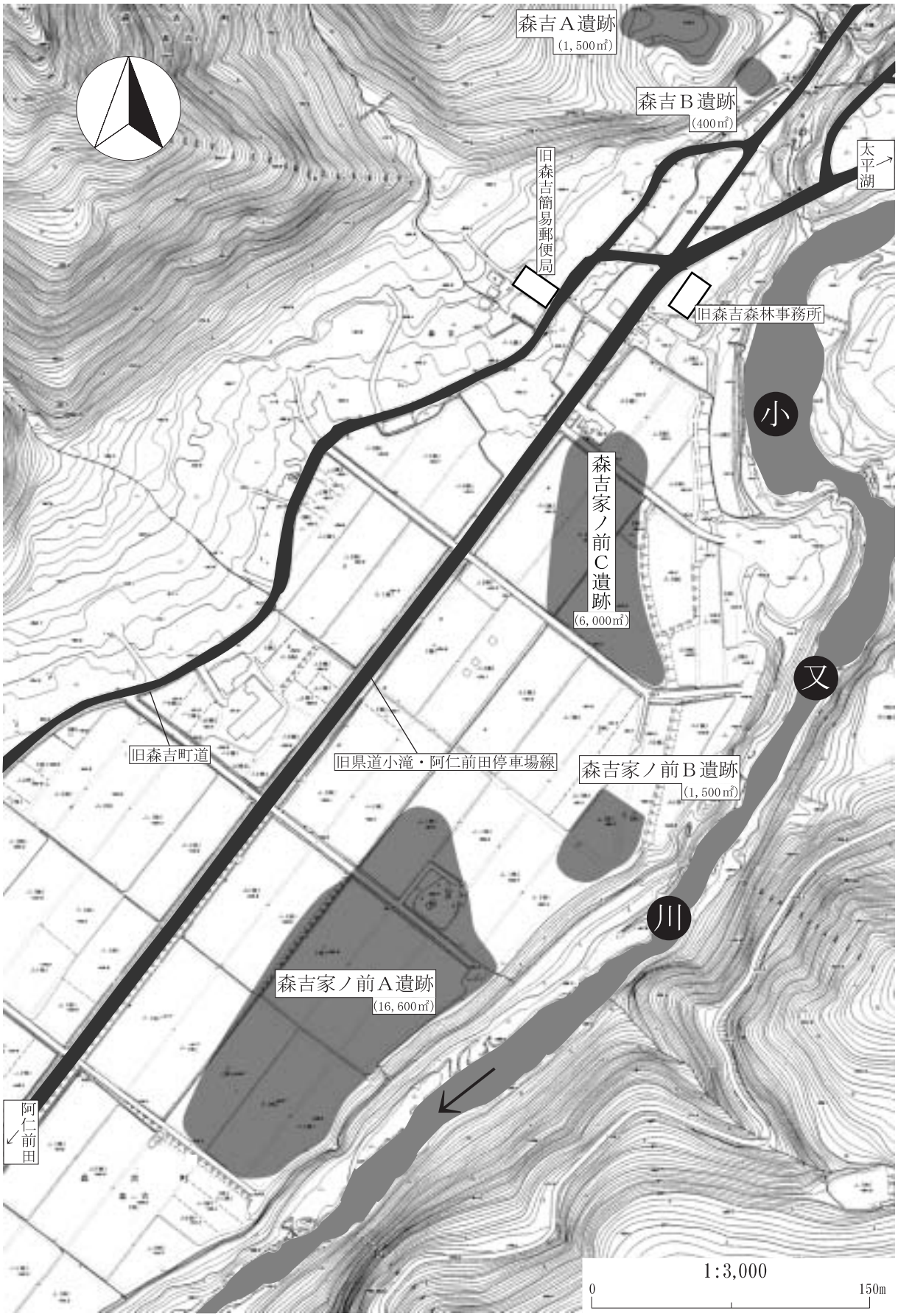
本遺跡の近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、森吉町阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、概ね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が急勾配である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともに、ほ場整備が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側緑色凝灰岩（グリーンタフ）地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩（粘板岩・ホルンフェルス）が小繋森の頂上付近に顔を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山砕屑岩類及び堆積岩類を基盤岩としている。また、第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動を伴う泥流堆積物・段丘堆積物・扇状地堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。付近の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山砕屑岩類が分布し、左岸側には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。



第４図　秋田県内地質概要図


森吉Ａ遺跡
(1,500㎡)
森吉Ｂ遺跡
(400㎡)
太平湖
旧森吉簡易郵便局
旧森吉森林事務所
小
又
川
森吉家ノ前Ｃ遺跡
(6,000㎡)
旧森吉町道
旧県道小滝・阿仁前田停車場線
森吉家ノ前Ｂ遺跡
(1,500㎡)
森吉家ノ前Ａ遺跡
(16,600㎡)
阿仁前田
1:3,000
0
150m

第５図　遺跡周辺図

第２節　歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』〔1991(平成３)年発行〕によると、森吉町には58箇所の埋蔵文化財包含地（遺跡）が周知されている。その後、1992(平成４)～1993(平成５)年度の森吉山ダム建設事業に係る遺跡分布調査と、1994(平成６)年度からの同事業に係る遺跡範囲確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉地区で見つかっており、町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。ほとんどの遺跡が小又川流域に位置しており、森吉家ノ前Ｃ遺跡周辺にも多数の遺跡が分布している。

本遺跡では、縄文時代前期・中期・後期・晩期の土器片、また時期特定は困難だが、縄文時代の石器がそれぞれ極少量出土している。しかし、いずれも断片的なものにとどまり遺構の検出もないことから、本遺跡は縄文時代全般を通して確固たる生活空間ではなかった可能性が高い。さらに、弥生・古墳・古代の各時代においては遺物の出土も皆無であり、遺跡全体の削平という要素を考慮しても、かなり長期に及ぶ生活空間としての断続が存した確率が高い。発掘調査の結果から、確実に人々の活動痕跡が確認できるのは、中世（15世紀前半）に入ってからである。よって、本遺跡内の歴史的環境に限定されない、本遺跡周辺地域一体の状況を中心に旧石器時代から時代順に概説する。同時に、秋田県内の代表的遺跡をあげ、本節の報告とする（Ｐ13・14／第６・７図も参照されたい)。

はじめに、旧石器時代では、前述の調査と近年の発掘調査により、ネネム沢Ａ遺跡・二重鳥Ａ遺跡・二重鳥Ｂ遺跡で旧石器時代の遺物が確認されている。なかでも、2003(平成15)年に発掘調査された二重鳥Ａ遺跡では、後期旧石器時代（今から約15,000～14,000年前）のナイフ形石器、掻器、石刃、剥片など約330点が出土している。小又川を含めた阿仁川流域では初例である。秋田県内の主要遺跡では、米ヶ森技法で知られる米ヶ森遺跡（協和町）・約27,000年前と推定される石器製作跡が見つかった縄手下遺跡（能代市）などがあげられる。

縄文時代草創期（今から約10,000～8,000年前）では、遺跡は確認されていない。この時期の遺跡分布・性格等の詳細は不明である。秋田県内の主要遺跡では、石器製作跡や竪穴住居跡の可能性がある竪穴状遺構を検出した岩瀬遺跡（山内村）などがあげられる。

縄文時代早期（今から約8,000～6,000年前）では、桂の沢遺跡で爪形文・貝殻沈線文・条痕文の遺物が、姫ヶ岱Ｄ遺跡で尖底土器の底部が、また日廻岱Ｂ遺跡でも同様の遺物が少量出土している。いずれの遺跡においても遺構は確認されておらず、この時期の遺跡分布・性格等の詳細は不明である。秋田県内の主要遺跡では、遺物が層位的に出土した岩井堂洞窟（雄勝町）・この時期における日本海側の数少ない貝塚である菖蒲崎貝塚（本荘市）などがあげられる。

縄文時代前期（今から約6,000～5,000年前）では、二重鳥Ｃ遺跡・日廻岱Ｂ遺跡・森吉家ノ前Ａ遺跡・深渡遺跡で竪穴住居跡が検出されている。深渡遺跡の７軒が一番多い検出数で、他は数軒の検出にとどまる。よって、この時期は小規模な集落が周辺に点在していたと考えられる。秋田県内の主要遺跡では、ともに大型住居跡が検出された池内遺跡（大館市）・杉沢台遺跡（能代市）などがあげられる。

縄文時代中期（今から約5,000～4,000年前）では、多数の遺跡で当期の遺構・遺物が確認されている。なかでも、周辺遺跡が分布する段丘面より約30m高い小又川左岸台地上に立地する二重鳥Ｃ遺跡では、当期全般にわたる遺構の検出例が報告されており、中期中葉の竪穴住居跡は11軒を数える。こ

の時期の拠点集落であったと思われる。また、森吉家ノ前Ａ遺跡では中期後葉の複式炉を持つ竪穴住居跡が６軒検出されており、うち１軒の内部より剥片貯蔵ピットが確認されている。小又川流域全般において、中期後葉頃の特徴的な炉である複式炉を検出した遺跡は計11遺跡に上り、二重鳥Ｃ遺跡が位置する小又川左岸台地上の集在から小又川両岸段丘上の散在へと、徐々に生活拠点を分散していったと考えられる。加えて、深渡遺跡・深渡Ａ遺跡では、壁際に石を巡らせた複式炉を伴う竪穴住居跡が見つかっており、後期に見られる大規模な環状列石の端緒となる可能性があり注目される。秋田県内の主要遺跡では、地点貝塚である萱刈沢貝塚（八竜町）・段階的な集落変遷の痕跡が残る一丈木遺跡（千畑町）などがあげられる。

縄文時代後期（今から約4,000～3,000年前）では、特に前葉前後の遺構・遺物が集中的に確認されている。そのうち、日廻岱Ｂ遺跡では多数の竪穴住居跡が検出されており、いわゆる環状集落の呈をなしている。また、竪穴住居跡や多数の土坑、さらに大規模な捨て場や多様な配石遺構が検出された漆下遺跡は、現時点では小又川流域における最大規模の遺跡である。漆下遺跡では、居住域・墓域・祭祀空間・捨て場等が明確に区別されている。この時期において、各遺構が役割ごとにその形成場所を区割化していた好例である。両遺跡ともに、この時期の中心的な集落であろう。さらに、当期においては中葉～後葉頃の竪穴住居跡も多数検出されていて、集落形成が絶え間なく行われていた証左となっている。とりわけ後葉になると、中期中葉に拠点集落を形成していたと思われる小又川左岸台地上に再び人々が集在するようになり、二重鳥Ｄ遺跡で12軒、二重鳥Ｅ遺跡で６軒のあわせて18軒の竪穴住居跡が検出されている。全般に、祭祀に関わるとされる遺構・遺物の検出例増加も顕著である。秋田県内の主要遺跡では、ともに大規模な環状列石を構築する共同墓地と位置づけられる大湯環状列石（鹿角市）・伊勢堂岱遺跡（鷹巣町）などがあげられる。

縄文時代晩期（今から約3,000～2,300年前）では、いわゆる亀ヶ岡文化の影響が至るところに波及しているのが見てとれる。向様田遺跡群はその代表であり、向様田Ａ遺跡では前半期の大規模な環状配石遺構と土坑墓群が、隣接する向様田Ｄ遺跡では同時期の大量な遺物を伴う盛土が形成されている。両者ともに、独立した祭祀空間を築いていたと考えられる。しかし、この大規模な祭祀空間に見合うだけの居住域の確認はされておらず、竪穴住居跡の検出数は姫ヶ岱Ｄ遺跡で２軒、二重鳥Ｅ遺跡で３軒、向様田Ｆ遺跡で２軒という少数にとどまる。後期には、居住域や墓域などの区割化が遺跡内で行われていたのに対して、晩期にはその動きが一区域内（一遺跡内）にはとどまらず、いくつかの独立した区域（数遺跡）によって総合的に行われていたのかもしれない。そう捉えるならば、居住域と墓域を含む祭祀空間が離れていても違和はないが、あくまで推定であり、周辺地域においてもこの推論を立証するに足る遺構検出例はないと言える。いずれにしても、集落の様相はかなり変質していることが明瞭である。秋田県内の主要遺跡では、人骨・骨角製品・貝製品など貴重な資料が多数出土した柏子所貝塚（能代市）・ともに墓域として機能していた虫内Ｉ遺跡（山内村）・湯出野遺跡（東由利町）などがあげられる。

弥生時代（今から約2,300～1,700年前）については、上悪戸Ｂ遺跡・桐内Ａ遺跡・日廻岱Ｂ遺跡・森吉家ノ前Ａ遺跡で遺物が出土している。しかし、遺物が断片的に出土しているのみで、遺構検出例はない。そのため、集落の具体的な特徴や水稲技術の有無を含めた生業形態など、当時の詳細な状況は不明である。秋田県内の主要遺跡では、当期には類例のない木柵で囲まれた集落跡である地蔵田遺

跡（秋田市）・大規模な墓域を形成していた館の上遺跡（八竜町）などがあげられる。

古墳時代（約300～710年）については、現段階において遺跡の確認例はなく、この時期の遺跡分布・性格等の詳細は不明である。当期の県内北部においては、北海道で展開していた稲作農耕が為されない続縄文時代の影響が一部に見られる。能代市に所在する寒川Ⅱ遺跡の土坑墓には、続縄文文化期における葬制の特徴が色濃く残っている。一方、この時期に入って、「大和朝廷」という中央集権国家統制の波が間歇的に東北地方北部にも及んでくる。ただ、本遺跡周辺まで及んだかどうかは不明である。秋田県内の主要遺跡では、埋没家屋が発見された小谷地遺跡（男鹿市）・多数の墓を検出した田久保下遺跡（横手市）などがあげられる。

古代（710～1192年／ここでは奈良・平安時代とする）において、本遺跡が所在する森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域と思われる地名が文献に初見する。六国史の一つである「日本三代実録(901年成立)」に記された「榲淵（すぎぶち）」である。「日本三代実録」には秋田城司の圧政に蜂起した蝦夷の反乱である元慶（がんぎょう）の乱（878年）の様子が記載されており、本遺跡周辺の地域は律令国家に組み込まれていない、いわゆる蝦夷社会が広範に機能していたと思われる。939年には、平将門の乱との関連は不明だが、出羽俘囚の反乱である天慶（てんぎょう）の乱も起こっており、国家統制への反抗が継続していたことをうかがわせる。しかし現存する文献資料からは、本遺跡周辺に律令国家体制がどの段階で、どの程度及んでいたのかは定かではない。また、当期の県内北部においては、北海道で展開していた擦文文化の影響が一部に見られ、前時代より引き続く北方圏との交易を暗示している。大館市に所在する上野遺跡では、擦文文化後期の完形土器が出土している。当期における周辺の遺跡は、向様田Ｅ遺跡・惣瀬遺跡・天津場Ａ遺跡・ネネム沢Ａ遺跡・地蔵岱遺跡が確認されている。このうち、向様田Ｅ遺跡では、標高156m程の丘陵地で古代の竪穴住居跡３件が検出されている。地蔵岱遺跡では、1996(平成８)年に森吉町教育委員会が実施した遺跡北端部の発掘調査で、段丘北側の斜面から鉄滓の捨て場が確認されている。また、2004(平成16)年に秋田県教育委員会が実施した遺跡東側の発掘調査では、縄文・古代・中世の各時期において一定規模の集落であったことが明らかになっている。特に古代期の遺構が多く、竪穴住居跡をはじめ、鍛冶炉・溝跡等も確認されている。古代期における遺跡範囲は広範囲に渡ることが予想され、遺跡西側の発掘調査が待たれる。秋田県内の主要遺跡では、官人の墓と思われる岩野山古墳群（五城目町）・丘陵上に立地する古代城柵官衙遺跡である秋田城跡（秋田市）・同じく古代城柵官衙遺跡とされる払田柵跡（仙北町・千畑町）などがあげられる。

中世（1192～1603年／ここでは鎌倉・室町・安土桃山時代とする）については、発掘調査例や文献資料も少ないため、本遺跡周辺を含めた森吉・阿仁地方の様相は不明な点が多い。初期には鎌倉幕府による奥州討伐の軍功により、比内地方の地頭職として土着した浅利氏配下にあったと思われるが、推定の域を出ない。また、室町時代中期頃（1450年頃）から森吉町米内沢地区に居城を構えていた嘉成氏が森吉・阿仁地方一帯を治めていたと言われている。嘉成氏は能代市檜山を拠点とした、いわゆる檜山安東氏配下になったとされており、徐々に檜山安東氏の勢力圏が浸透していったと思われる。雄物川河口の湊（秋田市土崎）・米代川河口の能代という二大港を押さえていた安東氏が、巨額の財源となる森吉・阿仁地方の鉱物地下資源や木材を獲得しようとしたのは当然であろう。比内・大館を含んだ周辺地域の利権を巡る浅利氏（背後に南部氏）と安東氏の争いは16世紀末に安東氏に軍配が上がるが、大館を攻略する際に米内沢城主嘉成右馬頭の援護を受けたとされる。檜山安東氏が森吉地域

に影響力を及ぼしていた証しと思われる。当期における周辺の遺跡としては、いわゆる「中世城館」が森吉町阿仁前田地区に立地し、前田館・高館・花館・天館等がある。また、小又川沿いの根森田地区には仲ノ又館があり、空堀や見張り台跡が確認されている。いずれも、築館年代・館主等は不明である。前述した嘉成氏の居城は阿仁川流域の米内沢城や根小屋館などが推定地とされ、米内沢城の可能性が高いとされる。森吉山ダム建設事業区域内ではこのような城館跡は確認されていないが、森吉家ノ前Ａ遺跡で多数の掘立柱建物跡を検出している。総柱型の建物が主体をなし、建物の重複より、中世前期から数期間に及ぶ変遷を想定できる。他にも箱薬研を呈する溝跡、木枠の井戸跡や竪穴状遺構を多数検出している。小又川流域では、当期において一定期間継続する大規模な集落の検出は初例である。また、森吉家ノ前Ｂ遺跡では室町時代後半に属すると推定される焼失竪穴住居跡１軒が検出され、鉄器や中世陶器が出土している。両遺跡に近接する本遺跡においても、15世紀前半（室町時代半ば）に位置づけられる竪穴状遺構１基や中世末期と思われる掘立柱建物跡数棟（側柱型・石組炉を伴うものもあり）が検出されており、当期の森吉町森吉地区においては、長い断続期間を置かずに一定規模の集落が存続していたと推定される。森吉・阿仁地方に豊富な鉱石や木材及び生産用器材等を運ぶ、物資流通経路上の一拠点だった可能性が高い。秋田県内の主要遺跡では、寺院遺跡である矢立廃寺跡（大館市）・戦国期の山城跡である檜山安東氏城館跡（能代市）・脇本城跡（男鹿市）・区画化された集落跡である洲崎遺跡（井川町）などがあげられる。

近世（1603年以降／ここでは江戸時代とする）に至ると、徳川幕府成立とともに秋田（安東）氏以下在来の諸大名が常陸国へ移封され、入れ替わりとして佐竹氏が秋田に入部する。佐竹氏は旧城地など各地に家臣を駐屯させ、支配体制を徐々に確立していった（米内沢城も駐屯地だったが、1615年の一国一城令により支城ではなくなった）。大館城を安東氏から回復していた浅利氏勢力も押さえられ、比内地方を中心とする県北部は文字通り藩直轄支配となる。この直轄体制の浸透下、各地の土豪勢力は急速に吸収されていき、佐竹氏＝秋田藩は支配体制を確固たるものとしていった。強固な佐竹氏直轄体制のもと、1614(慶長19)年阿仁金山・1670(寛文10)年阿仁銅山開坑が行われ、森吉・阿仁地方は秋田藩の藩経営上の重要区域となる。特に阿仁銅山の銅は幕府の海外貿易（長崎貿易）決済を支えていた、いわゆる「公儀御用銅」として重要視された。鉱山経営には精錬用の薪と木炭が重要であるが、森林資源に富む森吉山を中心とした森吉・阿仁地方周辺は、鉱山用用材を産出できる一大地域であった。これら精錬用薪炭などは、舟運・牛馬・人力等によって阿仁鉱山まで運搬された。一般平民が鉱山と関わるのはこの部分のみであり、藩としては年貢収入の根幹である主穀生産の減産を危惧し、平民が鉱山労働者になることを禁じている。小又川流域においても、この阿仁鉱山との経路上の関わりを主要な背景として、藩政期に入ってから現在の原型となる集落群が谷間の中のわずかな平地に築かれていった。記録によれば、1650(慶安３)年時点において、本遺跡周辺の森吉村には92戸・570人が居住していたことが記されている。当期における周辺の遺跡は、二重鳥Ｇ遺跡・日廻岱Ａ遺跡・日廻岱Ｂ遺跡・深渡Ａ遺跡などがあり、いずれの遺跡でも掘立柱建物跡が検出されている。直家が中心であり、物資・家畜小屋と思われる付属屋が付くものもある。本遺跡においても、近世の掘立柱建物跡が数棟検出されている。阿仁鉱山の隆盛を背景にした集落・拠点形成が、本遺跡周辺においても段階的に行われていたことは想像に難くない。秋田県内の主要遺跡では、佐竹義宣公築城の久保田城跡（秋田市）・上級武家の生活を垣間見せる東根小屋町遺跡（秋田市）などがあげられる。

上述にあるように、本遺跡を含むこの地域一帯は、遅くとも縄文時代前期以降から小規模な集落が断続的に営まれて近代に至ったという経緯がうかがえる。本遺跡に限って言えば、遅くとも15世紀前半（室町時代半ば）には生活空間として機能していたことは確実であり、幾度かの断続と変容を経ていると言えよう。

《第２章　参考文献》

田口勝一郎・塩谷順耳・冨樫泰時・松渕真洲雄　『図説　秋田県の歴史』　河出書房新社　1988(昭和63)年

塩谷順耳・冨樫泰時・熊田亮介・渡辺英夫・古内龍夫　『県史５　秋田県の歴史』　山川出版社　2001(平成13)年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

藤原優太郎　『森吉山麓風土記　ブナとモロビの里』　モリトピア選書３
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

秋田県農政部農地整備課　『大野台開発計画区域　土地分類基本調査　米内沢』　1978(昭和53)年

秋田県土木部河川課　『あきたの河川と海岸』　1998(平成10)年

秋田県建設交通部河川課　『あきたの川』　2003(平成15)年

秋田県教育委員会　『秋田ふるさと紀行ガイドブック　史跡・考古編』　1999(平成11)年

秋田県教育委員会編　『秋田の史跡・考古』　カッパンプラン　2004(平成16)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991(平成３)年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財報告書第86集　1981(昭和56)年

秋田県教育委員会　『上野遺跡　－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
秋田県文化財報告書第222集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財報告書第270集　1997(平成９)年

秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報20（平成13年度）』　2002(平成14)年

秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報21（平成14年度）』　2003(平成15)年

秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報22（平成15年度）』　2004(平成16)年

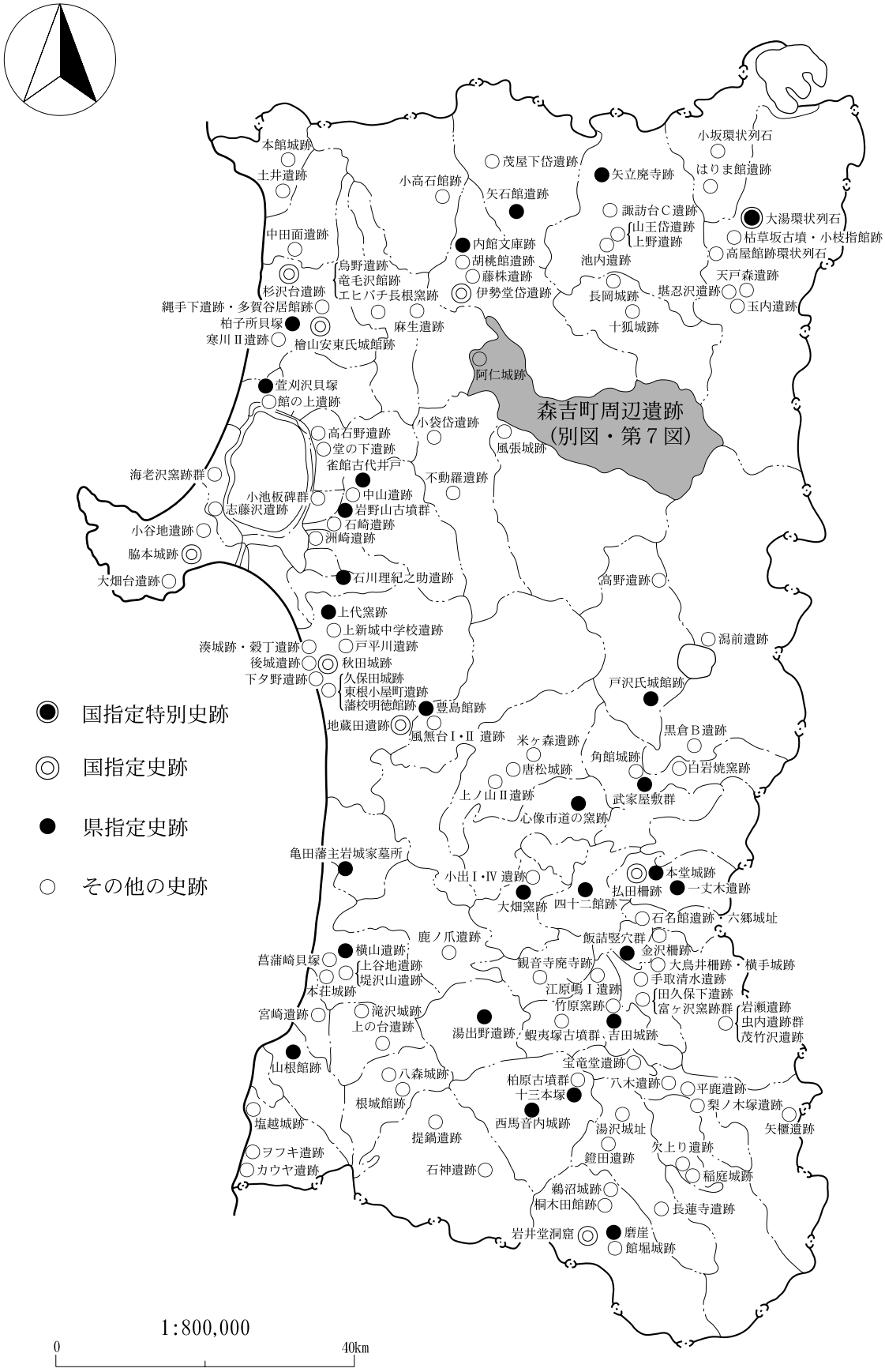
森吉町教育委員会　『平成８年度 埋蔵文化財発掘調査報告書　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』
1997(平成９)年

森吉町教育委員会　『平成10年度 埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ・Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』　1999(平成11)年

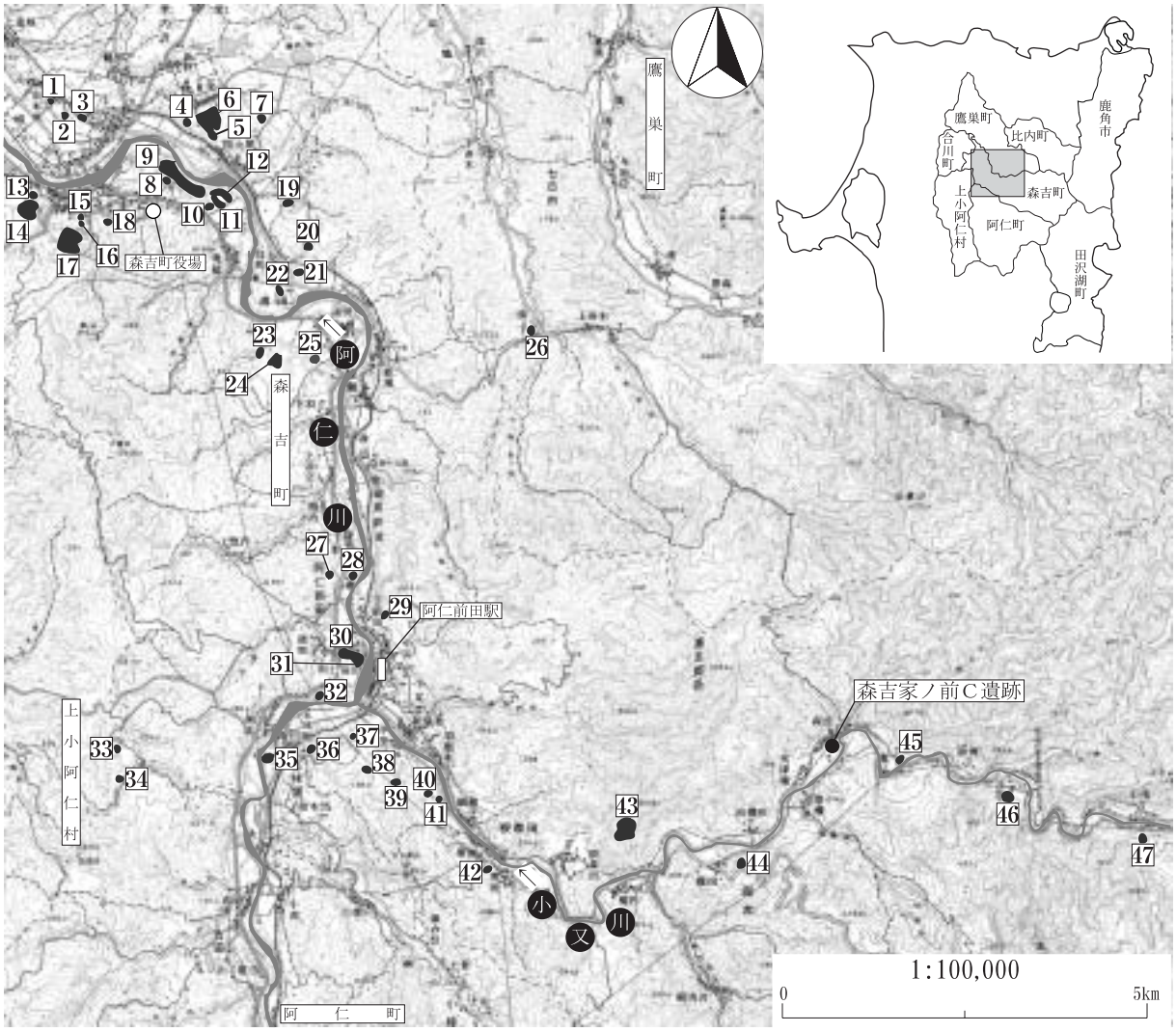
森吉町教育委員会　『平成12年度 埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』　2002(平成14)年

森吉町教育委員会　『平成13年度 埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｃ・Ｇ遺跡　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』　2003(平成15)年

森吉町埋蔵文化財発掘調査委員会　『平成15年度 埋蔵文化財発掘調査概報　森吉Ｂ遺跡・二重鳥Ａ遺跡　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』　2004(平成16)年



第６図　秋田県内主要史跡概要図



第７図　森吉町周辺遺跡分布図

第２表　森吉町周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所　在　地	主な時代	遺　構　・　遺　物
1	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷3	縄文	縄文土器片、石匙
2	桐木岱Ａ	森吉町米内沢字桐木岱41～65	縄文	縄文土器片（晩期）、石器
3	桐木岱Ｂ	森吉町米内沢字桐木岱20～23	縄文	縄文土器片、土偶
4	長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文	縄文土器片（中期）
5	長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱56-1	縄文・弥生・古代	円形ピット、組石群、縄文土器片（前期・中期）、弥生土器片、土師器、石器
6	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	空堀
7	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器
8	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱 77-1	縄文・古代	縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器
9	狐岱	森吉町米内沢字狐岱88	縄文・古代	竪穴住居跡（縄文・古代）、土坑、配石墓、縄文土器片（前期・中期・晩期）、土師器
10	山崎	森吉町米内沢字山崎57-１	縄文	土坑、配石遺構、縄文土器片
11	吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文・弥生	土坑、縄文土器片、弥生土器片
12	吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野5-1	古代	土師器片
13	御獄	森吉町米内沢字御獄62-1	古代	土師器片
14	御獄館	森吉町米内沢字高御獄2	中世	空堀、土塁
15	寺ノ上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文	縄文土器片（晩期）、石鏃、石匙
16	寺ノ上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	古代	土師器片
17	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5	中世	空堀、土塁、井戸跡
18	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森52-57	古代	土師器片
19	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50-1	縄文	縄文土器片
20	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文	縄文土器片（後期）
21	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文	縄文土器片（晩期）
22	白坂	森吉町浦田字白坂上岱19-22	縄文	竪穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器（後期・晩期）、岩偶、石器、土製品
23	愛宕堂	森吉町浦田字稲荷沢40	縄文	縄文土器片（中期）、石器破片
24	浦田館	森吉町浦田字愛宕堂下44	中世	館跡
25	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂3	縄文	縄文土器片（前期・中期）、石器
26	若木岱	鷹巣町七日市字若木岱9-2	縄文	縄文土器片、石器
27	焼山	森吉町阿仁前田字道行沢136-1	縄文	縄文土器片
28	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片
29	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片・石器
30	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	館跡
31	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片（前期・中期）
32	陣場岱Ⅰ	森吉町阿仁前田字陣場岱40-1	縄文	縄文土器片（前期・中期）
33	冷水沢Ａ	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
34	冷水沢Ｂ	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
35	五味堀	森吉町五味堀字五味堀1	縄文	縄文土器片、石器
36	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45-46	縄文	縄文土器片（晩期）
37	五味堀高屋敷	森吉町五味堀字下夕大久保岱174	縄文	縄文土器片
38	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片（後期）、独鈷石
39	小又小平里Ａ	森吉町小又字涌坪74	縄文	縄文土器片（後期）、石器
40	小又小平里Ｂ	森吉町小又字上岱9	縄文	縄文土器片（後期）、石器
41	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片（後期）、石器
42	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢13	縄文	土坑、縄文土器（早期～晩期）、石器
43	仲ノ又館	森吉町根森田字仲ノ又75	中世	空堀
44	様田	森吉町森吉字様田二重鳥131	縄文	縄文土器片、石器
45	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬31-1	縄文	縄文土器片（前期）
46	深渡	森吉町森吉字深渡家の前	縄文	縄文土器（前期～晩期）、石組炉
47	向小滝	森吉町森吉字向小滝上段613	縄文	縄文土器片（晩期）、石器

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概要

森吉家ノ前Ｃ遺跡は、1995(平成７)年度に秋田県教育委員会が行った遺跡範囲確認調査で確認された遺跡である。その結果、主に中世及び近世期の集落跡であることが判明した。生活立地面は両時期ともに遺跡内に２段ある段丘面のうち、高位段丘面上の平坦面であり、標高は152m前後である。

時代的に最も古いものでは、縄文時代前期の土器片が極少量出土している。中期～晩期にかけても遺物が極少量出土しているが、集落形成の地ではなかったと思われる。遺物も出土しない弥生・古墳・古代の各時代においても同様である。確実に集落を前提とする生活痕跡が認められるのは、中世（15世紀前半）に入ってからである。

中世の集落跡を形成すると思われる遺構として、竪穴状遺構・掘立柱建物跡を確認している。竪穴状遺構は１基のみの検出で、建物の長軸方向は、北西－南東を向いている。また、検出した掘立柱建物跡13棟のうち、５棟が竪穴状遺構と同方向の北西－南東を長軸方向とするが、竪穴状遺構との時期的な相関性は薄いようである。掘立柱建物跡はすべて側柱型であり、石組炉を伴うものもある。各遺構の規模・形状と遺構内及び遺跡内の出土遺物より、中世半ば～後半期に小規模な集落が営まれていたと推定できる。

近世の集落跡を形成すると思われる遺構として、掘立柱建物跡を確認している。前述したように、建物の長軸方向別に時期的な相関性はあまりなく、各掘立柱建物跡間の詳細な時期差は不明である(近・現代の物資小屋のようなものも混在すると思われる)。各遺構の規模・形状と遺構内及び遺跡内の出土遺物より、近世初期に小規模な集落が営まれていたと推定できる。

以上より、森吉家ノ前Ｃ遺跡は主に中世半ば～近世初期にかけて、ほぼ同一の地点で小規模な集落が断続的に営まれていたものと想定できる。掘立柱建物跡の柱間寸法に明瞭な差違があることも、集落が複数回営まれた事実と断続期間があったことを示していよう。

第２節　調査の方法

１　発掘調査

調査の方法はグリッド法で行った（Ｐ18／第８図参照)。対象面積全域にグリッドを設定するため、建設省（現国土交通省）打設の３級基準点No.12を原点の基準杭とした。この基準杭を通る日本測地系平面直角座標第Ｘ系の南北方向に南北基準線Ｘ軸を設定した。また、この基準線と直交して原点の基準杭を通る線を東西基準線Ｙ軸とし、これらＸ・Ｙ軸の両軸に４×４ｍの方眼メッシュを割り付けた。その原点をＭＡ50とし、東西方向には、Ｘ軸を西に４ｍ進むごとにＭＢ・ＭＣ・ＭＤ・・・と正順に、東に４ｍ進む毎にＬＴ・ＬＳ・ＬＲ・・・と逆順にそれぞれＡ～Ｔまでの２文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Ｙ軸を北に４ｍ進むごとに51・52・53・・・、南に４ｍ進

むごとに49・48・47・・・と漸減する２桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るＸ軸とＹ軸の組み合わせで、ＭＡ50・ＭＢ51・ＭＣ52・・・のように呼ぶこととした。

遺構は種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。番号登録の後、遺構と断定することのできなくなったものは、これを欠番としている。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２または４分割法による精査を行った。遺物は、原則的にグリッド単位で取り上げ、グリッド名、出土した層位、種別、年月日を記録した。遺構内の遺物は基本的に簡易遣り方測量によって計測・記録して取り上げた。記録した項目は、１．遺物番号、２．出土グリッド、３．出土層位、４．種別、５．Ｘ座標、６．Ｙ座標、７．Ｚ座標、８．取り上げ年月日である。平面図及び断面図は、原則として１/20で作成し、炉跡などは細部状況を表すために適宜１/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、基本的にはグリッド杭を基準とする簡易遣り方測量によったが、調査範囲やコンター図はトータルステーションによる機械測量を行った。断面図には土色・土性・しまり・粘性・混入物等を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。

写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、発掘調査終了の際には全景撮影のためにラジコンヘリによる空中撮影を実施した。写真は､35㎜カメラにモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）フィルムを装着し、必要に応じてネガカラーも加えている。

２　室内整理

遺構以外の遺跡位置図等の挿図については、Adobe社「Photoshop5.5」・「Illustrator8.0」を用いて作成した。遺構の挿図については、現場で作成した平面図・断面図を原図とし、トータルステーションを用いて計測したものはデジタル処理した。使用したプログラムは、株式会社シン技術コンサル｢遺跡管理システム｣である。原図をスキャニングし、｢遺跡管理システム｣で平面図と断面図を組み合わせて掲載挿図を作成した。その後、「Illustrator8.0」を用いて修正・編集作業を行った。遺物については、洗浄・注記の後、本報告書に掲載する遺物の選別を行い、基本的に１/１で実測図を作成した。その後、ページレイアウトにあたって適宜縮尺変更を行い、トレース作業を実施した。一部は「Illustrator8.0」を使用した。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行った。遺物写真撮影はデジタルカメラを用い、「Photoshop5.5」・「Illustrator8.0」で修正・編集作業を行った。最後に、主として「Illustrator8.0」でページレイアウトを行い、入稿した。

第３節　発掘調査の経過

第１週（５月13日～16日）

発掘機材、ベルトコンベアーの搬入、発掘調査事務所周辺の環境整備作業を実施。遺跡範囲確認調査時のトレンチ内を順次精査。また、基本土層ベルトの設定を行う。

第２週（５月19日～23日）

遺跡範囲確認調査時のトレンチ内精査及び調査区北部付近の粗掘りを進める。基本土層ベルトの断面写真撮影・実測を行う。21日杉渕北調査課長、22日大野所長来跡。

第３週（５月26日～30日）

粗掘りを調査区中央部に進める。調査区中央部やや西側に土坑群及び掘立柱建物跡２棟を確認し、各遺構の精査開始。遺物の検出は極めて少ない。

第４週（６月２日～６日）

調査区北部はベルトコンベアー設置位置を除き、粗掘り・精査をほぼ終了。調査区中央部から南部の粗掘り・精査に移る。調査区中央部以外の遺構・遺物の分布密度は低い。表土除去時に確認していた調査区南西端部の竪穴状遺構の精査開始。新たに数棟の掘立柱建物跡を確認。３日杉渕北調査課長、４日秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室藤澤・磯村学芸主事来跡。

第５週（６月９日～13日）

調査区全体の粗掘りを終了、それに伴いベルトコンベアーを遺跡内から撤去。掘立柱建物跡・土坑の精査続行、また調査区北部寄りに炉を伴う掘立柱建物跡を確認。調査区中央部を中心に点在する柱穴様ピットが建物跡に直結するかどうかを随時検討。

第６週（６月16日～19日）

竪穴状遺構の精査終了。土坑・掘立柱建物跡の精査続行。16日前田基幹集落センターで発掘調査作業員健康診断。調査終了の目途が見えてきたため、17日より近接する森吉家ノ前Ａ遺跡へ発掘調査作業員18名を派遣。

第７週（６月23日～27日）

新たに確認した掘立柱建物跡や残った遺構の精査続行。炉を伴う掘立柱建物跡の精査終了。24日より、森吉家ノ前Ａ遺跡へ発掘調査作業員11名を追加派遣（計29名）。この週より、調査員石川、調査・研究員藤田、山田が不定期で森吉家ノ前Ａ遺跡へ勤務。

第８週（６月30日～７月４日）

計10人体制での調査。掘立柱建物跡の精査続行と庇の有無等の建物規模を再考。同時に柱穴様ピットの精査と建物跡になるかどうかの作業を進める。２日杉渕北調査課長来跡。３日森吉家ノ前Ａ遺跡見学会リハーサルに参加。

第９週（７月７日～11日）

新たに掘立柱建物跡を２棟確認。柱穴様ピットの精査続行。

第10週（７月14日～18日）

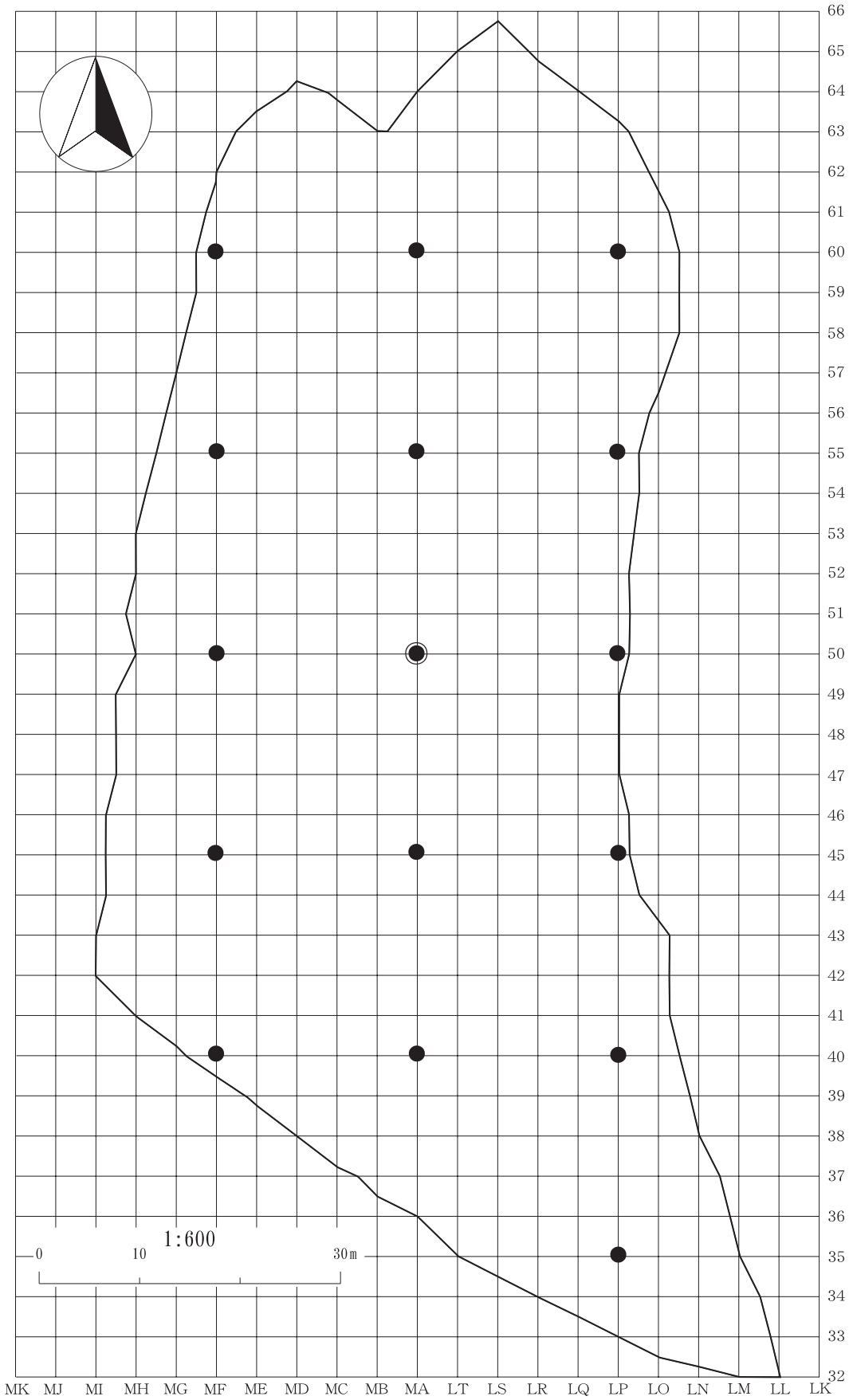
柱穴様ピットの精査続行。また、平成14年度に漆下遺跡で採取した土の洗浄を実施。15日杉渕北調査課長来跡。

第11週（７月22日～25日）

掘立柱建物跡の写真撮影を行う。23日～25日まで調査員・発掘調査作業員全員が森吉家ノ前Ａ遺跡へ勤務。

第12週（７月28日～８月１日）

29日に遺跡全体の空中撮影を実施。すべての遺構精査を終了。発掘現場の撤収作業を行う。29日秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室磯村学芸主事来跡。１日調査終了。


66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LN LM LL LK
1:600
0
10
30m

第８図　グリッド設定図

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

森吉家ノ前Ｃ遺跡では、基本土層ベルトを遺跡の北西－南東を横切る形で中央部付近に設定し、以下のように分層した。本遺跡が位置する区域一帯は、かつて水田として利用されており、さらに昭和40年代の耕地整理で全面的な削平を受けている。よって、発掘調査時において明確な遺物包含層は存在しなかった。基本層序の詳細は以下の通りである。

第Ⅰ層　10ＹＲ３/３　暗褐色土　層厚25㎝程度

〇耕地整理後の耕作土

〇しまりが弱く、ぼそぼそした土

〇下部の随所に地山ブロックや小礫が混入しており、大きく動かされた土であることが顕著である

第Ⅱ層　10ＹＲ３/１～３/２　黒褐色土　層厚20㎝程度

〇耕地整理前の耕作土

〇しまりが強く、ほとんど粘り気がない土

〇下部に鉄分が沈殿しており、水田利用の痕跡を証している

〇遺跡東側の広い範囲で第Ⅱ層は確認できず、昭和40年代の耕地整理が大規模であったことを明示している

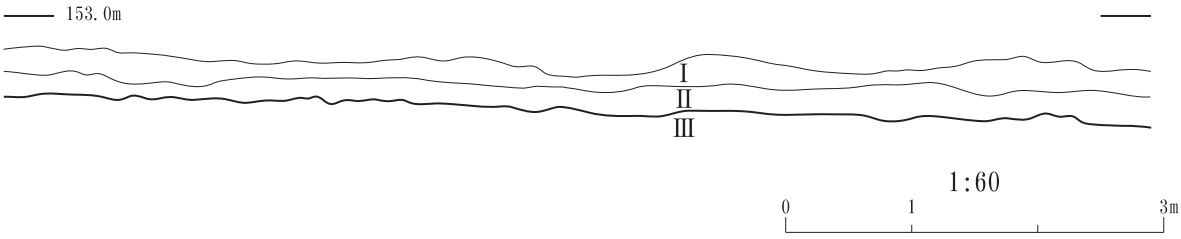
〇鉄分が沈殿する直下は地山層となり、遺物包含層の完全な削平が明瞭である

第Ⅲ層　10ＹＲ４/６　褐色土

〇地山砂礫質層

〇しまりがやや弱く、さらさらした砂礫層

〇遺構は本層の上面で確認した



第９図　基本層序図

第２節　検出遺構と出土遺物

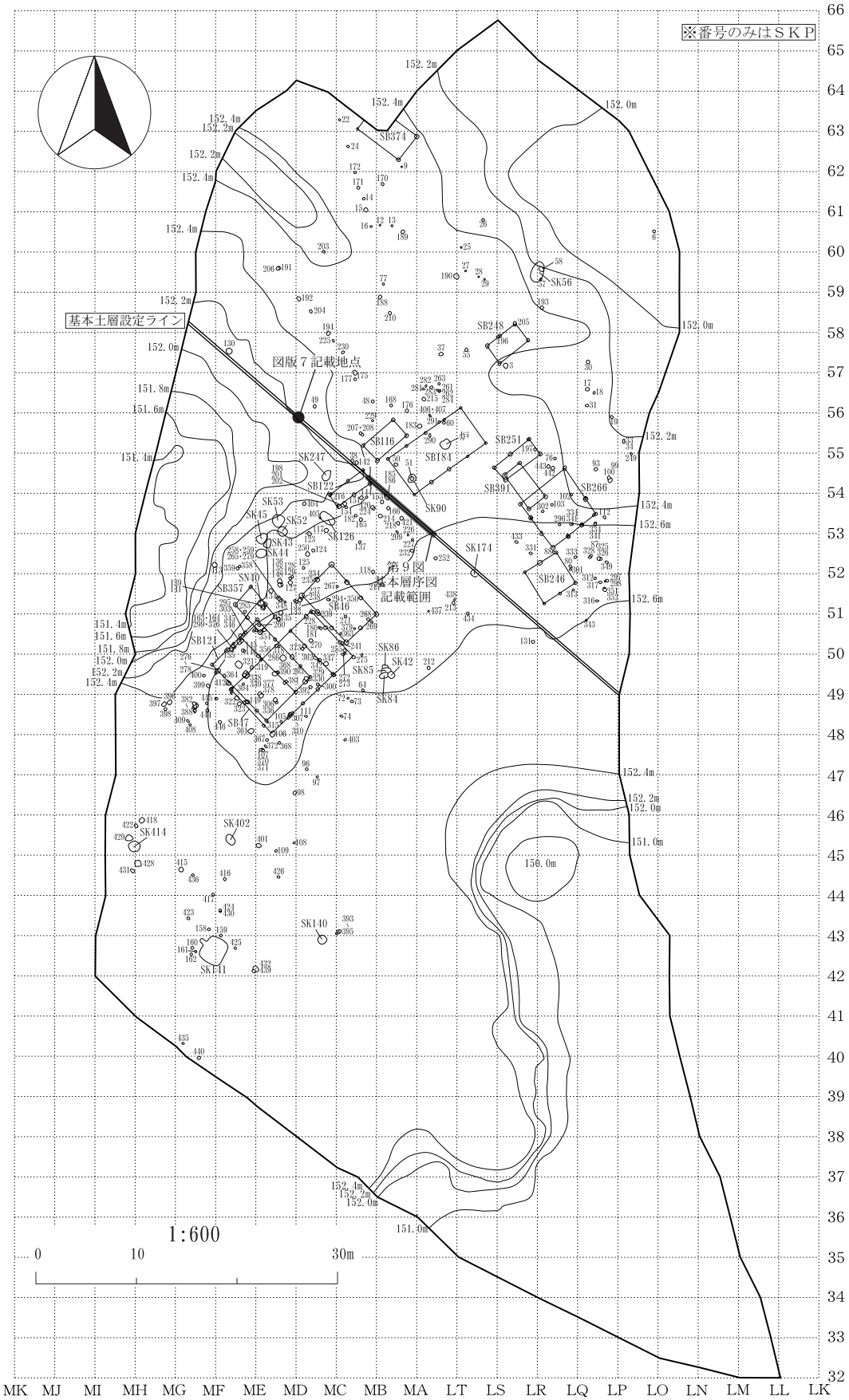
１　概要

○遺 構 数	竪穴状遺構１基	ＳＫＩ41
	掘立柱建物跡13棟	ＳＢ46・ＳＢ47・ＳＢ116・ＳＢ121・ＳＢ122
		ＳＢ184・ＳＢ246・ＳＢ248・ＳＢ251・ＳＢ266
		ＳＢ357・ＳＢ374・ＳＢ391
	焼土遺構１基	ＳＮ40
	土坑17基	ＳＫ42・ＳＫ43・ＳＫ44・ＳＫ45・ＳＫ52・ＳＫ53
		ＳＫ56・ＳＫ84・ＳＫ85・ＳＫ86・ＳＫ90・ＳＫ126
		ＳＫ140・ＳＫ174・ＳＫ247・ＳＫ402・ＳＫ414
	柱穴様ピット314基	
	計３４６基	

○分　　布　本遺跡が立地する段丘面は上下２面に分かれる。遺構検出面は標高152ｍ程の平坦な高位段丘面である。遺構の検出はすべてこの高位段丘面上である。主要な遺構は遺跡の中央部付近に分布するが、竪穴状遺構は遺跡の南西端部に位置する。また、遺跡の南東部一帯は標高150m弱の低位段丘面であり、高位段丘面とは1.8m程の段差がある。耕地整理により、高位段丘面と同高になるまで造成土が盛られていた。河原石が一面に広がっていて、旧河川跡の様相を呈している。よって、低位段丘面において遺構・遺物の検出はない。

○出土遺物　昭和40年代の耕地整理による全面的な削平により、遺跡内に明確な遺物包含層は存在しなかった。そのため、遺物出土量は極めて少なく断片的なものにとどまる。縄文土器・石器、中世陶器、近世陶器・磁器が出土している。すべて破片であり、完形のものはない（一部略完形あり）。また、近世銭貨（寛永通宝）が出土している。

○時　　期　全般的に時期確定が可能な材料に乏しい。しかし、出土遺物や遺構の形態等より、本遺跡が営まれた主要な時期は中世半ば～近世初期と推定できる。それ以上の時期細分は困難である。


※番号のみはＳＫＰ
基本土層設定ライン
図版７記載地点
第９図
基本層序図
記載範囲
1:600
0
10
30m
MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LN LM LL LK
66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32

第10図　遺構配置図

２　遺構と出土遺物

（１）竪穴状遺構

竪穴状遺構は遺跡の南西端部に１基のみ検出した。主要部は方形であり、張り出し部を付設する。本遺構の長軸方向は北西－南東方向を向き、出入り口と思われる張り出し部は北西側に付く。柱は壁沿いに計８基あり、中軸線上にはない。本遺構の機能を確証づける遺物の出土はなかった。

ＳＫＩ41　竪穴状遺構【第11図（Ｐ23）／図版２】

〔位　　置〕　ＭＦ42グリッドを中心に位置する。遺跡の南西端部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ正方形の一辺に、出入り口と思われる半楕円形の張り出し部が付く形をしている。長軸3.36m（張り出し部0.74mと方形部2.62m・北西－南東）、短軸2.84m（北東－南西）である。

〔堆　積　土〕　３層に分けられ、人為堆積である。２層の白色土（灰）は北側の一部にのみ分布し、周囲には比較的多めに炭化物を伴うが、焼土は確認していない。２層土は堆積面中位付近に広がっている。

〔　壁　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で12cmである。

〔底　　面〕　小礫の混じる地山面を底面としているため、全体に凹凸が激しい。

〔柱　　穴〕　底面から、計８基の柱穴を検出した。壁柱穴と考えられる。内２基は出入り口と思われる張り出し部の根元にあり、他の柱穴よりもやや大きめである。形態より、柱は角材を使用していたようである。

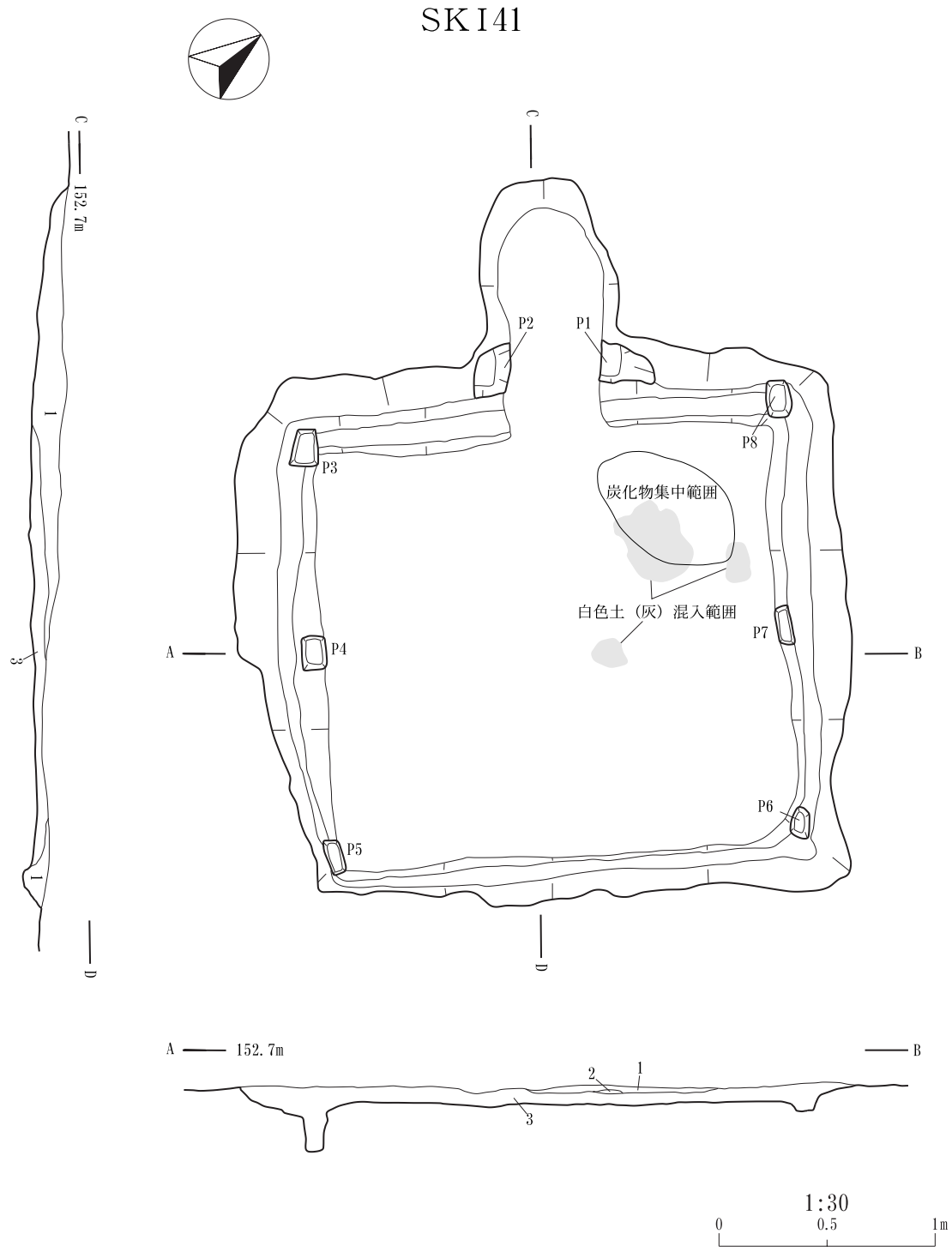
第３表　ＳＫＩ41竪穴状遺構内柱穴一覧表

番号	長径	短径	深さ	底面標高	備　考
Ｐ１	28cm	18cm	26cm	152.45m	出入り口柱穴
Ｐ２	30cm	16cm	35cm	152.47m	出入り口柱穴・上面に偏平礫
Ｐ３	14cm	12cm	22cm	152.21m	側柱柱穴
Ｐ４	16cm	11cm	13.5cm	152.25m	上面に小礫
Ｐ５	17cm	８cm	19.4cm	152.26m	側柱柱穴
Ｐ６	15cm	９cm	23cm	152.20m	側柱柱穴
Ｐ７	18cm	７cm	16cm	152.29m	
Ｐ８	17cm	12cm	20.6cm	152.19m	側柱柱穴・上面に偏平礫

〔周　　溝〕　全周している。幅５～15cm、深さ10～34cmである。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　中世半ばと思われる。放射性炭素年代測定では、15世紀前半の測定結果が出ている（第５章参照）。



SKI41

1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性弱	地山塊少量・炭化物微量混入
2	10YR7/1	白	しまりやや強	粘性弱	灰土
3	10YR2/1	黒	しまりやや強	粘性弱	地山粒微量・炭化物微量混入

第11図　ＳＫＩ41竪穴状遺構

（２）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、遺跡の中央部を中心に計13棟確認した。この13棟は、建物の長軸方向によって二分することができる。北西－南東方向のものが５棟、北東－南西方向のものが８棟である。各建物跡の長軸方向と、その築造・運営時期に相関関係が存するという立場をとるならば、長軸方向が明瞭に二分されることは、掘立柱建物跡が営まれた時期が少なくとも二時期は存在したことを暗示している。しかし、本遺跡検出の掘立柱建物跡間においては、建物の長軸方向別に時期的な相関性はあまりなく、各建物跡間の詳細な時期差は不明である。

ＳＢ46　掘立柱建物跡【第12・13図（Ｐ24・25）／図版４・７・９】

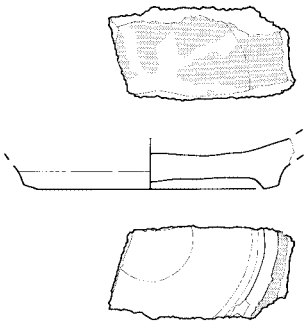
〔位　　置〕　ＭＣ51グリッドを中心に位置する。遺跡の中央部付近である。

〔平面形・規模〕　梁行２間×桁行３間の直家である。梁間の平均値は2.08m（6.86尺）、桁間の平均値は2.19m（7.23尺）である。桁行方向は北西－南東を向く。

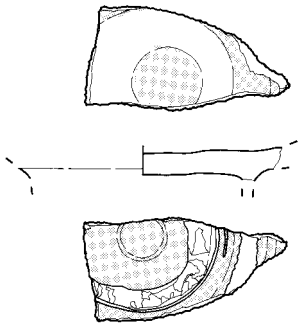
〔柱　　穴〕　ＳＢ46を構成する柱穴として、計10基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ46と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　計３点が出土した。Ｐ１より、16世紀初頭頃と思われる瀬戸系の灰釉陶器片が２点出土した。２点とも、小皿の底部である。同一の陶器片ではない。Ｐ３からも、16世紀初頭頃と思われる瀬戸系の灰釉陶器片が１点出土しており、小皿の口縁部である。

〔時　　期〕　桁間間尺を重視すれば、中世後半期と思われる。また、Ｐ１から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、15世紀後半の測定結果が出ている（第５章参照）。



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB46　RP1	陶器	瀬戸系	小皿	底部	内外面灰釉・16c



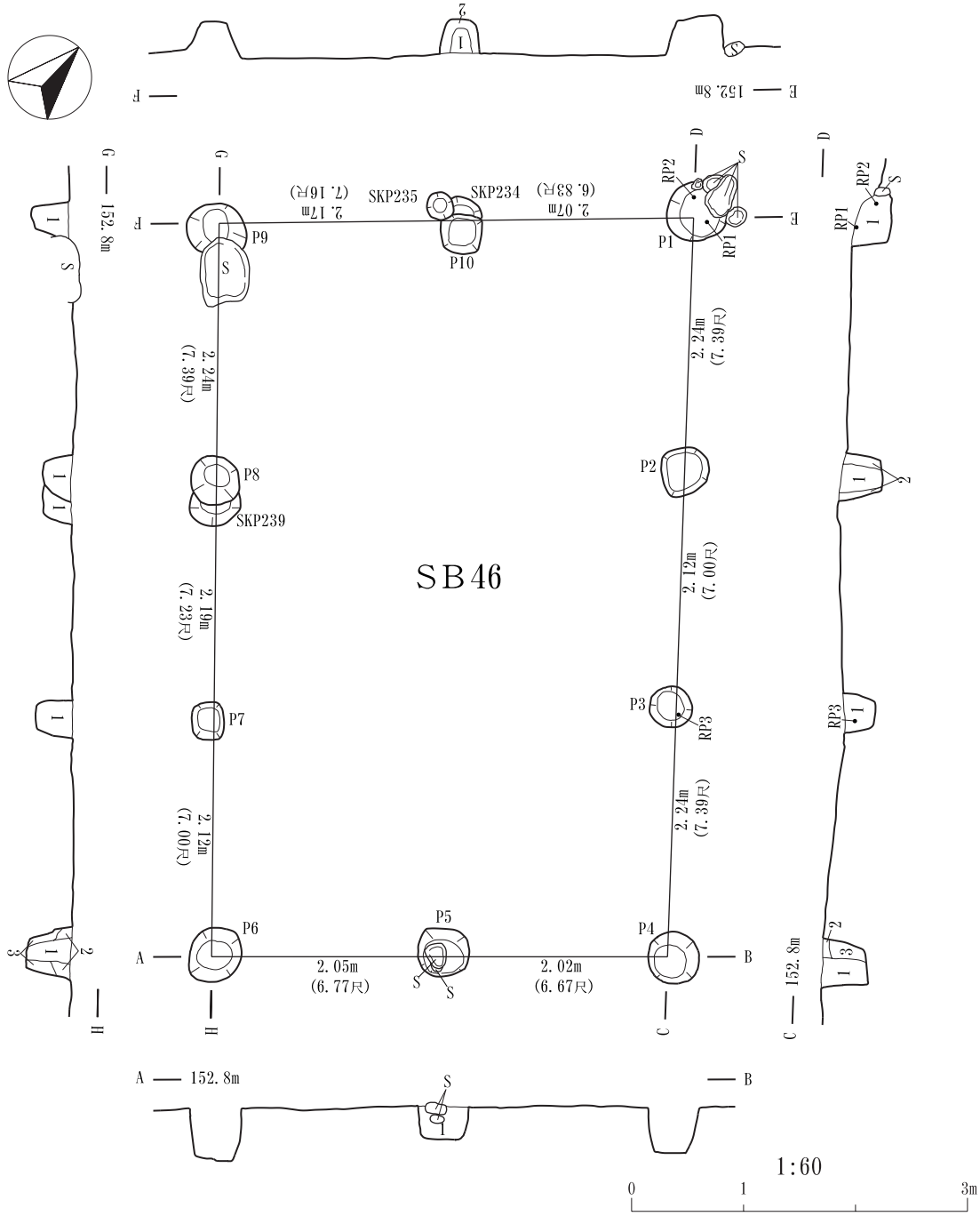
遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB46　RP2	陶器	瀬戸系	小皿	底部	内外面灰釉・和トチン跡・底部欠損・16c

遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB46　RP3	陶器	瀬戸系	小皿	口縁	内外面灰釉・16c

1:2

0　5　10cm

第12図　ＳＢ46掘立柱建物跡出土遺物



SB46

P1	1	10YR1.7/1	黒	しまり強	粘性やや弱	地山粒微量・炭化物微量混入	
P2	1	10YR2/1	黒	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR2/3	黒褐	しまり弱	粘性弱	地山土多量混入	
P3	1	10YR2/1	黒	しまりやや弱	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物微量混入	
P4	1	10YR2/1	黒	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊多量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR2/2	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊中量混入	
	3	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊中量・炭化物微量混入	
P5	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土微量・炭化物微量混入	
P6	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土少量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性やや弱	地山土中量混入	
	3	7.5YR3/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山土多量・小礫少量混入	
P7	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊少量・炭化物微量混入	
P8	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土少量・炭化物微量混入	
P9	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土微量・炭化物微量混入	
P10	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや強	地山土多量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性やや強	地山土中量・炭化物微量混入	

第13図　ＳＢ46掘立柱建物跡

ＳＢ47　掘立柱建物跡【第14・15図（Ｐ26・27）／図版４・９】

〔位　　置〕　ＭＣ49グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

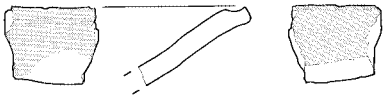
〔平面形・規模〕　梁行３間×桁行５間の直家である。北東の妻側に付属屋的な庇が付く。主屋の梁間間尺の平均値は2.01m（6.63尺）、桁間間尺の平均値は2.11m（6.96尺）である。付属屋的な庇の梁間間尺の平均値は2.03m（6.70尺）、桁間間尺の平均値は2.76m（9.11尺）である。建物全体の梁間間尺の平均値は2.29m（7.56尺）、桁間間尺の平均値は2.24m（7.39尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。Ｐ10とＰ11の間は倒木痕による撹乱を受けており、柱穴の存否は判断しがたい。

〔柱　　穴〕　ＳＢ47を構成する柱穴として、計18基の柱穴を確認した。Ｐ５・６を除いて、切り合っているピットがＳＢ47と関連するものかどうかは不明である。

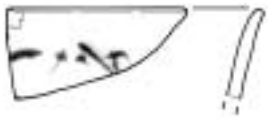
〔改　　築〕　Ｐ６のほうがＰ５より新しく、Ｐ６の延長上に庇の側柱であるＰ４が位置するため、北東の妻側に設けられた付属屋的な庇は、建て増しされたものと思われる。

〔出 土 遺 物〕　計２点が出土した。Ｐ２より、被熱のある近世陶器片が出土した。小皿の口縁部である。また、Ｐ13より、18世紀頃と思われる近世染付磁器片が出土した。小皿の口縁部である。

〔時　　期〕　主屋の桁間間尺を重視すれば、ＳＢ46よりも後代の中世末期～近世初期と思われる。



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB47　RP1	陶器	不明	小皿	口縁	内全面/外口縁部灰釉・被熱・時期不明



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB47　RP2	磁器	肥前系	碗	口縁	染付・18c

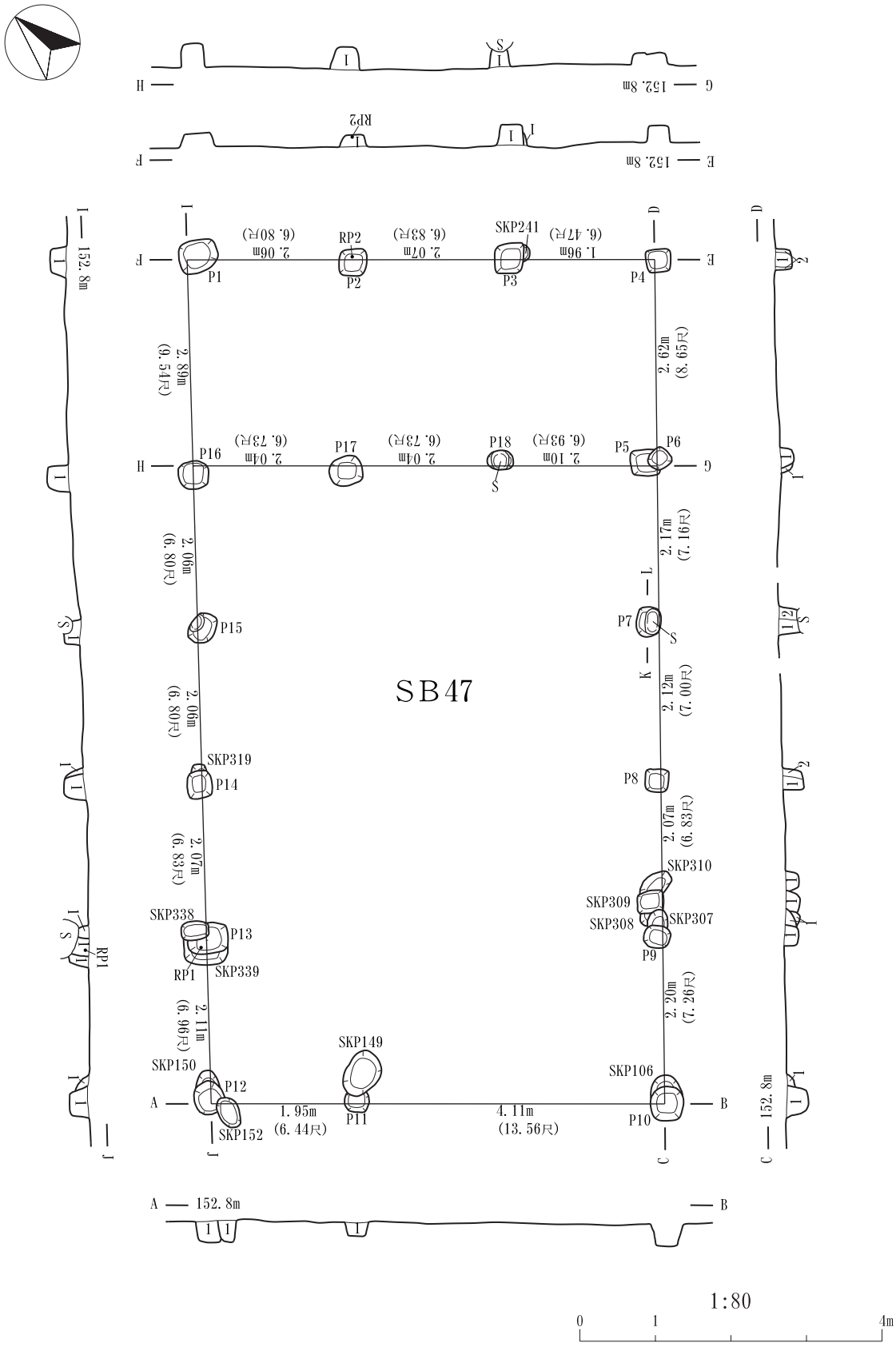
1:2

0　5　10cm

第14図　ＳＢ47掘立柱建物跡出土遺物

SB47

P1	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土少量・炭化物少量混入	
P2	1	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊少量混入	
P3	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性弱	地山土中量・炭化物微量混入	
P4	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや強	粘性弱	地山土少量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性弱	地山土多量混入	
P5	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊多量・炭化物微量混入	
P6	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊多量・炭化物微量混入	
P7	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊少量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊多量・炭化物微量混入	
P8	1	10YR2/3	黒褐	しまり弱	粘性弱	地山塊多量混入・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性弱	地山塊多量混入	
P9	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや弱	粘性やや強	地山塊少量・炭化物微量混入	
P10	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性弱	地山土少量混入	
P11	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性弱	地山土中量・炭化物微量・少礫少量混入	
P12	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性弱	地山土微量混入	
P13	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性やや強	地山塊微量・炭化物微量混入	
P14	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物微量混入	
P15	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊中量・炭化物微量混入	
P16	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性やや強	地山土微量混入	
P17	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物少量混入	
P18	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性やや強	地山土微量混入	



第15図　ＳＢ47掘立柱建物跡

ＳＢ116　**掘立柱建物跡**【第16・17図（Ｐ28・29）／図版５・７・９】

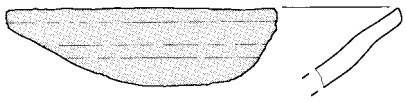
〔位　　置〕　ＭＢ55グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行１間の直家である。梁間の平均値は2.11m（6.96尺）、桁間の平均値は3.85m（12.71尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ116を構成する柱穴として、計４基の柱穴を確認した。

〔出 土 遺 物〕　計１点が出土した。Ｐ２より、18世紀前後の唐津産と思われる陶器片が出土した。

〔時　　期〕　出土遺物を重視すれば近世中期頃と思われるが、信憑性は薄い。



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB116　RP1	陶器	唐津	小皿	口縁	内外面灰釉・17～18c

1:2

0　5　10cm

第16図　ＳＢ116掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ121　**掘立柱建物跡**【第18～20図（Ｐ30・31）／図版４・７・９】

〔位　　置〕　ＭＤ49グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　梁行３間×桁行４間の直家である。北東側に一面庇が付く。主屋の梁間間尺の平均値は2.71m（8.94尺）、桁間間尺の平均値は1.94m（6.40尺）である。庇の梁間間尺の平均値は2.20m（7.26尺）、桁間間尺の平均値は1.94m（6.40尺）である。建物全体の梁間間尺の平均値は2.50m（8.25尺）、桁間間尺の平均値は1.94m（6.40尺）である。桁行方向は北西－南東を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ121を構成する柱穴として、計16基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ121と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　計１点が出土した。Ｐ２より、18世紀前後の近世磁器片が出土している。

〔時　　期〕　桁間間尺・出土遺物を重視すれば、近世前半～中期頃と思われる。また、Ｐ１から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、16世紀後半～17世紀前半の測定結果が出ている（第５章参照）。

ＳＢ122　**掘立柱建物跡**【第21図（Ｐ32）】

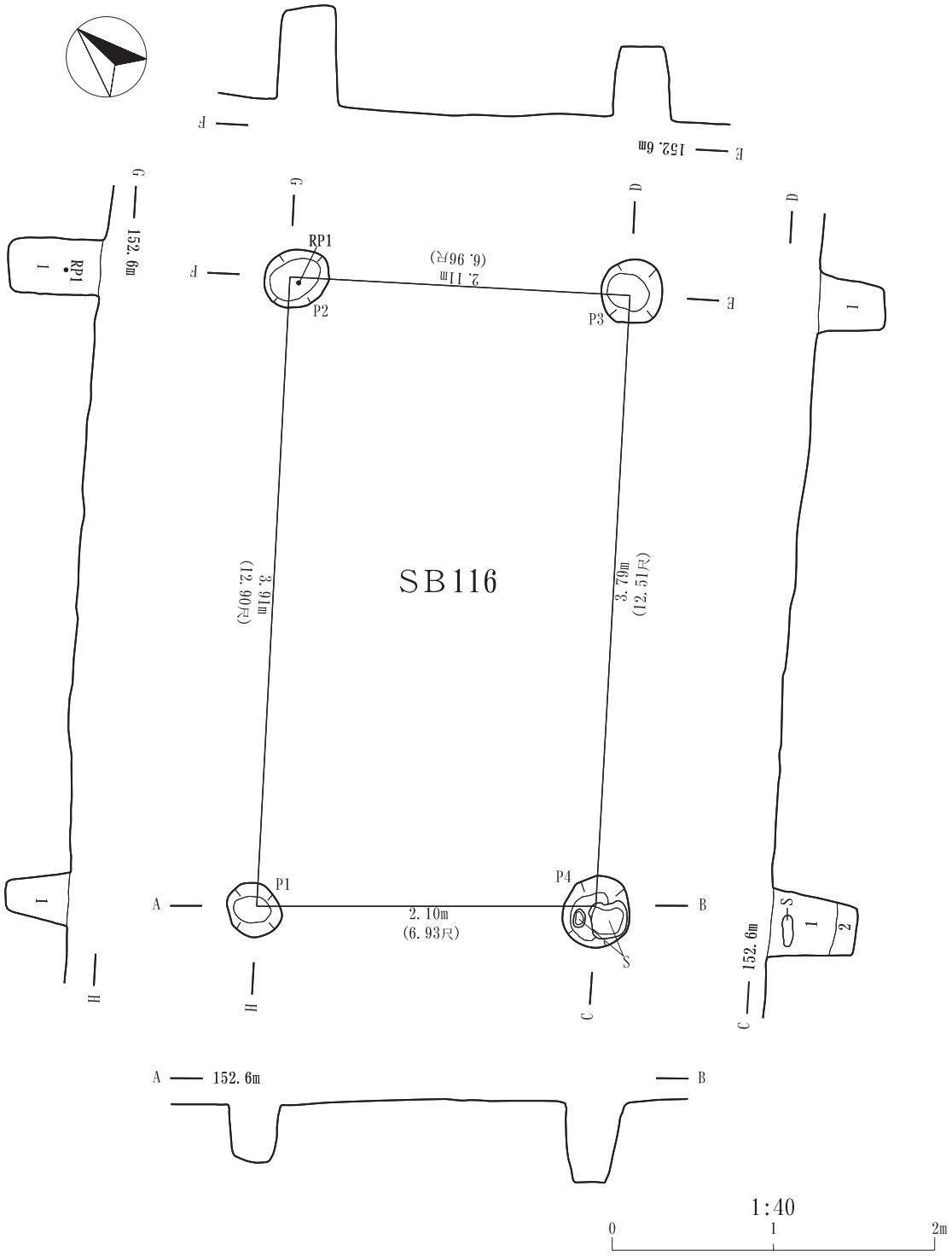
〔位　　置〕　ＭＢ54グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行２間の直家である。梁間の平均値は1.49m（4.92尺）、桁間の平均値は2.04m（6.73尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ122を構成する柱穴として、計６基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ122と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

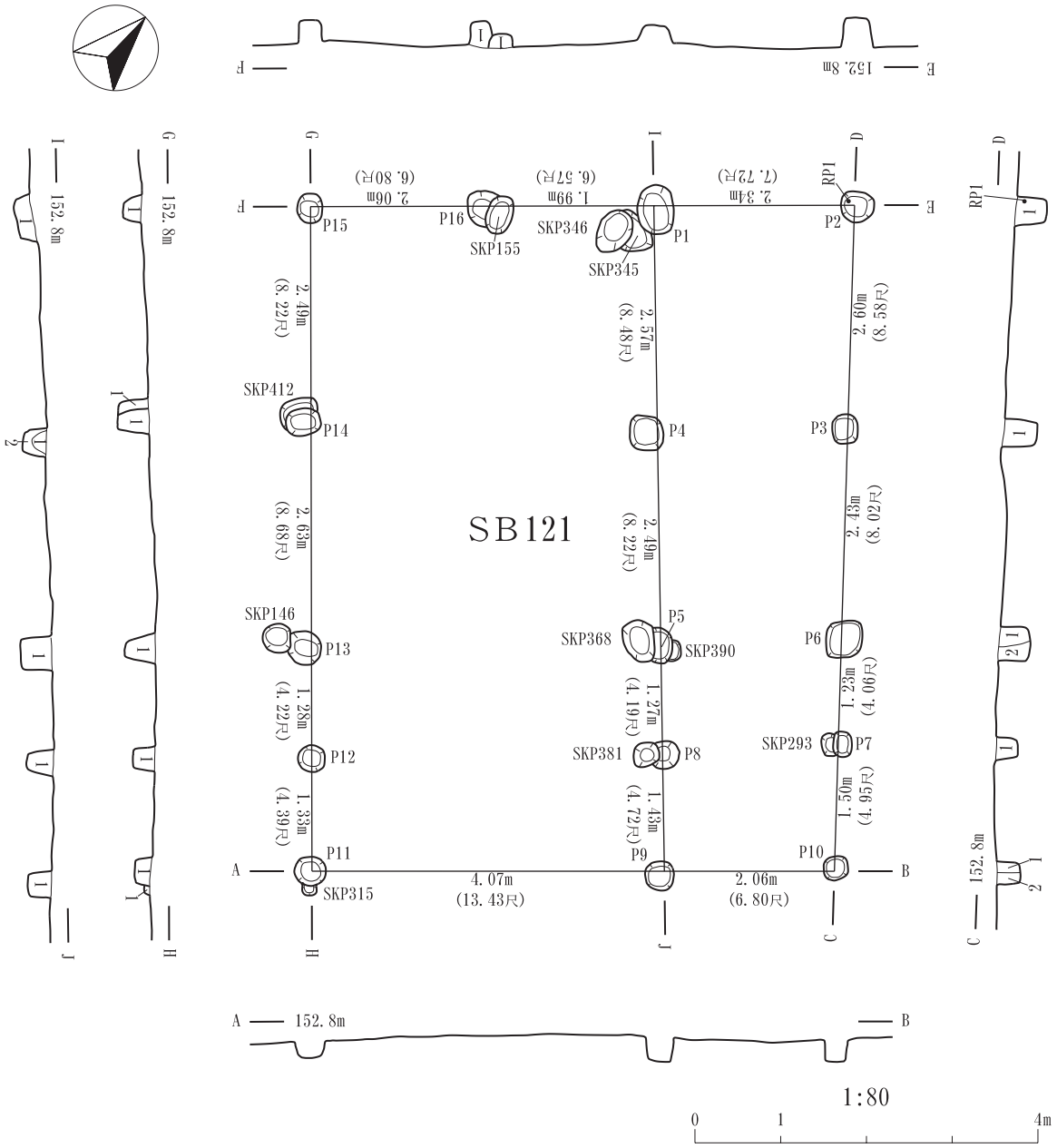
〔時　　期〕　不明。



SB116

P1	1	10YR3/4	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土少量混入
P2	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや強	粘性やや強	地山塊中量・砂粒中量混入
P3	1	10YR4/1	褐灰	しまりやや弱	粘性やや強	地山土多量混入
P4	1	10YR3/4	暗褐	しまりやや弱	粘性やや弱	鉄分多量混入
	2	10YR2/3	黒褐	しまり弱	粘性やや強	地山土少量・鉄分多量混入

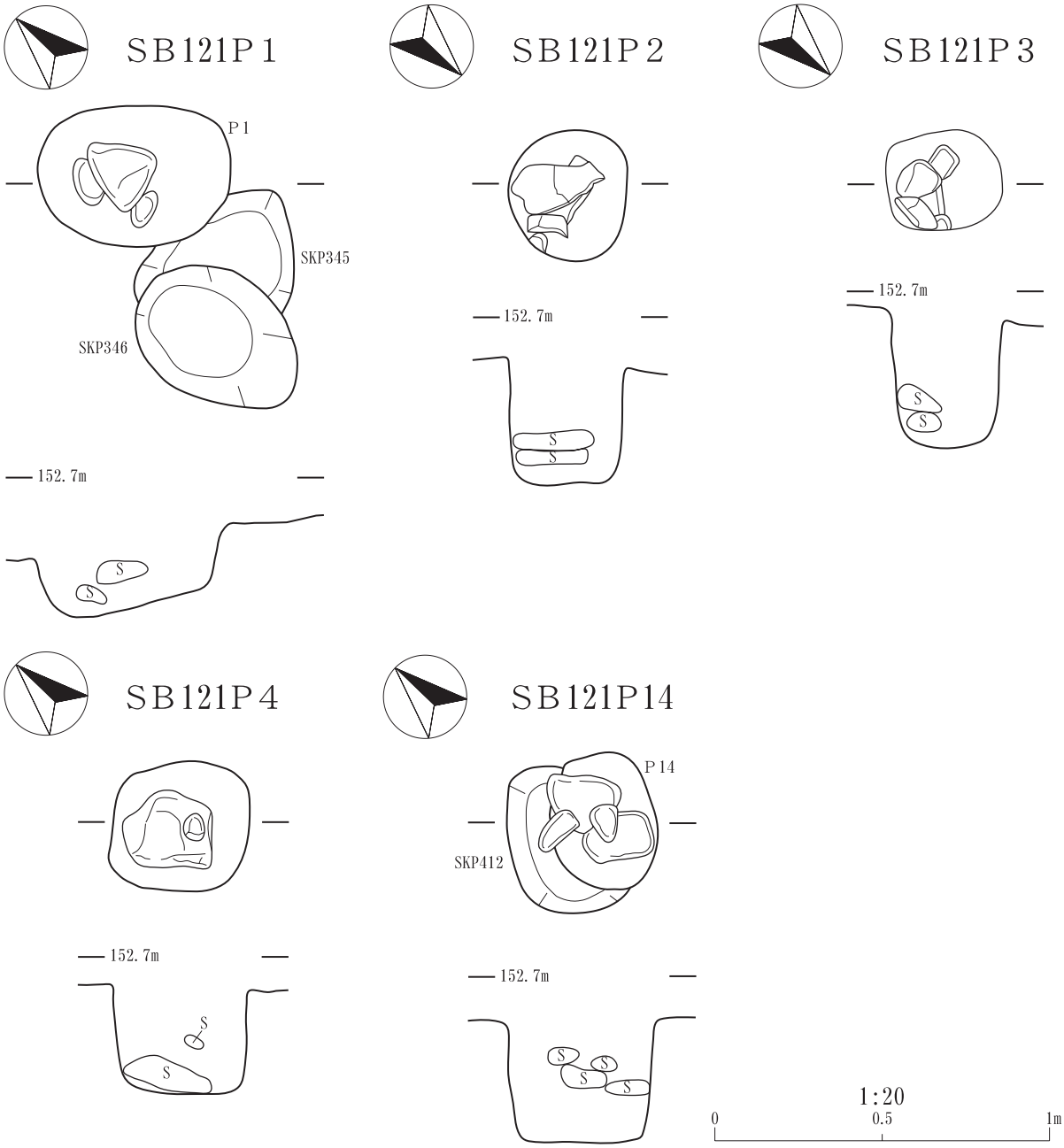
第17図　ＳＢ116掘立柱建物跡



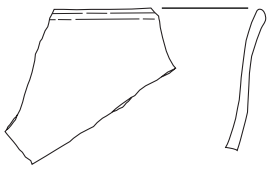
SB121

P1	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや強	粘性弱	地山土微量混入	
P2	1	10YR3/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山土微量微量混入	
P3	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山土中量・炭化物中量混入	
P4	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土中量・炭化物中量混入	柱痕跡
	2	10YR3/4	暗褐	しまりやや強	粘性弱	地山土中量・炭化物微量混入	
P5	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土微量・炭化物微量混入	
P6	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊中量混入	柱痕跡
	2	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山塊少量混入	
P7	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物微量混入	
P8	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊中量・炭化物微量混入	
P9	1	10YR3/4	暗褐	しまり強	粘性やや弱	地山塊微量・炭化物微量混入	
P10	1	10YR3/4	暗褐	しまり強	粘性やや強	地山土少量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性強	地山土微量	
P11	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土多量・炭化物微量混入	
P12	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性弱	地山土中量・炭化物中量混入	
P13	1	10YR3/4	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土多量・小礫中量混入	
P14	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性やや弱	地山粒微量・炭化物微量混入	
P15	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや弱	粘性強	地山塊微量混入	
P16	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性弱	地山土微量・炭化物微量混入	

第18図　ＳＢ121掘立柱建物跡



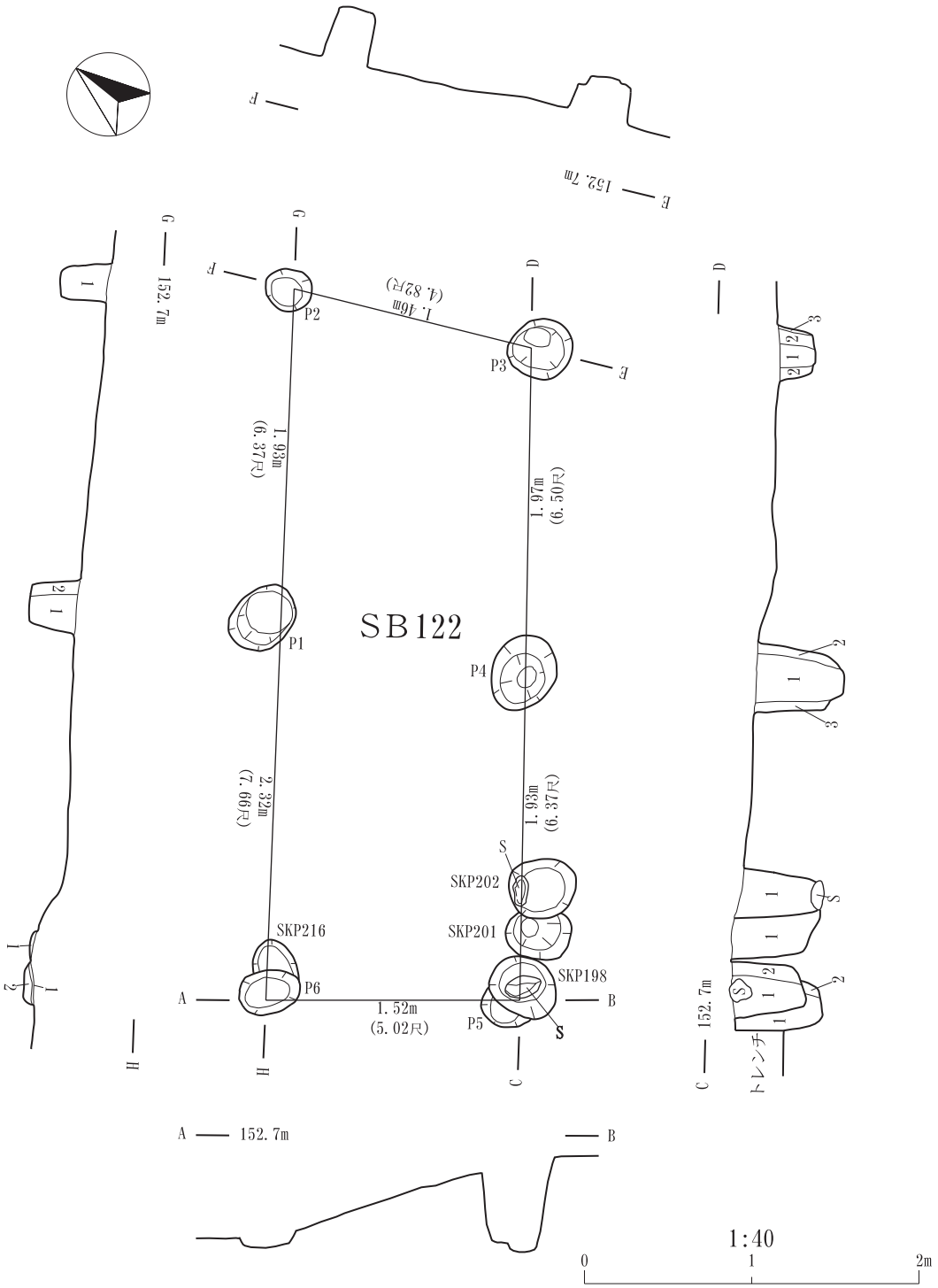
第19図　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ１～４・14



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB121　RP1	磁器	不明	碗	口縁	18c・雑器

1:2
0　5　10cm

第20図　ＳＢ121掘立柱建物跡出土遺物



SB122

P1	1	10YR3/2	黒褐	しまり弱	粘性弱	炭化物少量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土中量混入	
P2	1	10YR3/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	鉄分多量混入	
P3	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや強	炭化物少量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり弱	粘性やや強	地山土中量混入	
	3	10YR3/4	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山土多量混入	
P4	1	10YR3/2	黒褐	しまり弱	粘性やや弱	地山土微量・炭化物少量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土中量・炭化物微量混入	
P5	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性弱	地山塊微量・炭化物少量混入	柱痕跡
	2	10YR2/3	黒褐	しまり弱	粘性弱	地山土多量混入	
P6	1	10YR2/2	黒褐	しまり強	粘性弱	地山塊微量・炭化物微量混入	
	2	10YR4/4	褐	しまり弱	粘性弱	地山塊中量・炭化物微量混入	

第21図　ＳＢ122掘立柱建物跡

ＳＢ184　**掘立柱建物跡**【第22～24図（Ｐ33～35）／図版３・９】

〔位　　置〕　ＭＡ55グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北側である。

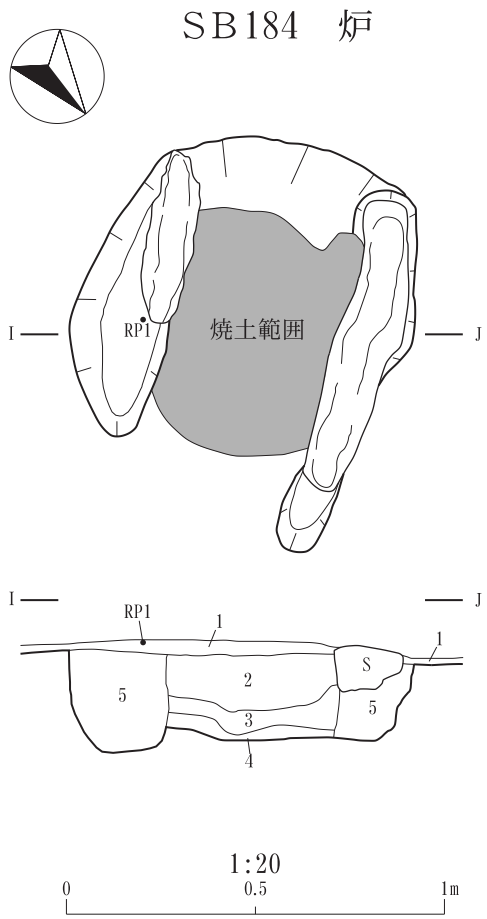
〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行４間の直家である。梁間の平均値は4.33m（14.29尺）、桁間の平均値は2.21m（7.29尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔　　炉　　〕　偏平で大きめな石を縦に２個据えている石組炉である。石の間が強く火を受けて焼けている。石自体も強い被熱を受けており、損傷が激しい。長軸99cm（北東－南西）、短軸86cm（北西－南東）である。堆積土は５層に分けられ、人為堆積と思われる。４層は明瞭な焼土層であり、恒常的に強い火が用いられた痕跡が明らかである。

〔柱　　穴〕　ＳＢ184を構成する柱穴として、計10基の柱穴を確認した。

〔出 土 遺 物〕　炉の覆土１層中より近世染付磁器片が出土したが、１層は旧耕作土である基本土層第Ⅱ層のため、本遺構との関連は薄い。また、炉より北西約1.2mの位置に砥石を確認した。関連性がうかがえるが、断定はできない。

〔時　　期〕　桁間間尺を重視すれば、中世期と思われる。炉下部出土の炭化材による放射性炭素年代測定では、16世紀後半の測定結果が出ている（第５章参照）。



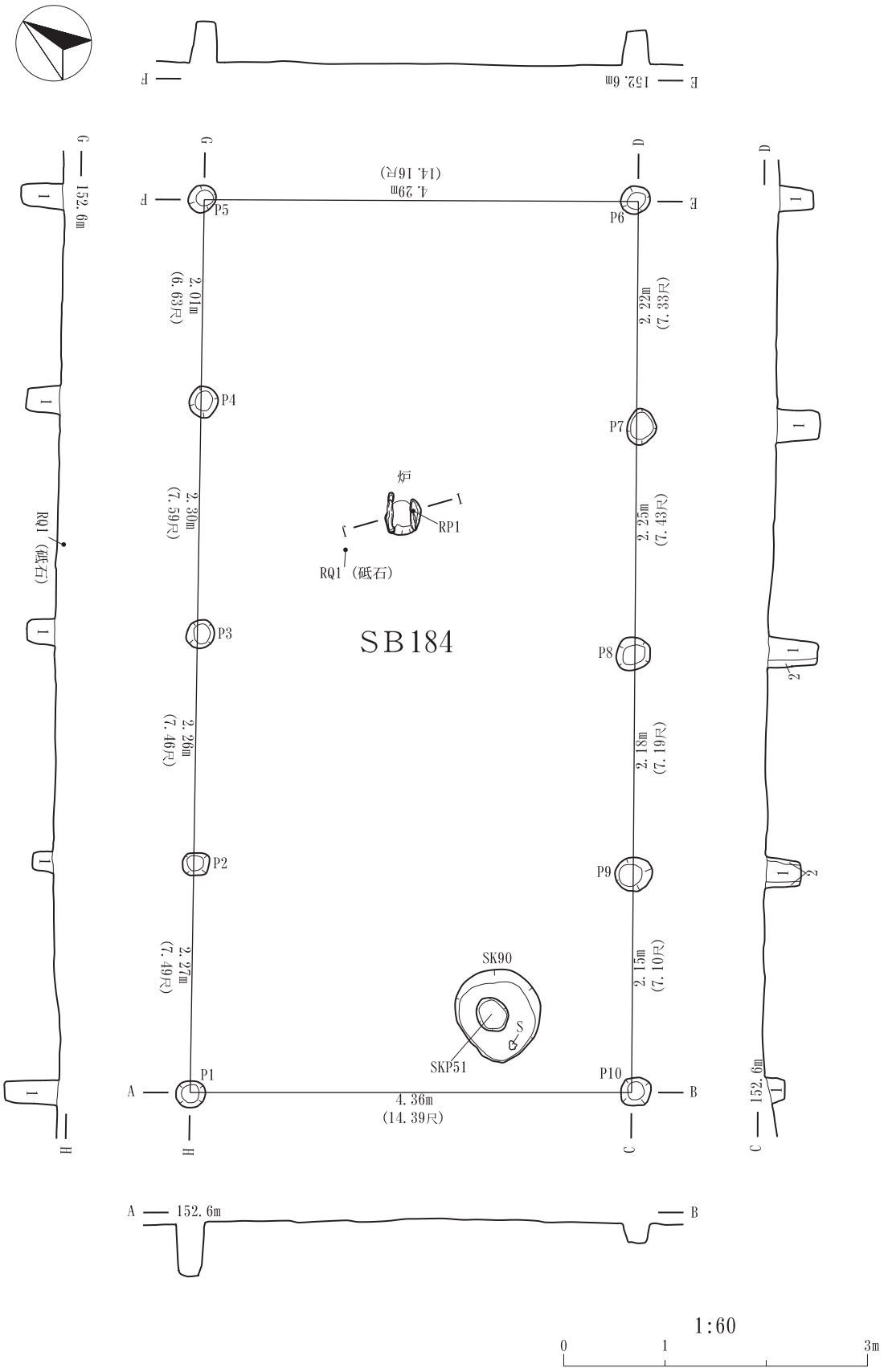
SB184

P1	1	10YR2/3	黒褐	しまり強　粘性弱 地山粒少量・炭化物微量混入	
P2	1	10YR3/1	黒褐	しまりやや強　粘性やや弱 地山粒微量・炭化物少量混入	
P3	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや弱　粘性強 炭化物微量・砂粒少量混入	
P4	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱　粘性やや強 地山塊中量混入	
P5	1	10YR4/4	褐	しまり強　粘性やや強 地山土少量混入	
P6	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや弱　粘性やや強 炭化物微量・鉄分微量混入	
P7	1	10YR3/2	黒褐	しまり弱　粘性やや強 地山粒微量混入	
P8	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや強　粘性やや強 炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/4	暗褐	しまりやや強　粘性やや強 地山土微量混入	
P9	1	10YR3/2	黒褐	しまりやや強　粘性やや弱 炭化物微量・鉄分微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/3	暗褐	しまり強　粘性やや強 地山土微量・鉄分微量混入	
P10	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱　粘性やや強 地山土微量・炭化物微量混入	

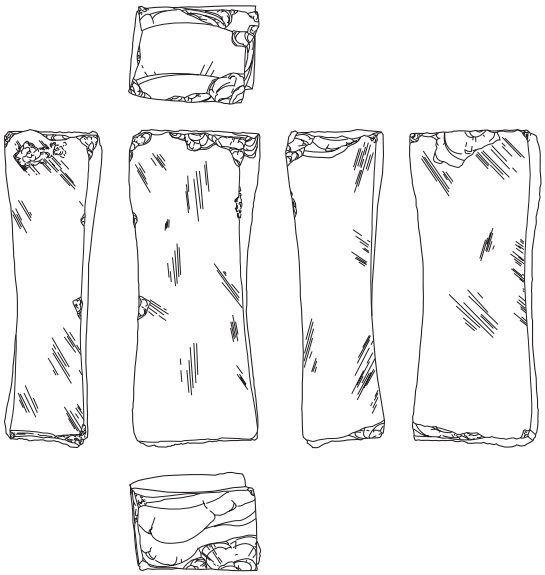
SB184　炉

1	基本土層第Ⅱ層			
2	10YR3/2	黒褐	しまりやや強　粘性やや弱 焼土塊微量・炭化物中量混入	
3	7.5YR5/6	明褐	しまり強　粘性弱 ４層土微量混入　灰堆積層	
4	5YR4/8	赤褐	しまりやや強　粘性弱 地山土中量混入　焼土層	
5	10YR2/3	黒褐	しまり強　粘性やや弱 地山土中量・炭化物微量混入	

第22図　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉



第23図　ＳＢ184掘立柱建物跡



1:3　0　5　10cm

1:2　0　5　10cm

遺物番号	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量
SB184　RQ1	砥石	流紋岩	126.3mm	51.8mm	38.6mm	362.4g

遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SB184　RP1	磁器	不明	小皿	口縁	染付・時期不明・雑器

第24図　ＳＢ184掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ246　**掘立柱建物跡**【第25図（Ｐ36）／図版５】

〔位　　置〕　ＬＱ51グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや東側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行２間の直家である。梁間の平均値は3.63m（11.98尺）、桁間の平均値は1.84m（6.07尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ246を構成する柱穴として、計６基の柱穴を確認した。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　桁間間尺を重視すれば、近世後半期～近代と思われる。

ＳＢ248　**掘立柱建物跡**【第26図（Ｐ37）／図版５】

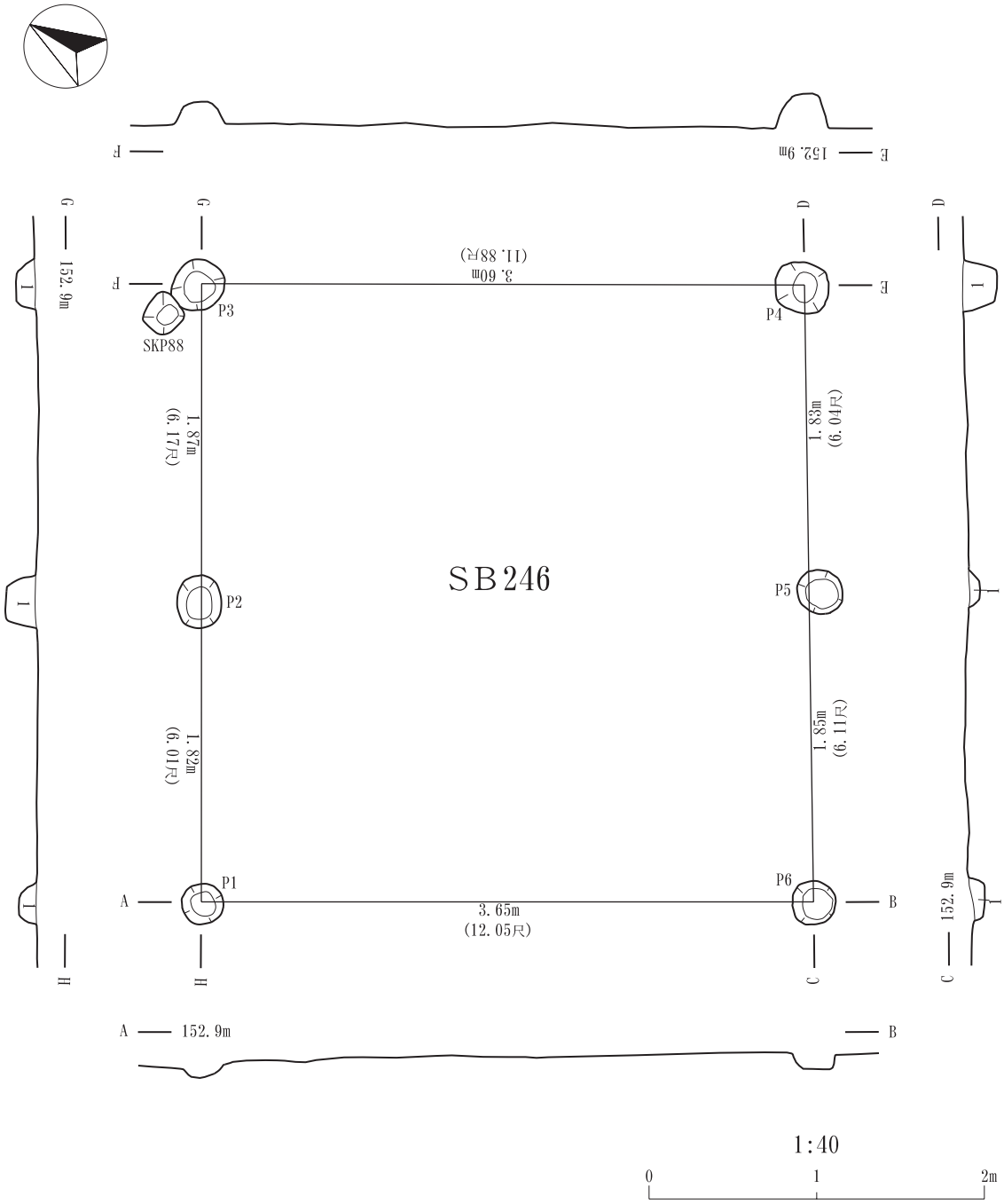
〔位　　置〕　ＬＲ57グリッドを中心に位置する。遺跡の北側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行２間の直家である。梁間の平均値は2.21m（7.29尺）、桁間の平均値は2.42m（7.99尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ248を構成する柱穴として、計５基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ248と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

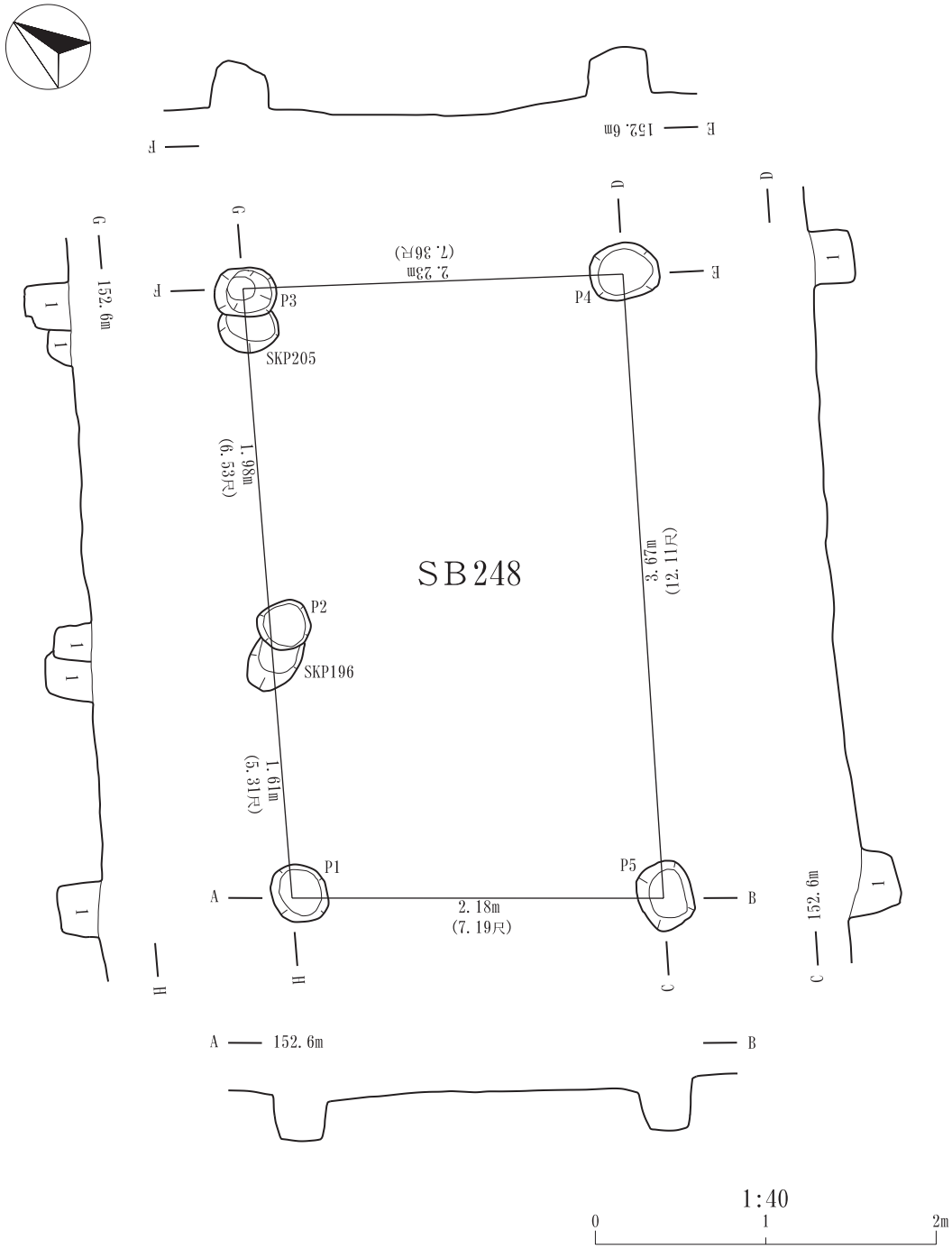
〔時　　期〕　不明。



SB246

P1	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性弱	地山土中量・小礫少量混入
P2	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性弱	地山土中量・小礫少量混入
P3	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性やや弱	地山土微量・小礫多量・砂粒多量混入
P4	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性やや弱	地山土微量・小礫多量・砂粒多量混入
P5	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性やや弱	地山土中量・小礫多量混入
P6	1	10YR3/4	暗褐	しまり弱	粘性弱	地山土多量・小礫多量混入

第25図　ＳＢ246掘立柱建物跡



SB248

P1	1	10YR4/3	にぶい黄褐	しまり強	粘性やや強	地山粒微量・炭化物微量混入
P2	1	10YR4/3	にぶい黄褐	しまり強	粘性やや弱	地山粒微量・炭化物少量混入
P3	1	10YR3/2	黒褐	しまり強	粘性やや弱	炭化物少量混入
P4	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	炭化物微量混入
P5	1	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性やや弱	地山粒少量・炭化物微量混入

第26図　ＳＢ248掘立柱建物跡

ＳＢ251　**掘立柱建物跡**【第28図（Ｐ39）／図版６・７】

〔位　　置〕　ＭＤ49グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北東側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行２間の直家である。梁間の平均値は1.91m（6.30尺）、桁間の平均値は2.92m（9.64尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ251を構成する柱穴として、計５基の柱穴を確認した。Ｐ５がＳＢ391Ｐ３と切り合い、Ｐ５のほうが新しい。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＢ266　**掘立柱建物跡**【第27・29図（Ｐ38・40）／図版６・９】

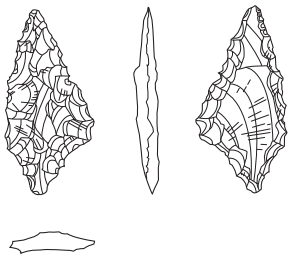
〔位　　置〕　ＬＱ53グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北東側である。

〔平面形・規模〕　梁行３間×桁行３間の直家である。梁間の平均値は2.19m（7.23尺）、桁間の平均値は2.82m（9.31尺）である。桁行方向は北東－南西を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ266を構成する柱穴として、計９基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ266と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　Ｐ６より、黒曜石を使用した石鏃が出土した。縄文時代のものと思われる。本遺構との関連はなく、流れ込んだものと判断している。

〔時　　期〕　柱間間尺を重視すれば、近世後半期～近代と思われる。



遺物番号	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量
SB266　RQ1	石鏃	黒曜石	23.2mm	10.6mm	0.3mm	0.6g

1:1

0　1　5cm

第27図　ＳＢ266掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ357　**掘立柱建物跡**【第30図（Ｐ41）／図版４】

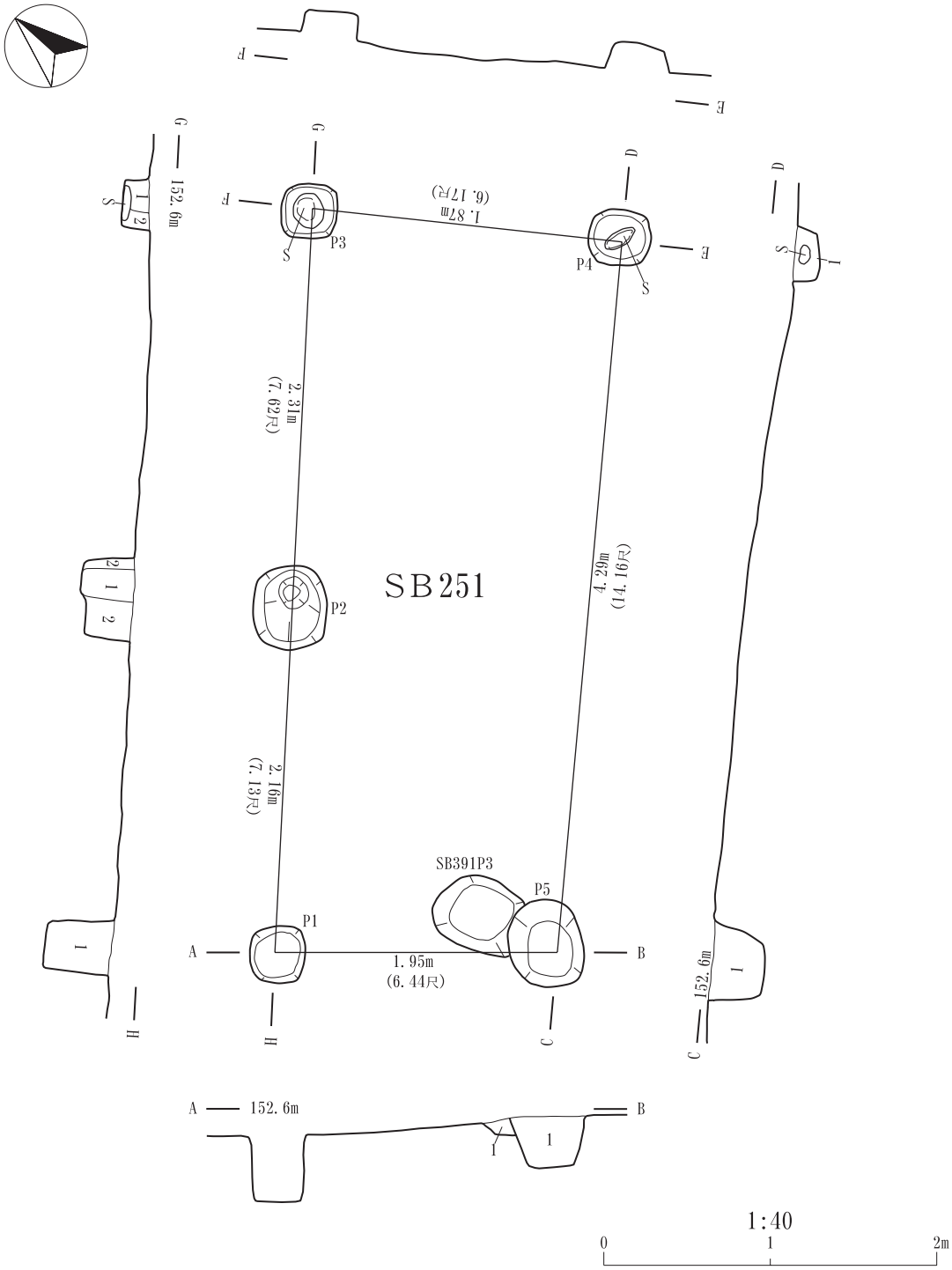
〔位　　置〕　ＭＥ51グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行２間の直家である。梁間の平均値は2.21m（7.29尺）、桁間の平均値は1.89m（6.24尺）である。桁行方向は北西－南東を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ357を構成する柱穴として、計６基の柱穴を確認した。切り合っているピットがＳＢ357と関連するものかどうかは不明である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

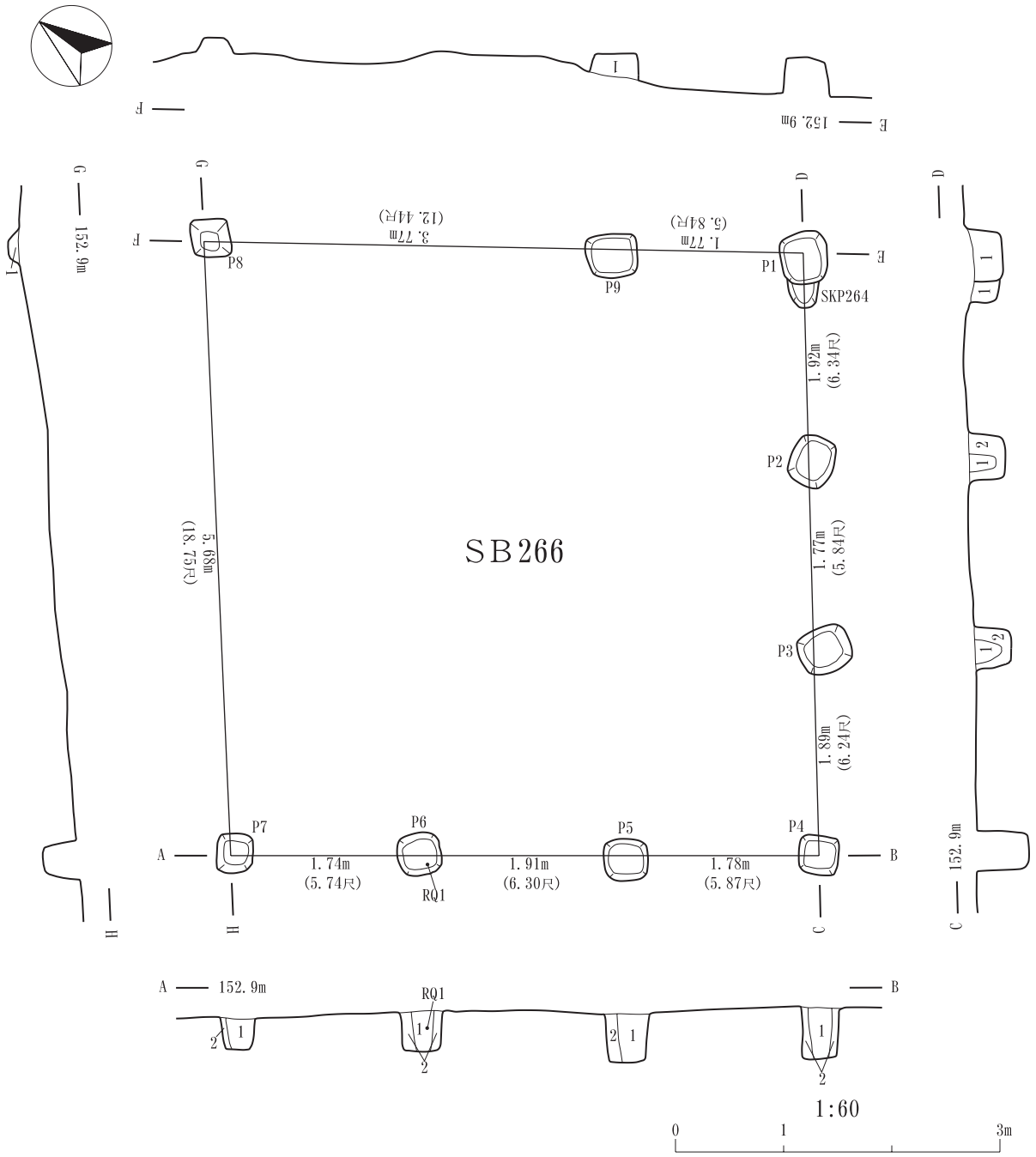
〔時　　期〕　不明。



SB251

P1	1	10YR4/3	にぶい黄褐	しまり極弱	粘性弱	地山粒微量混入
P2	1	10YR3/3	暗褐	しまり極弱	粘性やや弱	地山粒微量・炭化物微量混入　柱痕跡
	2	10YR4/2	灰黄褐	しまりやや弱	粘性弱	地山塊少量混入
P3	1	10YR3/3	暗褐	しまり極弱	粘性極弱	地山粒微量・炭化物微量混入　柱痕跡
	2	10YR4/4	褐	しまりやや弱	粘性極弱	地山粒微量混入
P4	1	10YR3/2	黒褐	しまり強	粘性弱	地山粒微量混入
P5	1	10YR4/2	灰黄褐	しまり強	粘性弱	地山粒微量・炭化物微量混入

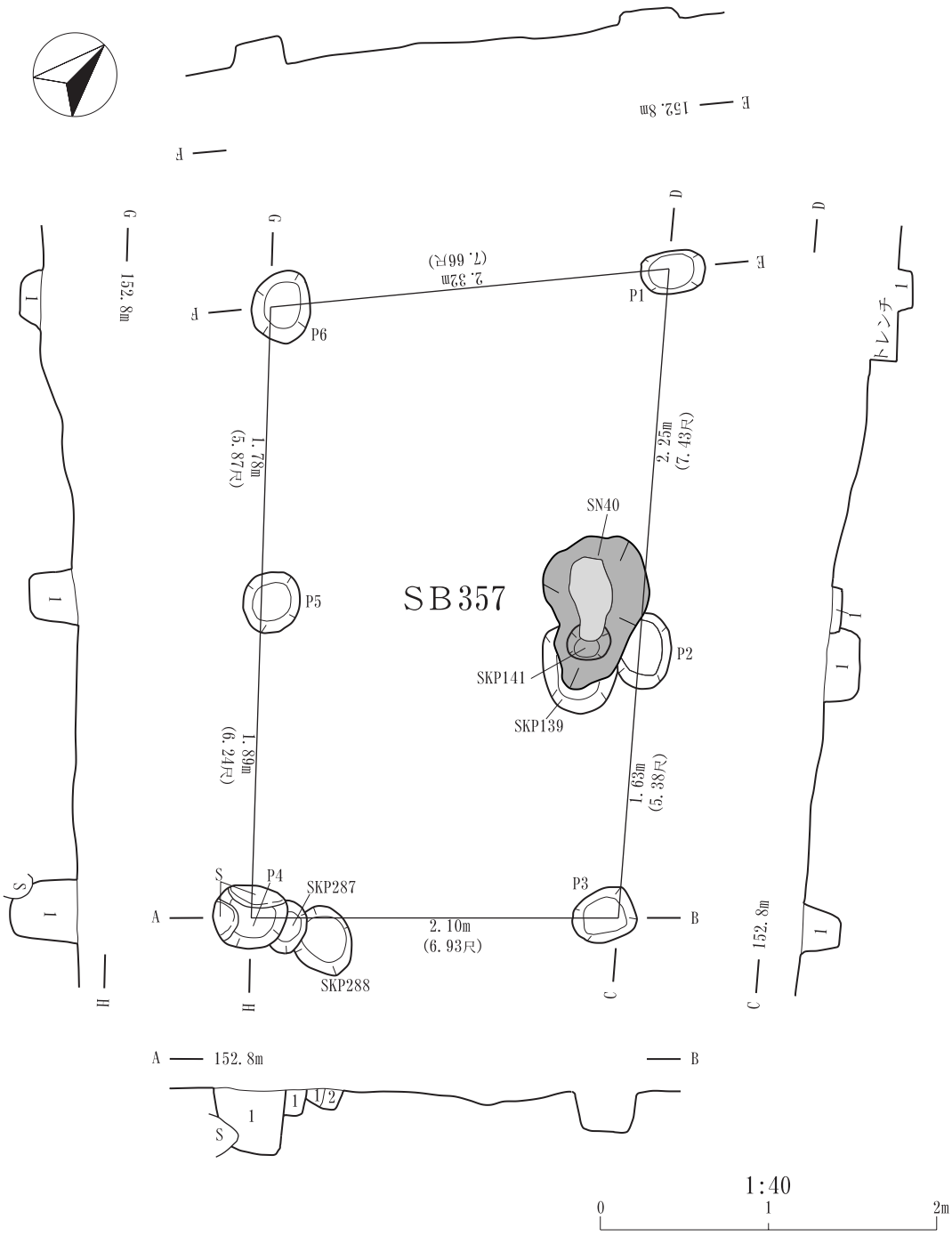
第28図　ＳＢ251掘立柱建物跡



SB266

P1	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや強	地山粒微量混入	
P2	1	10YR4/3	にぶい黄褐	しまりやや強	粘性極弱	地山粒微量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/2	黒褐	しまり弱	粘性やや強	地山粒微量混入	
P3	1	10YR3/3	暗褐	しまり弱	粘性やや強	地山塊微量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR3/2	黒褐	しまり弱	粘性やや弱	地山塊少量混入	
P4	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや強	地山土中量・炭化物微量・砂粒多量混入	柱痕跡
	2	10YR3/4	暗褐	しまりやや強	粘性弱	地山土多量・砂粒中量混入	
P5	1	10YR3/3	暗褐	しまり弱	粘性やや弱	地山土少量・炭化物微量・砂粒中量混入	柱痕跡
	2	10YR5/6	黄褐	しまりやや強	粘性弱	地山土多量・砂粒多量混入	
P6	1	10YR4/2	灰黄褐	しまり強	粘性弱	地山粒少量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR4/4	黄褐	しまりやや強	粘性弱	地山粒中量混入	
P7	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土中量・炭化物微量混入	柱痕跡
	2	10YR4/4	黄褐	しまり強	粘性弱	地山土多量混入	
P8	1	10YR4/4	黄褐	しまり強	粘性弱	地山土多量混入	
P9	1	10YR3/2	黒褐	しまり弱	粘性強	地山粒微量・炭化物微量混入	

第29図　ＳＢ266掘立柱建物跡



SB357

P1	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山塊少量・炭化物微量混入
P2	1	10YR3/3	暗褐	しまり強	粘性やや強	地山土少量・炭化物微量混入
P3	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや強	粘性やや強	地山塊中量混入
P4	1	10YR2/2	黒褐	しまりやや強	粘性強	地山土微量・炭化物微量混入
P5	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性強	地山土微量・炭化物微量混入
P6	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや強	粘性強	地山土微量・炭化物微量混入

第30図　ＳＢ357掘立柱建物跡

ＳＢ374　掘立柱建物跡【第31図（Ｐ43）／図版６】

〔位　　置〕　ＭＤ49グリッドを中心に位置する。遺跡の北端部である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行１間の直家である。一部が調査区外になっており、梁間の平均値・桁間の平均値ともに不明である。桁行方向は北西－南東を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ374を構成する柱穴として、計３基の柱穴を検出した。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＢ391　掘立柱建物跡【第32図（Ｐ44）／図版６】

〔位　　置〕　ＬＲ54グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや北東側である。

〔平面形・規模〕　梁行１間×桁行１間の直家である。梁間の平均値は2.03m（6.70尺）、桁間の平均値は4.32m（14.26尺）である。桁行方向は北西－南東を向く。

〔柱　　穴〕　ＳＢ391を構成する柱穴として、計４基の柱穴を確認した。Ｐ３がＳＢ251Ｐ５と切り合い、Ｐ３のほうが古い。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

（３）焼土遺構

ＳＢ357北東端で検出した。しかし、ＳＢ357を構成する柱穴であるＰ２より新しいため、ＳＢ357に伴うものではない。よって、単独の焼土遺構として精査した。屋外炉的使用と捉えるのが妥当であると思われるが、詳細は不明である。

ＳＮ40　焼土遺構【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ51グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸96㎝（北－南）、短軸64㎝（東－西）である。炉としての使用が考えられる。東側にＳＢ357Ｐ２、南側にＳＫＰ141とＳＫＰ139が切り合い、新旧関係は新しい順に本遺構、ＳＫＰ141、ＳＫＰ139、ＳＢ357Ｐ２である。

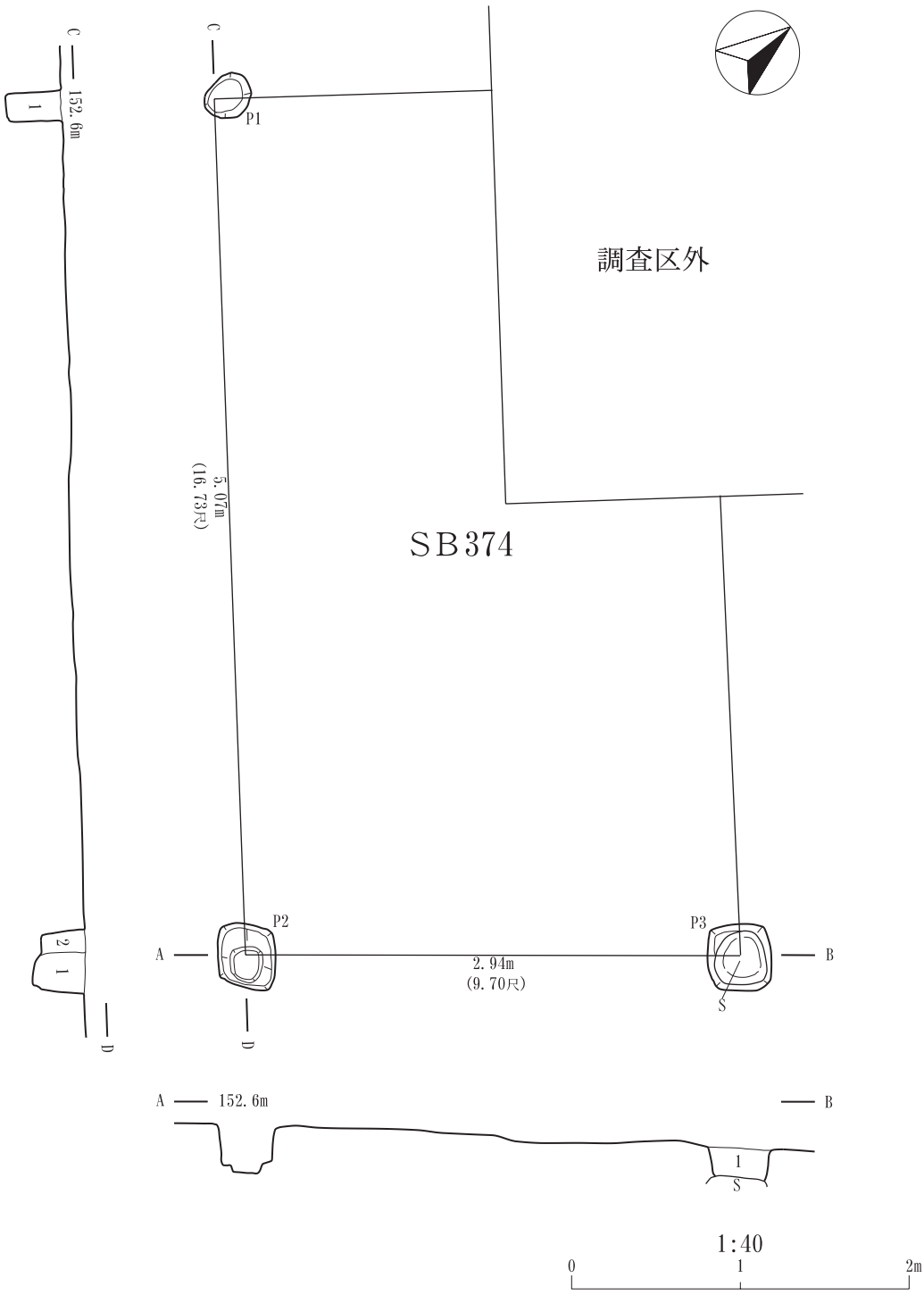
〔堆　積　土〕　よく焼けて赤化している土が単一に堆積している。一部ブロック状に硬化している。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で６㎝である。

〔底　　面〕　やや波打っている。

〔出 土 遺 物〕　なし。

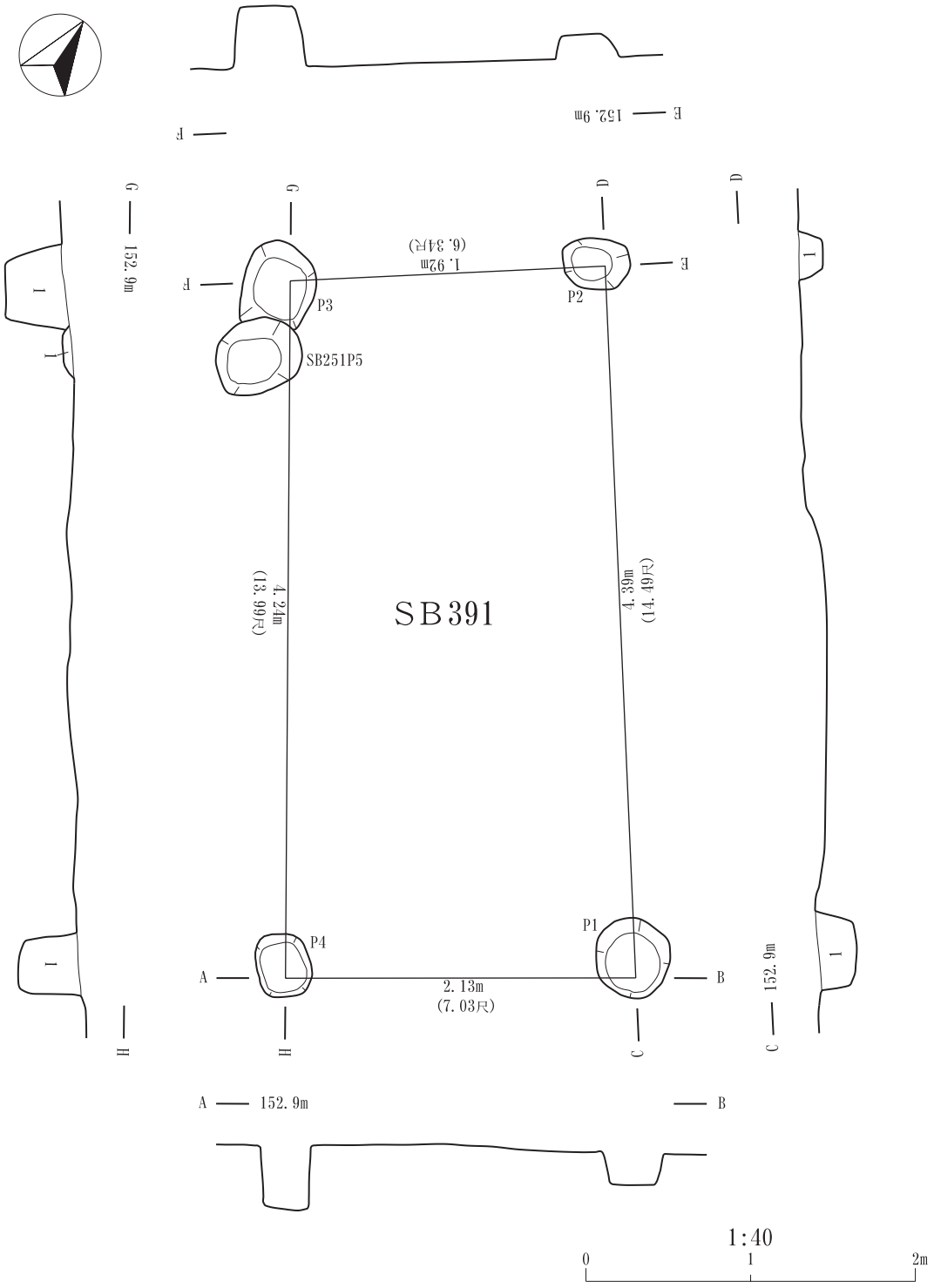
〔時　　期〕　不明。



SB374

P1	1	7.5YR3/3	暗褐	しまりやや強	粘性やや弱	地山粒少量・炭化物微量混入
P2	1	10YR3/3	暗褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土中量・炭化物微量混入　柱痕跡
	2	10YR3/2	黒褐	しまりやや強	粘性弱	地山土多量・鉄分少量混入
P3	1	2.5YR4/1	黄灰	しまりやや強	粘性極弱	地山粒微量混入

第31図　ＳＢ374掘立柱建物跡



SB391

P1	1	10YR4/3	にぶい黄褐	しまりやや弱	粘性やや強	地山粒微量混入
P2	1	10YR2/3	黒褐	しまり強	粘性弱	地山塊少量混入
P3	1	10YR4/4	褐	しまりやや強	粘性弱	地山塊少量混入
P4	1	10YR2/3	黒褐	しまりやや弱	粘性やや弱	地山土少量・炭化物微量混入

第32図　ＳＢ391掘立柱建物跡

（４）土坑

計17基検出した。いずれの土坑からも出土遺物はなく、時期・性格ともに詳細は不明である。ＳＫ43・44・45・52・53・126の６基は多めに礫が混入する人為堆積の土坑である。ＳＫ43の放射性炭素年代測定では、９～10世紀頃の測定結果が出ており、他の土坑も当期付近の所産である可能性が高い。また、ＳＫ90は唯一掘立柱建物跡（ＳＢ184）内に位置しており、簡易的な厠やごみ捨て穴等の付随施設かもしれない。他の計10基の土坑に関しては、具体的な性格等を推定する材料が極めて乏しい。

ＳＫ43　土坑【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ52グリッドに位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸92cm（北東－南西）、短軸65cm（北西－南東）である。

〔堆　積　土〕　黒褐色土単一層であり、直径約15～50cmの礫が計４個埋まっている。人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で20cmである。

〔底　　面〕　すり鉢状である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　放射性炭素年代測定では、９～10世紀頃の測定結果が出ている（第５章参照）。

ＳＫ44　土坑【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ52グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　楕円形で、長軸106cm（東－西）、短軸87cm（北－南）である。

〔堆　積　土〕　２層に分かれ、直径約５～45cmの礫が計15個埋まっている。人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で13cmである。

〔底　　面〕　やや波打っている。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ45　土坑【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ52グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸105cm（北－南）、短軸89cm（東－西）である。

〔堆　積　土〕　黒褐色土単一層であり、直径約５～30cmの礫が計38個埋まっている。人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で10cmである。

〔底　　面〕　やや波打っている。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ52　土坑【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ52グリッドを中心に位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　ほぼ円形で、長軸101cm（北東－南西）、短軸89cm（北西－南東）である。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、直径約５～30cmの礫が計30個（上部に17個・下部に13個）埋まっている。人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で19cmである。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ53　土坑【第33図（Ｐ50）／図版８】

〔位　　置〕　ＭＤ53グリッドに位置する。遺跡の中央からやや西側である。

〔平面形・規模〕　北西部が調査時のトレンチで破損しているが、楕円形と推定され、長軸102cm（東－西）、短軸74cm（北－南）である。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、直径約５～35cmの礫が計27個埋まっている。人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で19cmである。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ42　土坑【第34図（Ｐ51）】

〔位　　置〕　ＭＡ49グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ楕円形で、長軸88cm（東－西）、短軸70cm（北－南）である。北側にＳＫ85、西側にＳＫ84が切り合い、新旧関係は新しい順に本遺構、ＳＫ84、ＳＫ85である。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　やや垂直気味に立ち上がり、もっとも深い部分で32cmである。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ84　土坑【第34図（Ｐ51）】

〔位　　置〕　ＭＡ49グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ楕円形で、長軸106cm（東－西）、短軸60cm（北－南）と推定される。北側に

ＳＫ85、東側にＳＫ42が切り合い、新旧関係は新しい順にＳＫ42、本遺構、ＳＫ85である。

〔堆　積　土〕　３層に分かれ、人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　やや垂直気味に立ち上がり、もっとも深い部分で32cmである。

〔底　　面〕　やや波打っている。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ85　土坑【第34図（Ｐ51）】

〔位　　置〕　ＭＡ49グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ楕円形で、長軸108cm（東－西）、短軸76cm（北－南）と推定される。北側にＳＫ86、南側にＳＫ42・84が切り合い、新旧関係は新しい順にＳＫ42、ＳＫ84、本遺構、ＳＫ86である。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で28cmである。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ86　土坑【第34図（Ｐ51）】

〔検 出 位 置〕　ＭＡ49グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ楕円形で、長軸72cm（東－西）、短軸56cm（北－南）と推定される。南側にＳＫ85が切り合い、ＳＫ85が新しい。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　やや垂直気味に立ち上がり、もっとも深い部分で23cmである。

〔底　　面〕　ややすり鉢状である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ56　土坑【第34図（Ｐ51）】

〔位　　置〕　ＬＱ59・ＬＲ59グリッドに位置する。遺跡の北側である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸206cm（北－南）、短軸118cm（東－西）である。東側にＳＫＰ57・ＳＫＰ58が切り合い、両ピットが新しい。

〔堆　積　土〕　２層に分かれ、人為堆積と思われる。

〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で32㎝である。
〔底　　面〕　ほぼ平坦である。
〔出 土 遺 物〕　なし。
〔時　　期〕　不明。

ＳＫ90　土坑【第34図（Ｐ51）／図版８】
〔位　　置〕　ＭＡ54グリッドに位置する。遺跡のやや北側である。ＳＢ184南端部に位置する。
〔平面形・規模〕　ほぼ円形で、長軸92㎝（北東－南西）、短軸88㎝（北西－南東）である。中央にＳＫＰ51が切り合い、ＳＫＰ51が新しい。
〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。
〔　　壁　　〕　垂直気味に立ち上がり、もっとも深い部分で36㎝である。
〔底　　面〕　ほぼ平坦である。
〔出 土 遺 物〕　なし。
〔時　　期〕　不明だが、ＳＢ184に伴うとすれば、中世後半期と思われる。

ＳＫ126　土坑【第35図（Ｐ52）】
〔位　　置〕　ＭＣ53グリッドに位置する。遺跡の中央からやや北西側である。
〔平面形・規模〕　ほぼ楕円形で、長軸170㎝（東－西）、短軸98㎝（北－南）と推定される。西側にＳＫＰ405が切り合い、ＳＫＰ405が新しい。
〔堆　積　土〕　２層に分かれ、直径約10～60㎝の礫が計10個埋まっている。人為堆積と思われる。
〔　　壁　　〕　やや垂直気味に立ち上がり、もっとも深い部分で34㎝である。
〔底　　面〕　やや波打っている。
〔出 土 遺 物〕　なし。
〔時　　期〕　不明。

ＳＫ140　土坑【第35図（Ｐ52）】
〔位　　置〕　ＭＣ42グリッドに位置する。遺跡の南部である。
〔平面形・規模〕　不整形で、長軸82㎝（北東－南西）、短軸70㎝（北西－南東）である。
〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、段丘礫が混入している。人為堆積と思われる。
〔　　壁　　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で22㎝である。
〔底　　面〕　ほぼ平坦である。
〔出 土 遺 物〕　なし。
〔時　　期〕　不明。

ＳＫ174　土坑【第35図（Ｐ52）】

〔位　　置〕　ＬＳ51・52グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　ほぼ円形で、長軸76㎝（北東－南西）、短軸58㎝（北西－南東）と推定される。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。

〔　壁　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で18㎝である。

〔底　　面〕　段丘礫により波打っている。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ247　土坑【第35図（Ｐ52）】

〔位　　置〕　ＬＳ51・52グリッドに位置する。遺跡の中央部である。

〔平面形・規模〕　惰円形で、長軸106㎝（北東－南西）、短軸57㎝（北西－南東）と推定される。

〔堆　積　土〕　暗褐色土単一層であり、人為堆積と思われる。

〔　壁　〕　ややフラスコ状となり、もっとも深い部分で48㎝である。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ402　土坑【第35図（Ｐ52）】

〔位　　置〕　ＭＣ42グリッドに位置する。遺跡の南部である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸146㎝（北東－南西）、短軸88㎝（北西－南東）である。

〔堆　積　土〕　２層に分かれ、人為堆積と思われる。

〔　壁　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で38㎝である。

〔底　　面〕　ほぼ平坦である。

〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。

ＳＫ414　土坑【第35図（Ｐ52）】

〔位　　置〕　ＭＣ42グリッドに位置する。遺跡の南部である。

〔平面形・規模〕　不整形で、長軸116㎝（東－西）、短軸113㎝（北－南）である。

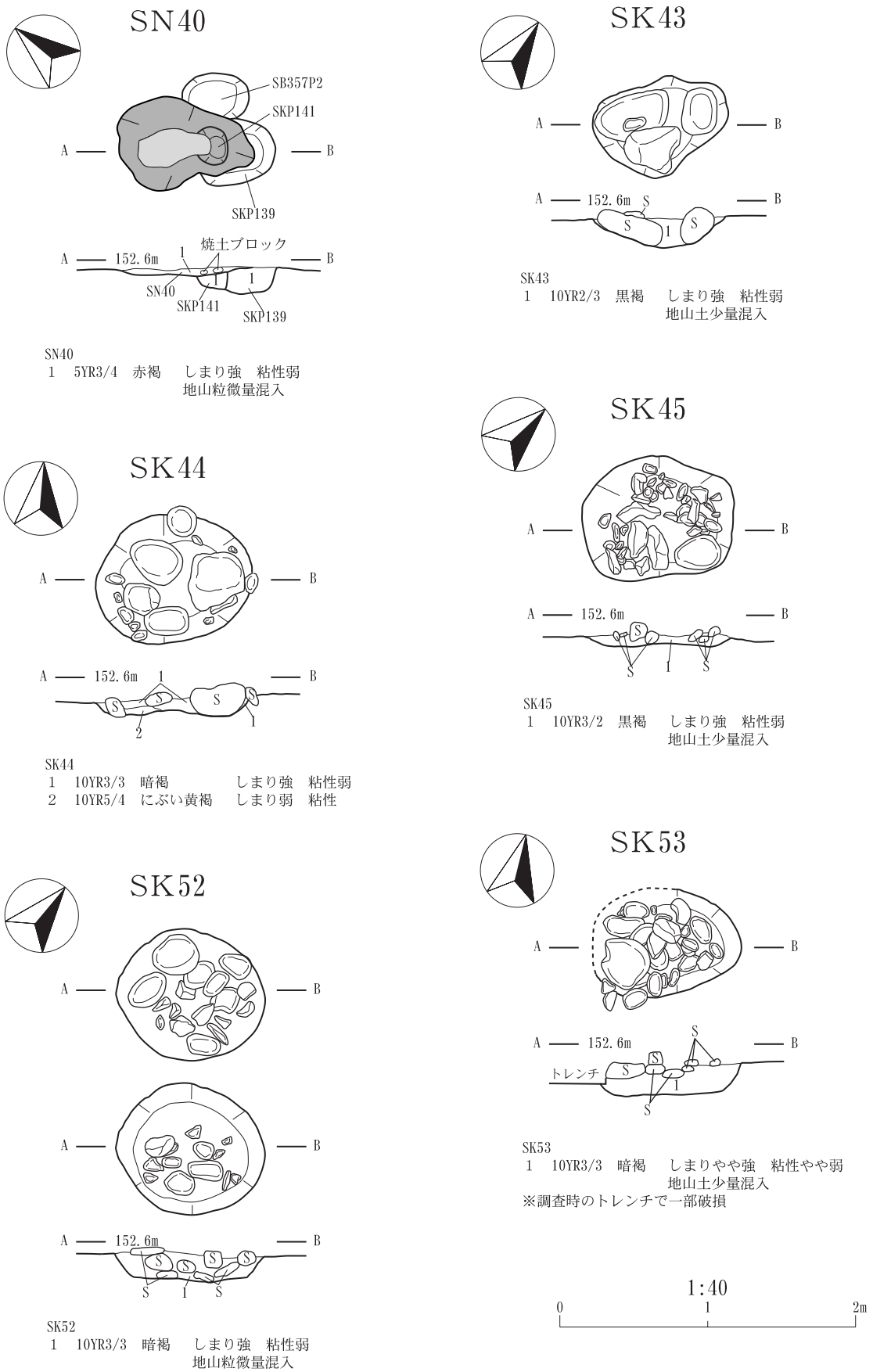
〔堆　積　土〕　黒色土単一層であり、段丘礫が混入している。人為堆積と思われる。

〔　壁　〕　外に開きながら立ち上がり、もっとも深い部分で22㎝である。

〔底　　面〕　やや波打っている。

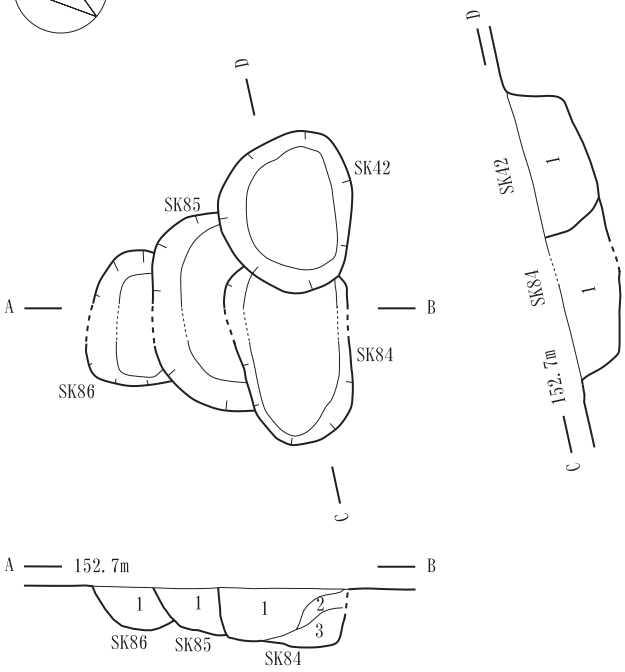
〔出 土 遺 物〕　なし。

〔時　　期〕　不明。



第33図　ＳＮ40焼土遺構　ＳＫ43土坑　ＳＫ44土坑　ＳＫ45土坑　ＳＫ52土坑　ＳＫ53土坑

SK42・84・85・86



SK42
1　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性弱
　　地山塊微量・炭化物微量混入

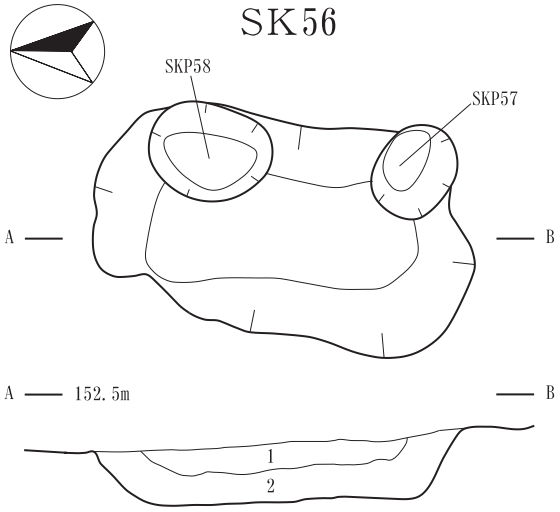
SK84
1　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性弱
　　地山土少量・炭化物微量混入
2　10YR4/6　　褐　しまり強　粘性弱
　　地山土多量・炭化物微量混入
3　10YR3/4　暗褐　しまりやや強　粘性弱
　　地山土少量・炭化物少量混入

SK85
1　10YR3/4　暗褐　しまり強　粘性やや弱
　　炭化物微量混入

SK86
1　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性弱
　　地山土少量・炭化物微量混入

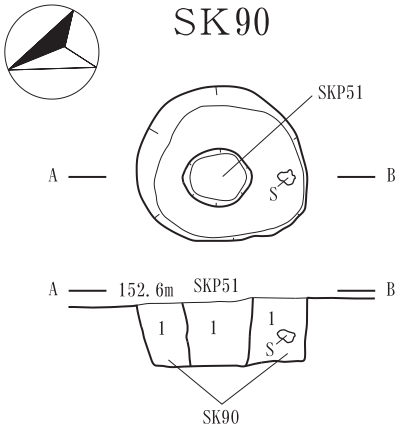
※調査時のトレンチで一部破損

SK56



1　7.5YR3/4　暗褐　しまりやや強　粘性弱
　　地山土少量・砂粒多量混入
2　10YR3/4　　暗褐　しまりやや強　粘性弱
　　地山土少量・砂粒多量混入

SK90

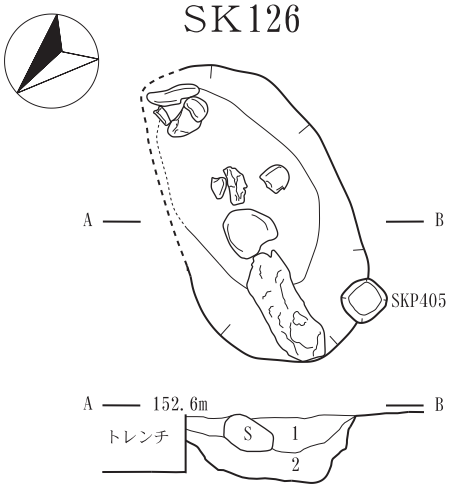


1　10YR3/4　暗褐　しまりやや強　粘性やや弱
　　地山土少量・砂粒多量混入

1:40
0　1　2m

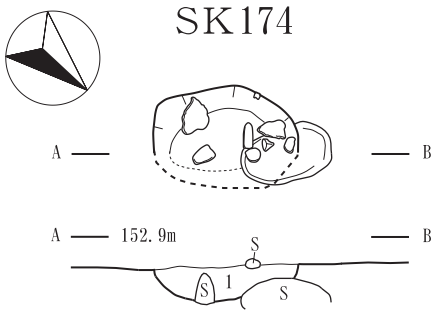
第34図　ＳＫ42・84・85・86土坑　ＳＫ56土坑　ＳＫ90土坑

SK126



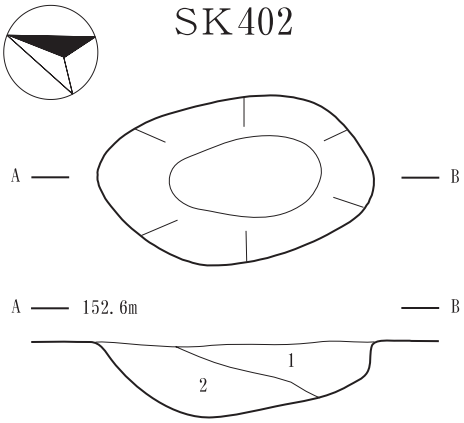
SK126
1　10YR3/2　黒褐　しまり強　粘性弱
　　地山土少量・炭化物少量混入
2　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性やや弱
　　地山土中量・炭化物微量混入
※調査時のトレンチで一部破損

SK174



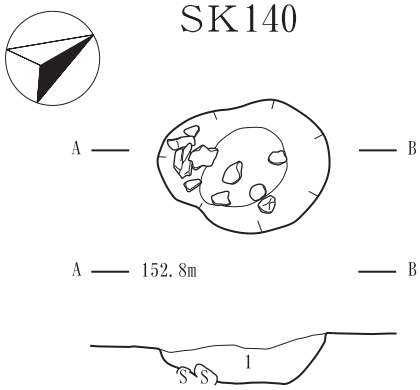
SK174
1　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性やや弱
　　地山塊中量・炭化物微量混入
※調査時のトレンチで一部破損

SK402



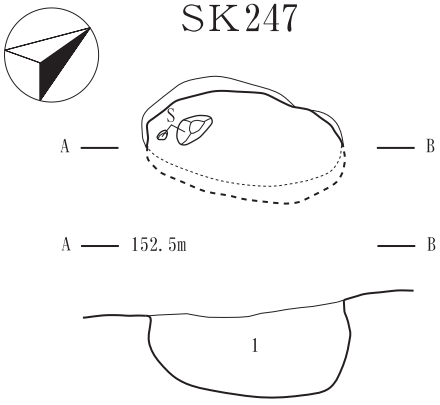
SK402
1　10YR2/3　黒褐　しまり強　粘性やや強
　　地山塊微量・炭化物微量混入
2　10YR2/2　黒褐　しまり強　粘性やや弱
　　地山塊少量・炭化物微量混入

SK140



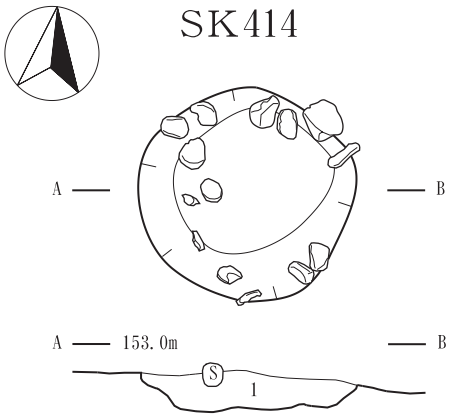
SK140
1　10YR3/3　暗褐　しまりやや弱　粘性やや弱
　　地山土中量・砂礫少量混入

SK247



SK247
1　10YR3/3　暗褐　しまり強　粘性やや弱
　　地山土多量・炭化物微量混入
※調査時のトレンチで一部破損

SK414



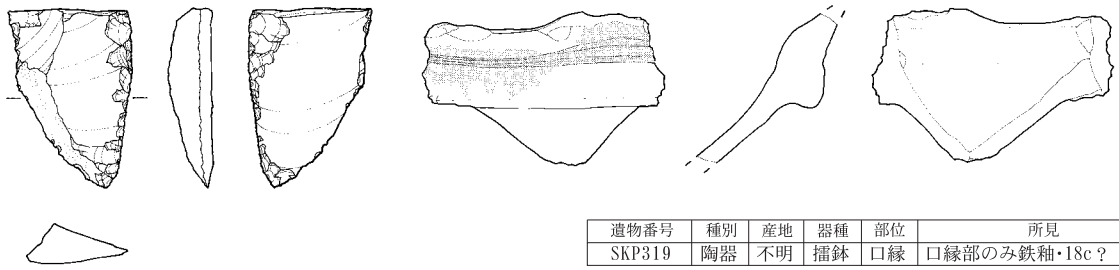
SK414
1　10YR1.7/1　黒　しまり強　粘性やや弱
　　地山粒微量・炭化物微量混入

1:40
0　1　2m

第35図　ＳＫ126土坑　ＳＫ140土坑　ＳＫ174土坑　ＳＫ247土坑　ＳＫ402土坑　ＳＫ414土坑

（５）柱穴様ピット【第36図（Ｐ53）・第４～９表（Ｐ53～55）／図版９】

遺跡北部～中央部を中心に計314基検出した。基本土層第Ⅰ層（耕地整理後の耕作土）及び基本土層第Ⅱ層（耕地整理前の耕作土）が堆積しているものが相当数に上り、近・現代の水田に関わるものと推断できる。水田区画に沿った柱穴様ピットの配置も認めることができ、これらの柱穴様ピット群は水田に関わる施設の杭痕であろう。また、ＳＢ46・47・121・357が位置する区域の周囲には、ＳＢ群の柱穴と類似する覆土が堆積する柱穴様ピットが、一定数確認できる。しかし、建物跡につながるとおぼしき規則的な配置は、既述のＳＢ以外には認定できなかった。さらに、時期毎の形状・覆土等の明らかな差違が確認できず、柱穴様ピット間の明確な類型化も困難であった。よって、第36図及び第４～９表による、位置・平面形・長径・短径・深さ・底面標高の６項目の提示をもって、柱穴様ピットの調査報告とする（長径・短径の数値で〈 〉があるものは現状数値または推定数値）。



遺物番号	種別	産地	器種	部位	所見
SKP319	陶器	不明	擂鉢	口縁	口縁部のみ鉄釉・18c？

遺物番号	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量
SKP123	スクレイパー	頁岩	50.1mm	35.2mm	12.3mm	18.1g

1:2
0　5　10cm

第36図　ＳＫＰ123・ＳＫＰ319柱穴様ピット出土遺物

第４表　柱穴様ピット一覧表１

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP03	LR57	不整形	45	44	13	152.21
SKP06	LO60	円形	28	26	10	151.75
SKP09	MA62	不整形	16	13	8	152.41
SKP12	MA60	方形	18	15	8.5	152.39
SKP13	MA60	隅丸方形	20	16	9.5	152.45
SKP14	MB61	楕円形	27	13	12	152.45
SKP15	MB60・61	円形	40	36	40	152.12
SKP16	MB60	不整形	20	18	27.5	152.16
SKP17	LP56	円形	39	34	14	152.10
SKP18	LP56	楕円形	26	18	5	152.17
SKP19	LP55	不整形	29	22	12	152.28
SKP22	MB63	隅丸方形	22	20	31	152.23
SKP24	MB62	不整形	28	20	11	152.39
SKP25	LS60	不整形	18	17	16	152.31
SKP26	LS60	円形	28	27	55	151.75
SKP27	LS59	不整形	19	13	12	152.38
SKP28	LS59	不整形	13	11	15.5	152.35
SKP29	LS59	不整形	17	14	13.5	152.34
SKP30	LP57	隅丸方形	35	33	21	152.05
SKP31	LP56	不整形	30	24	14	152.20
SKP33	LO55	不整形	20	17	28	151.92
SKP34	LO55	不整形	22	〈20〉	18	152.02
SKP37	LT57	楕円形	43	31	20	152.15
SKP38	MB54	円形	30	28	54	152.03
SKP48	MB56	円形	28	26	54	152.09
SKP49	MC56	円形	32	28	42.5	152.10
SKP50	MA54	楕円形	37	31	30	152.21
SKP51	MA54	楕円形	38	32	36	152.21
SKP55	LS57	方形	30	27	34	152.03

第５表　柱穴様ピット一覧表２

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP57	LQ59	隅丸方形	26	21	16	152.11
SKP58	LQ59	楕円形	53	39	20	152.00
SKP60	LT55	隅丸方形	27	26	16	152.28
SKP64	MB49	楕円形	30	19	19	152.33
SKP72	MB48	円形	20	17	15	152.38
SKP73	MB48	隅丸方形	43	24	22	152.31
SKP74	MB48	楕円形	40	18	17.5	152.34
SKP76	LQ54	不整形	26	24	25.5	152.30
SKP77	MA59	円形	22	19	32	152.13
SKP80	LQ52	隅丸方形	30	22	19.5	152.52
SKP87	LP52	不整形	〈26〉	20	26	152.46
SKP88	LQ52	不整形	〈26〉	18	17.5	152.55
SKP93	LP54	隅丸方形	32	31	7.5	152.60
SKP96	MC47	隅丸方形	27	25	9	152.41
SKP97	MC46	円形	21	19	12	152.43
SKP98	MD46	隅丸方形	35	32	18	152.34
SKP99	LP54	円形	41	40	9	152.16
SKP100	LP54	楕円形	42	34	8	152.16
SKP102	LQ53	楕円形	27	9	9	152.44
SKP103	LQ53	円形	24	22	20	152.44
SKP105	MD48	隅丸方形	25	21	14	152.44
SKP106	MD47・48	楕円形	40	〈8〉	10.5	152.44
SKP107	MD47	方形	〈28〉	20	11	152.48
SKP108	MD45	円形	22	17	18.5	152.41
SKP109	MD45	不整形	26	21	16	152.40
SKP111	MC48	楕円形	30	19	10	151.89
SKP112	LP53	不整形	30	23	9	152.64
SKP117	MC53	円形	41	37	30	152.27
SKP118	MB51・52	方形	29	28	13.5	152.45

第６表　柱穴様ピット一覧表３

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP123	MC52・53	不整形	41	32	33	152.20
SKP124	MC52	楕円形	32	28	36	152.19
SKP125	MC52	隅丸方形	27	24	13.5	152.39
SKP127	MD51	円形	39	38	15.5	152.41
SKP128	MD51	円形	23	22	16.5	152.41
SKP129	MD51	隅丸方形	39	23	19.5	152.38
SKP130	ME57	円形	60	56	16.5	151.99
SKP131	LR50	円形	34	29	22.5	152.27
SKP132	MC・MD51	円形	27	26	22.5	152.32
SKP133	MD51	不整形	24	〈18〉	23	152.32
SKP134	MD51	円形	41	40	15.5	152.36
SKP135	MD50・51	楕円形	48	39	38	152.19
SKP136	MD51	楕円形	33	17	29	152.24
SKP137	MD52	楕円形	28	25	20.5	152.22
SKP138	MD51	方形	45	〈30〉	14.5	152.38
SKP139	MD51	隅丸方形	26	〈17〉	17	152.39
SKP141	MD51	方形	〈46〉	43	〈9〉	152.40
SKP142	MB54	円形	34	32	39.5	152.00
SKP144	MB53	円形	24	21	27	152.21
SKP145	ME49	不整形	30	〈23〉	8	152.49
SKP146	ME49	円形	27	25	11	152.45
SKP148	MD51	不整形	〈48〉	44	26	152.28
SKP149	ME48	不整形	60	44	20	152.16
SKP150	ME49	円形	36	〈9〉	23.5	152.34
SKP151	MB53	隅丸方形	36	30	40	152.04
SKP152	ME49	方形	16	〈15〉	15	152.42
SKP153	MA53	円形	34	32	22.5	152.26
SKP154	MB53	隅丸方形	25	20	43.5	152.12
SKP155	ME50	楕円形	40	22	25	152.30
SKP158	MF43	円形	26	25	18	152.42
SKP159	ME42・43	円形	26	24	5	152.50
SKP160	MF42	円形	29	26	13	152.51
SKP161	MF42	隅丸方形	23	20	8.5	152.50
SKP162	MF42	円形	25	23	10	152.51
SKP163	ME50	隅丸方形	24	〈18〉	21	152.33
SKP164	ME50	不整形	34	23	25	152.31
SKP165	MB53	楕円形	33	32	28.5	152.29
SKP166	MA53	隅丸方形	29	28	23	152.26
SKP168	MA56	円形	30	24	19.5	152.22
SKP170	MA61	円形	30	26	37	152.12
SKP171	MB61	円形	30	27	24	152.30
SKP172	MB61	隅丸方形	23	20	24	152.26
SKP175	MB56・57	楕円形	50	37	29.5	152.13
SKP176	MA56	円形	27	24	36	152.05
SKP177	MB56	円形	28	23	38.5	152.07
SKP178	MC50・51	円形	37	34	11.5	152.48
SKP180	MC50	円形	25	23	29.5	152.31
SKP181	MC50	方形	19	〈15〉	25	152.33
SKP182	MB53	円形	26	23	17	152.48
SKP183	LT55	楕円形	43	38	28	152.14
SKP185	MA53	隅丸方形	25	〈20〉	13.5	152.27
SKP186	MA53	不整形	45	31	24	152.19
SKP188	MA58	楕円形	40	30	26	152.12
SKP189	MA60	円形	36	32	31.5	152.17
SKP190	LT59	楕円形	58	48	26.5	152.20
SKP191	MD59	不整形	32	〈9〉	12	152.22
SKP192	MC58	不整形	46	30	21.5	152.22
SKP193	LQ58	円形	43	30	19	152.35
SKP194	MC57・58	円形	40	36	23	152.20
SKP196	LR・LS57	方形	〈24〉	24	24	152.21
SKP197	LR55	円形	29	26	20.5	152.26
SKP198	MB53	円形	40	36	43	152.11
SKP201	MB53	不整形	39	〈26〉	26	152.29
SKP202	MB53	楕円形	41	33	41.5	152.09

第７表　柱穴様ピット一覧表４

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP203	MC59・60	隅丸方形	29	23	19	152.16
SKP204	MC58	楕円形	35	23	36	152.10
SKP205	LR58	円形	30	〈12〉	13	152.26
SKP206	MD59	円形	32	31	30	152.03
SKP207	MB55	不整形	26	23	12	152.33
SKP208	MB55	不整形	28	〈25〉	49	151.96
SKP209	MA52・53	方形	36	〈13〉	58	152.11
SKP210	MA58	円形	37	31	27.5	152.12
SKP212	LT49	不整形	33	28	21.5	152.42
SKP213	LT51	楕円形	30	28	23	152.49
SKP214	MA53	円形	39	35	47.5	152.14
SKP215	LT56	隅丸方形	36	30	18	152.26
SKP216	MC54	楕円形	26	〈14〉	2	152.02
SKP217	MA51	楕円形	33	23	12.5	152.49
SKP218	MA53	不整形	35	34	25	152.28
SKP224	MB53	不整形	27	22	55	152.12
SKP225	MC57	不整形	29	20	14.5	152.27
SKP226	MA52	方形	18	18	9	152.33
SKP227	MA52	隅丸方形	22	21	38.5	152.20
SKP228	MC50	円形	39	34	14	152.41
SKP229	MB55	円形	20	19	25	152.22
SKP230	MB57	不整形	34	22	38	152.04
SKP232	MA52	円形	32	30	23	152.20
SKP234	MC51	隅丸方形	40	〈4〉	15	152.25
SKP235	MC51	楕円形	24	〈22〉	19.5	152.35
SKP237	MC51	隅丸方形	38	〈24〉	28.5	152.29
SKP238	MC51	不整形	34	〈18〉	13.5	152.43
SKP239	MC50・51	方形	〈36〉	36	25	152.34
SKP241	MB50	不整形	30	〈24〉	27	152.36
SKP249	LO54	隅丸方形	24	20	13	152.11
SKP250	MC52	円形	44	40	11	152.35
SKP252	LT52	不整形	32	27	34	152.36
SKP255	MB50	不整形	37	27	25	152.13
SKP258	MD51	方形	24	23	17	152.39
SKP259	MD51	円形	36	〈14〉	25	152.30
SKP260	MD50	隅丸方形	28	24	7.5	152.52
SKP261	LT56	円形	19	16	10	152.36
SKP262	LT56	楕円形	19	〈13〉	14	152.32
SKP263	LT56	隅丸方形	22	21	19	152.23
SKP264	LP53	方形	24	〈18〉	24.5	152.40
SKP265	MD51	不整形	32	〈27〉	20.5	152.35
SKP267	MB・MC51	隅丸方形	21	20	21	152.45
SKP268	MB50	隅丸方形	30	24	20	152.47
SKP269	MB50	不整形	25	21	26.5	152.38
SKP270	MC50	隅丸方形	35	34	23.5	152.34
SKP271	MB50	円形	27	20	17	152.44
SKP272	MB49・50	楕円形	29	22	15	152.44
SKP273	MB49・50	楕円形	20	16	12	152.46
SKP275	MB49・50	不整形	22	18	21	152.34
SKP276	ME49	楕円形	39	20	24	152.31
SKP277	ME・MF49	不整形	50	17	15.5	152.38
SKP278	ME・MF49	方形	28	18	15	152.38
SKP279	MD51	不整形	27	〈15〉	25	152.29
SKP281	LT56	円形	21	18	21.5	152.22
SKP282	LT56	円形	22	18	23.5	152.20
SKP283	LT56	楕円形	32	17	22.5	152.21
SKP284	LT56	円形	20	18	17	152.30
SKP285	ME51	楕円形	31	26	15	152.35
SKP286	MD49	隅丸方形	57	55	22.5	152.40
SKP287	MD50	不整形	28	〈15〉	19	152.42
SKP288	MD50	不整形	35	〈30〉	27.5	152.33
SKP290	LT55	不整形	32	19	20.5	152.19
SKP291	LT55	不整形	26	23	16.5	152.30
SKP293	MC49	方形	20	15	4	152.59

第８表　柱穴様ピット一覧表５

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP294	MC51	不整形	40	22	30	152.32
SKP295	ME50	楕円形	35	23	27	152.27
SKP296	LQ53	円形	24	22	17	152.57
SKP297	LP51	円形	28	26	13	152.50
SKP298	LP51	不整形	19	〈15〉	11	152.53
SKP299	ME50	円形	25	23	11	152.43
SKP300	MC49	不整形	36	34	24	152.31
SKP301	LQ52	不整形	22	20	21.5	152.49
SKP302	LQ53	方形	25	22	13	152.52
SKP303	ME50	楕円形	30	20	18.5	152.30
SKP304	ME49	隅丸方形	24	19	16	152.47
SKP306	MD48	隅丸方形	28	27	20	152.38
SKP307	MD48	不整形	16	〈10〉	15	152.40
SKP308	MD48	不整形	35	〈14〉	〈10〉	152.34
SKP309	MD48	不整形	33	〈14〉	20	152.35
SKP310	MD48	方形	24	〈23〉	16	152.36
SKP312	LP51	円形	26	23	20	152.48
SKP313	LQ51	円形	20	18	25	152.49
SKP315	MD48	方形	16	〈13〉	6	152.51
SKP316	LP51	不整形	32	20	14	152.54
SKP317	LP51	不整形	30	23	19.5	152.48
SKP318	MD50	円形	22	21	21	152.43
SKP319	MD49	隅丸方形	25	〈12〉	22	152.37
SKP321	ME49	楕円形	35	26	21.5	152.43
SKP322	ME48	不整形	44	39	26	152.36
SKP323	ME48	隅丸方形	40	33	11	152.51
SKP324	LP53	円形	30	27	15.5	152.52
SKP325	LP52	隅丸方形	38	32	29	152.35
SKP326	LP52	不整形	30	〈17〉	18.5	152.43
SKP327	ME・MF48	円形	23	18	15.5	152.40
SKP328	LP52	不整形	30	20	12	152.57
SKP329	MC49	方形	45	34	38.5	152.16
SKP330	MC49	不整形	43	〈38〉	13.5	152.43
SKP331	LR52	不整形	22	20	17	152.53
SKP333	LQ52	楕円形	28	24	14	152.55
SKP334	LQ53	楕円形	21	〈14〉	10	152.61
SKP336	MD48	不整形	10	〈6〉	23	152.35
SKP338	ME49	隅丸方形	42	38	13.5	152.48
SKP339	ME49	方形	27	〈24〉	23	152.41
SKP340	LP53	隅丸方形	27	〈13〉	13	152.54
SKP341	LQ53	円形	22	22	17	152.54
SKP342	MC49	方形	22	〈11〉	20	152.34
SKP343	LP50	円形	19	18	7	152.66
SKP345	ME50	楕円形	40	〈32〉	12	152.37
SKP346	ME50	楕円形	56	〈40〉	12	152.37
SKP347	MC49	円形	49	43	40.5	152.13
SKP348	MD51	円形	18	17	22.5	152.36
SKP349	LP52	楕円形	33	22	7	152.51
SKP350	MC51	方形	11	〈8〉	7.5	152.54
SKP351	LP51	隅丸方形	35	33	14	152.51
SKP352	LP51	方形	21	11	11.5	152.52
SKP354	ME50	不整形	26	21	21	152.38
SKP355	ME50	方形	21	〈16〉	22	152.37
SKP356	ME50	方形	〈24〉	23	22	152.39
SKP358	ME52	不整形	24	23	10	152.30
SKP359	ME52	隅丸方形	31	27	29	152.10
SKP361	ME48	円形	54	47	12.5	152.46
SKP362	MC49	楕円形	46	26	23	152.35
SKP363	MB50	円形	20	19	18	152.47
SKP364	ME49	楕円形	33	25	20	152.35
SKP367	MD47	円形	28	23	6	152.50
SKP368	MD49	不整形	48	43	38	152.29
SKP369	ME・MF48	円形	18	〈11〉	6.5	152.48
SKP370	MD47	円形	27	26	4	152.56

第９表　柱穴様ピット一覧表６

番号	位置	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
SKP371	MD47	不整形	20	〈11〉	8	152.49
SKP372	MD47	楕円形	30	18	5	152.53
SKP373	MC50	楕円形	31	23	19	152.39
SKP376	ME50	楕円形	37	32	8.5	152.48
SKP377	MD48・49	円形	43	37	6	152.61
SKP378	MD48・49	隅丸方形	39	〈24〉	4	152.63
SKP379	MB50	隅丸方形	19	18	22	152.43
SKP381	MD49	不整形	27	26	31	152.34
SKP382	MF48	楕円形	29	20	9	152.41
SKP383	MF48	不整形	28	6	25	152.25
SKP384	MF48	円形	23	21	7	152.45
SKP385	MF48	楕円形	30	16	10.5	152.40
SKP386	MF48	隅丸方形	35	28	12	152.39
SKP387	MF48	楕円形	53	32	5	152.46
SKP388	MF48	楕円形	40	〈24〉	24	152.28
SKP390	MD49	方形	27	〈14〉	21	152.45
SKP392	MC49	方形	31	25	10	152.40
SKP393	MB43	円形	29	25	20	152.28
SKP394	MB43	不整形	37	〈18〉	20	152.28
SKP395	MB・MC43	隅丸方形	24	23	8.5	152.43
SKP396	MG48	隅丸方形	47	39	23.5	152.24
SKP397	MG48	隅丸方形	48	35	14	152.33
SKP398	MG48	円形	30	28	6	152.40
SKP399	MF49	楕円形	40	30	27	152.24
SKP400	MF49	隅丸方形	27	25	9.5	152.33
SKP401	MD・ME45	隅丸方形	45	40	15	152.33
SKP403	MB47	隅丸方形	38	20	5	152.49
SKP404	MC53	楕円形	38	30	10	152.09
SKP405	MC53	円形	〈17〉	17	9	152.43
SKP406	LT55	方形	20	14	8.5	152.32
SKP407	LT55	不整形	15	14	44	151.96
SKP408	MF48	隅丸方形	23	20	9.5	152.35
SKP409	MF48	楕円形	36	20	19.5	152.26
SKP412	ME49	隅丸方形	43	21	23	152.33
SKP413	MF52	隅丸方形	48	46	11	151.92
SKP415	MF44	円形	46	45	19	152.40
SKP416	ME44	方形	28	26	5	152.51
SKP417	MF43・44	円形	26	25	12	152.46
SKP418	MG45	隅丸方形	52	47	22.5	152.57
SKP420	MB53	楕円形	36	〈26〉	28.5	152.24
SKP421	MA53	円形	35	34	21	151.90
SKP422	MG・MH45	楕円形	40	28	8.5	152.41
SKP423	MF43	隅丸方形	30	25	8	152.52
SKP424	ME43	不整形	24	23	9	152.48
SKP425	ME42	円形	24	22	12.5	152.36
SKP426	MD44	隅丸方形	26	20	7	152.44
SKP428	MG・MH44	方形	61	60	28	152.31
SKP429	MH45	不整形	65	60	28	152.29
SKP430	ME43	不整形	21	10	9	152.49
SKP431	MH44	不整形	45	30	13	152.50
SKP432	ME42	円形	32	29	13	152.33
SKP433	LR52	楕円形	34	21	16	152.40
SKP434	LS50・51	隅丸方形	28	26	14	152.57
SKP435	MF40	隅丸方形	24	16	18.5	152.23
SKP436	MF44	方形	25	20	10	152.44
SKP437	LT51	隅丸方形	18	14	10	152.56
SKP438	LT51	不整形	19	16	10	152.62
SKP439	MD・ME42	不整形	61	〈38〉	29	152.16
SKP440	MF39	隅丸方形	32	28	〈10〉	152.30
SKP442	LQ54	隅丸方形	33	32	12.5	152.45
SKP443	LQ54	隅丸方形	34	33	23	152.37
SKP444	MF48	不整形	35	28	18.5	152.36
SKP445	MF48	円形	21	19	23.5	152.33
SKP446	ME48	楕円形	32	25	16	152.36

第３節　遺構外出土遺物

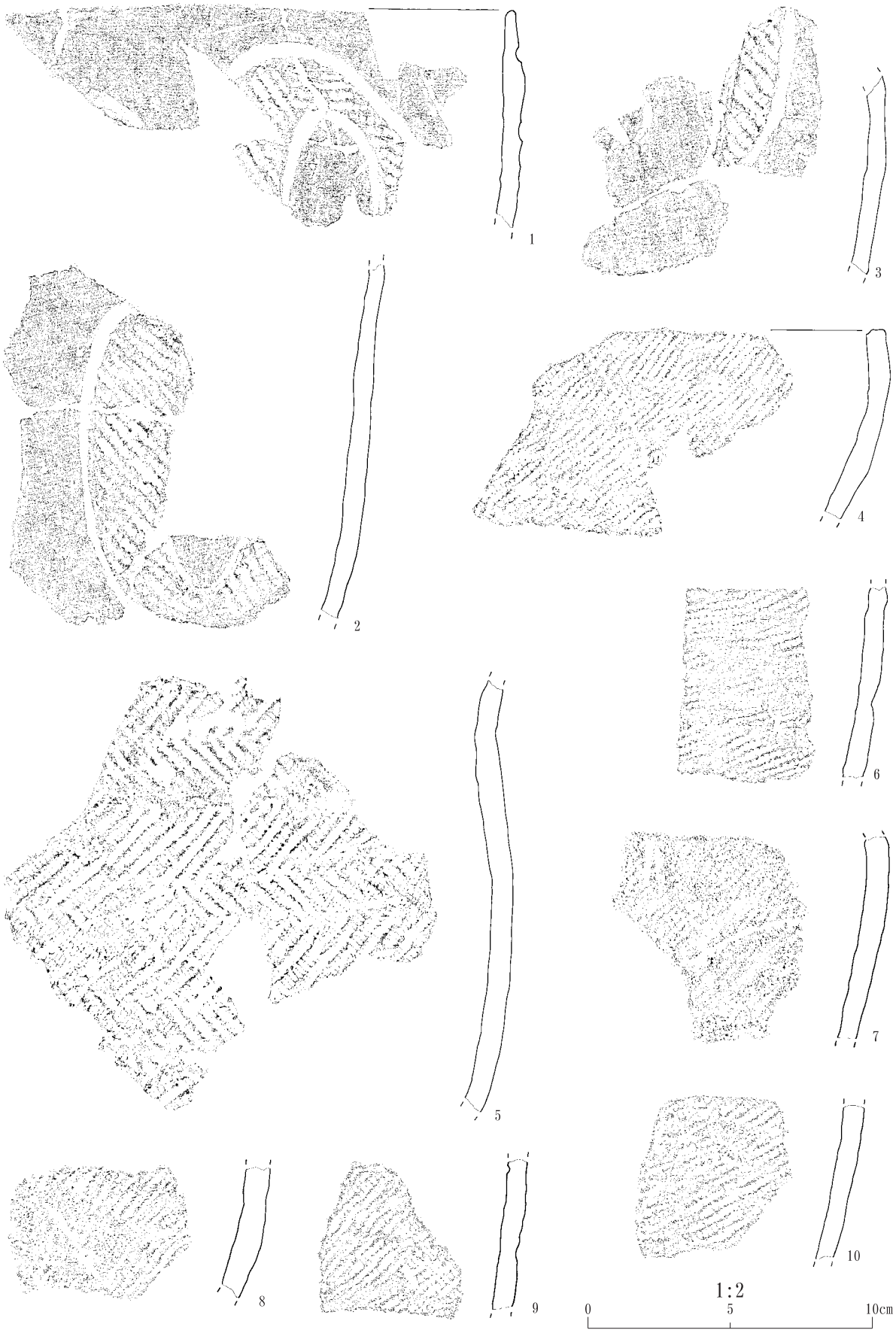
１　縄文時代の遺物

（１）土器【第37～39図（Ｐ57～59）／図版９】

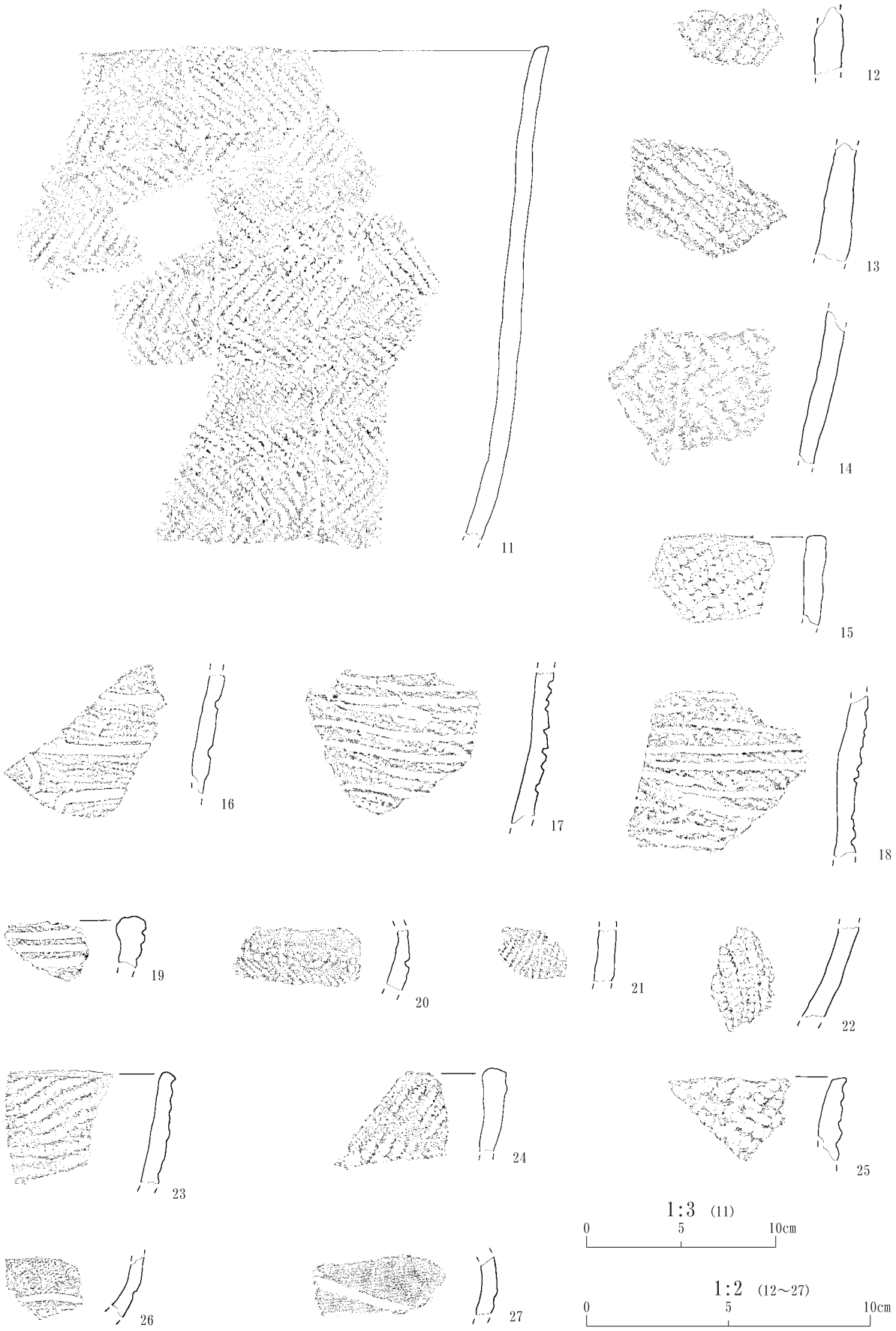
出土した縄文時代の土器は、前期～晩期（約6,000～2,500年前）までと思われるものが極少量である。完形のものはなく、ほとんどが破片にとどまる（一部略完形あり）。第37～39図に出土した縄文土器の一部を掲載する。あわせて、第10表による、出土位置・器形・部位・所見・時期の５項目の提示をもって、遺構外出土縄文土器の調査報告とする。

第10表　縄文土器一覧表

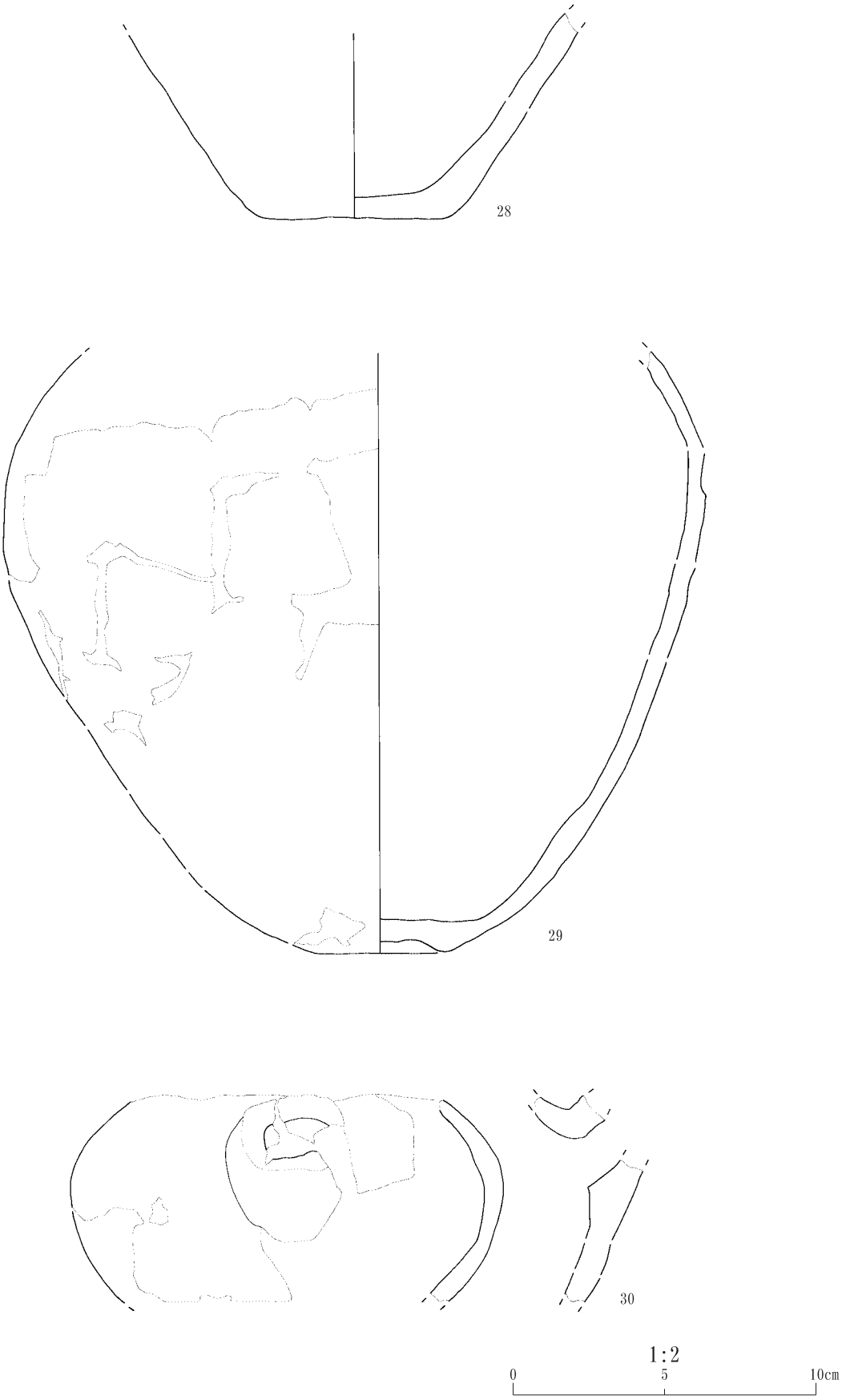
遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器形	部位	所見	時期
1	37	9	ＭＦ51	深鉢	口縁部	大木10式古段階・変形的な長楕円文？・磨消縄文・文様部沈線太め・内ミガキ／2・3と同一個体	縄文中期末葉
2	37	9	ＭＦ51	深鉢	胴部	1・3と同一個体／所見同様	縄文中期末葉
3	37		ＭＦ51	深鉢	胴部	1・2と同一個体／所見同様	縄文中期末葉
4	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	ＬＲ縄文縦位回転・ややふくらみあり・内ナデ	縄文中期
5	37		ＭＡ62	深鉢	口頸～胴部	羽状縄文・胴部ややふくらむ・内ナデ	縄文中期
6	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	ＬＲ縄文横位回転・内ナデ	縄文中期
7	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	ＬＲ縄文縦位回転・内ナデ／8・9と同一個体	縄文中期
8	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	7・9と同一個体／所見同様	縄文中期
9	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	7・8と同一個体／所見同様	縄文中期
10	37		ＭＤ58	(深)鉢	胴部	ＬＲ縄文縦位回転・内ナデ	縄文中期
11	38		ＬＴ62	深鉢	口縁～胴部	結束ある羽状縄文（上帯ＬＲ・下帯ＲＬ）・胴部ややふくらむ・口唇部平ら・内ナデ	縄文中期
12	38		ＭＥ56	(深)鉢	胴部	ＲＬ縄文縦位回転・内ナデ	縄文中期
13	38		ＭＡ59	(深)鉢	胴部	ＲＬ縄文斜位回転・内ナデ	縄文中期
14	38		ＬＴ62	(深)鉢	胴部	羽状縄文・内ナデ	縄文中期
15	38		ＬＴ62	鉢	口縁部	ＬＲ縄文横位回転・口唇部平ら・内ナデ	縄文中期末葉？
16	38		ＬＰ56	(深)鉢	胴部	ＲＬ縄文横位回転→太沈線区画・内ナデ	縄文中期後半～後期初頭
17	38		ＭＣ56	(深)鉢	胴部	Ｒ縄文横位回転→横位沈線・ややふくらみあり・内ナデ	縄文中期後半～後期初頭
18	38		ＭＣ57	(深)鉢	胴部	17と同一個体／所見同様	縄文中期後半～後期初頭
19	38		ＬＯ59	(深)鉢	口縁部	口唇部に3本の並行沈線・口唇部やや内傾・内ナデ	縄文後期
20	38		ＭＡ53	(深)鉢	胴部？	径1mm位の円形刺突文2段・ややふくらみあり・内ナデ	縄文中期後半～後期初頭
21	38		ＭＤ54	(深)鉢	胴部	ＲＬ縄文縦位回転・内ナデ	縄文後期
22	38		ＬＰ56	(深)鉢	胴部	ＲＬ縄文縦位回転・内ナデ	縄文後期
23	38		ＬＰ56	(深)鉢	口縁部	前々段多条ＬＲℓ縄文横位回転（節密集）・口唇部に工具調整痕・口唇部やや丸む・内ナデ	縄文後期
24	38		ＬＰ56	鉢	口縁部	前々段多条ＬＲℓ縄文縦位回転（節密集）・口唇部に工具調整痕・内ナデ	縄文後期
25	38		ＬＴ62	(深)鉢	口縁部	ＬＲ縄文縦位/斜位回転・口唇部に工具調整痕・口唇部やや折り返し気味・内ナデ	縄文後期
26	38		ＭＡ57	鉢	胴部	Ｒ縦位回転→横位沈線・内ナデ	縄文晩期
27	38		ＬＲ58	鉢	胴部	太沈線・内ナデ・外ミガキ	縄文晩期
28	39	9	ＭＦ51	深鉢	胴下半～底部	無文・内外ナデ	縄文中期
29	39	9	ＭＦ56	深鉢	口頸～底部	無文・やや上げ底・胴上半～口頸部にかけて内傾・外に一部煤状炭化物・口縁部全面欠損・内外ナデ	縄文後期末葉
30	39	9	ＭＦ56	注口土器	胴部・注口部	無文・口縁/底部全面欠損・注口先端部欠損・内外ナデ	縄文後期末葉



第37図　遺構外出土遺物　縄文土器１



第38図　遺構外出土遺物　縄文土器２



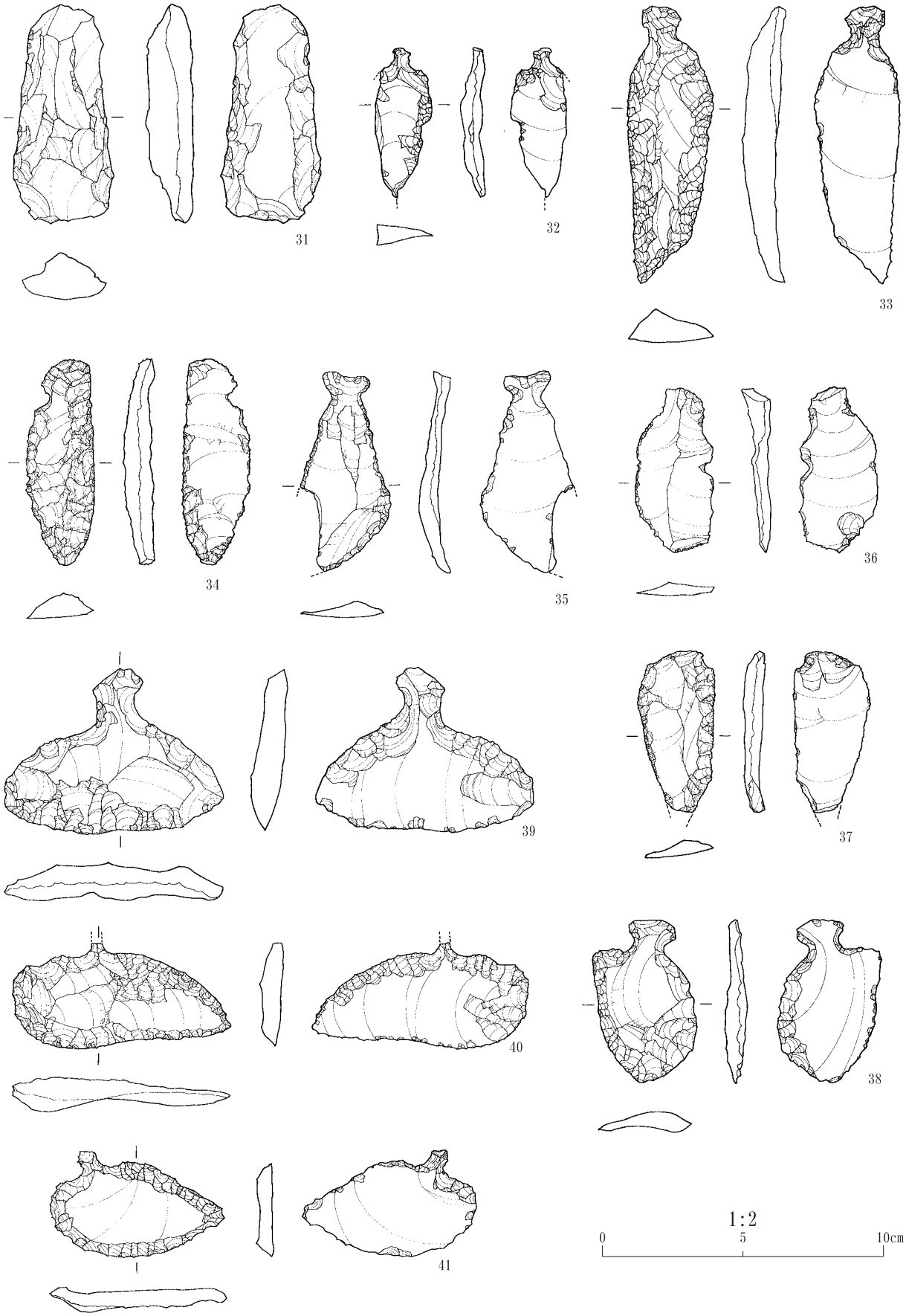
第39図　遺構外出土遺物　縄文土器３

（２）石器【第40～44図（Ｐ61～65）／図版９】

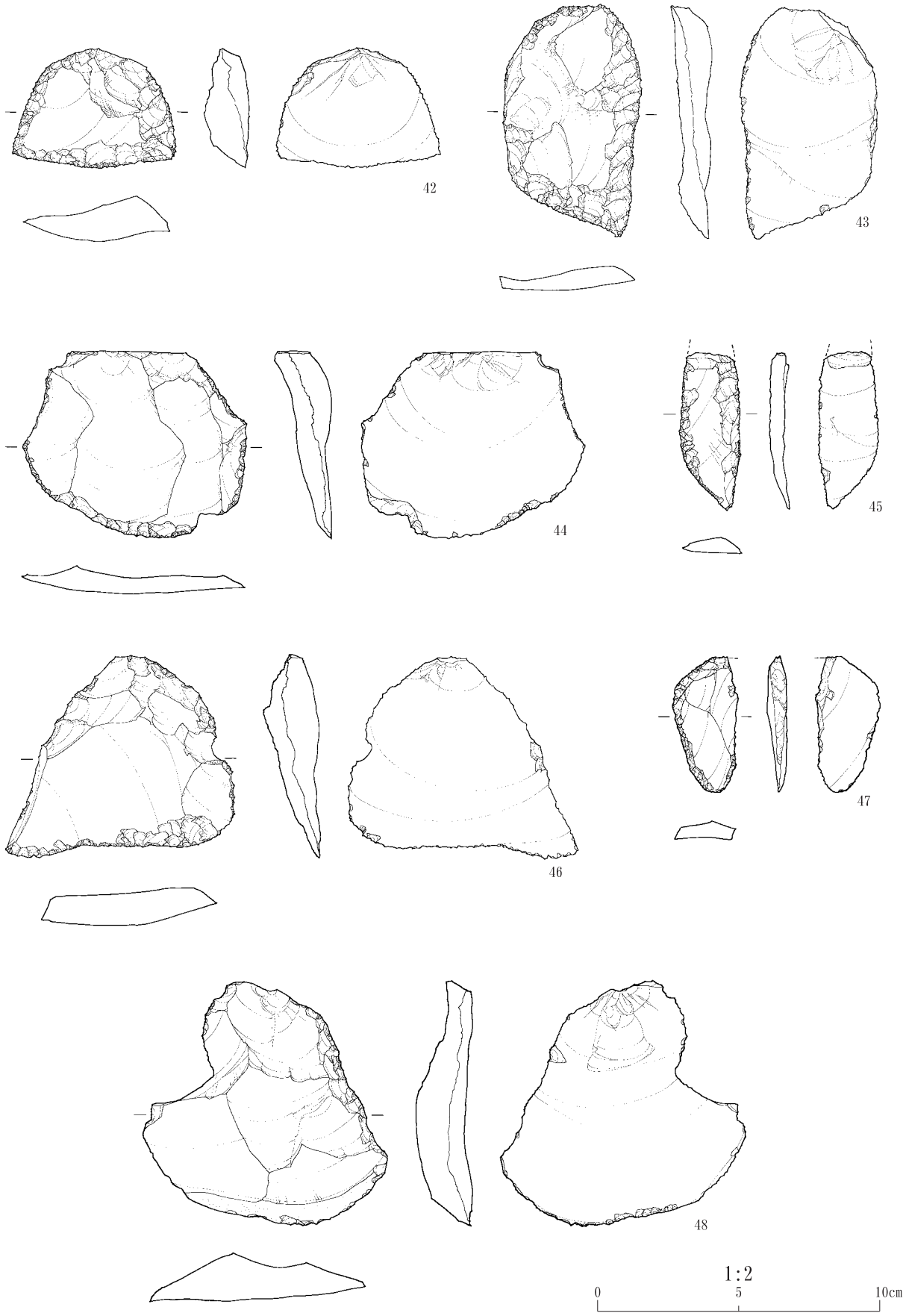
出土した石器は、ほぼすべてが縄文時代のものと思われるが、時期特定は困難である。土器と同様、出土量は極少量であるが、完形のものが比較的多い。第40～44図に出土した石器の一部を掲載する。あわせて、第11表による、出土位置・器種・石質・最大長・最大幅・最大厚・重量の７項目の提示をもって、遺構外出土石器の調査報告とする。

第11表　石器一覧表

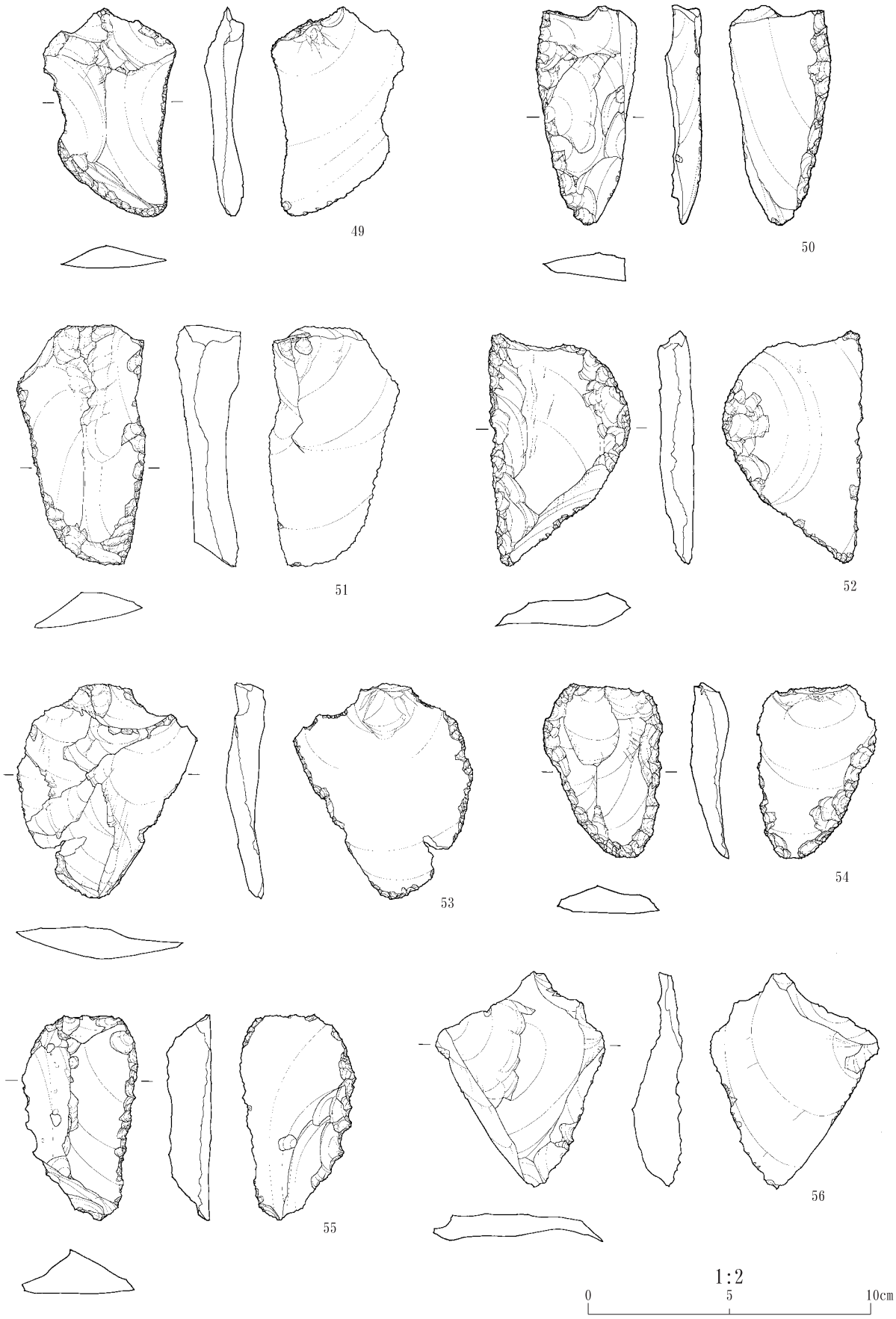
遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	石質	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）
31	40	9	ＭＦ58	石篦	頁岩	76.8	34.8	17.0	47.8
32	40		ＬＯ56	石匙(縦・細型)	頁岩	52.2	20.0	9.0	5.9
33	40	9	ＬＰ56	石匙(縦・細型)	頁岩	97.3	30.3	11.2	31.1
34	40	9	ＬＮ59	石匙(縦・細型)	玉髄	72.7	24.0	11.0	16.5
35	40		ＭＦ55	石匙(縦・細型)	頁岩	70.3	32.7	7.8	12.4
36	40		ＬＳ55	石匙(縦・細型)	頁岩	57.9	27.9	5.7	9.0
37	40		ＭＤ54	石匙(縦・細型)	頁岩	56.9	27.8	5.8	9.0
38	40	9	ＭＤ60	石匙(縦・太型)	頁岩	57.4	37.0	7.4	13.8
39	40	9	ＭＢ57	石匙(横型)	頁岩	58.5	77.5	11.1	42.6
40	40		ＬＤ57	石匙(横型)	頁岩	37.5	76.0	11.4	25.8
41	40		ＬＴ56	石匙(横型)	頁岩	38.7	60.8	5.7	13.6
42	41	9	ＬＰ56	スクレイパー	玉髄	43.0	57.4	17.4	31.3
43	41	9	ＬＰ57	スクレイパー	頁岩	83.2	48.6	13.5	43.6
44	41		ＬＯ55	スクレイパー	頁岩	68.0	79.0	13.4	59.2
45	41		ＭＰ56	スクレイパー	頁岩	55.2	21.5	5.1	7.4
46	41	9	ＬＰ56	スクレイパー	頁岩	67.8	81.5	18.0	73.3
47	41		ＭＡ54	スクレイパー	頁岩	47.7	23.2	6.3	7.3
48	41	9	ＬＴ56	スクレイパー	頁岩	87.3	84.5	17.5	98.0
49	42		ＭＥ53	スクレイパー	頁岩	74.6	46.7	12.0	27.9
50	42		ＭＢ57	スクレイパー	頁岩	76.3	35.3	11.1	32.6
51	42	9	ＬＤ57	スクレイパー	玉髄	86.3	47.0	24.1	67.1
52	42		ＬＰ56	スクレイパー	頁岩	81.7	49.5	11.0	45.7
53	42		ＭＣ61	スクレイパー	頁岩	75.4	63.1	11.0	39.1
54	42		ＬＳ56	スクレイパー	頁岩	60.1	43.6	11.9	29.1
55	42		ＭＧ56	スクレイパー	頁岩	72.7	41.0	15.3	30.6
56	42		ＬＰ58	スクレイパー	頁岩	74.6	59.2	12.5	37.0
57	43		ＭＥ61	スクレイパー	頁岩	58.7	55.8	8.9	30.6
58	43		ＬＯ56	スクレイパー	頁岩	58.6	55.2	13.0	46.7
59	43		ＬＤ58	スクレイパー	玉髄	62.6	45.3	13.0	34.6
60	43		ＭＦ54	スクレイパー	頁岩	75.9	51.5	10.9	40.9
61	43		ＭＢ57	スクレイパー	頁岩	57.1	39.4	14.1	27.2
62	43		ＬＰ56	スクレイパー	頁岩	40.9	62.4	6.4	14.6
63	43		ＬＰ56	スクレイパー	頁岩	67.6	28.6	11.8	24.9
64	43		ＭＤ51	スクレイパー	頁岩	66.9	23.1	7.8	10.4
65	44	9	ＬＦ56	磨製石斧	安山岩	90.8	43.9	20.0	131.1
66	44		ＭＡ51	二次加工のある剥片	頁岩	73.2	40.6	16.3	51.3
67	44		ＭＣ61	石核	頁岩	57.6	63.3	40.6	155.8
68	44		ＭＣ62	石核	頁岩	70.4	72.0	32.2	160.4



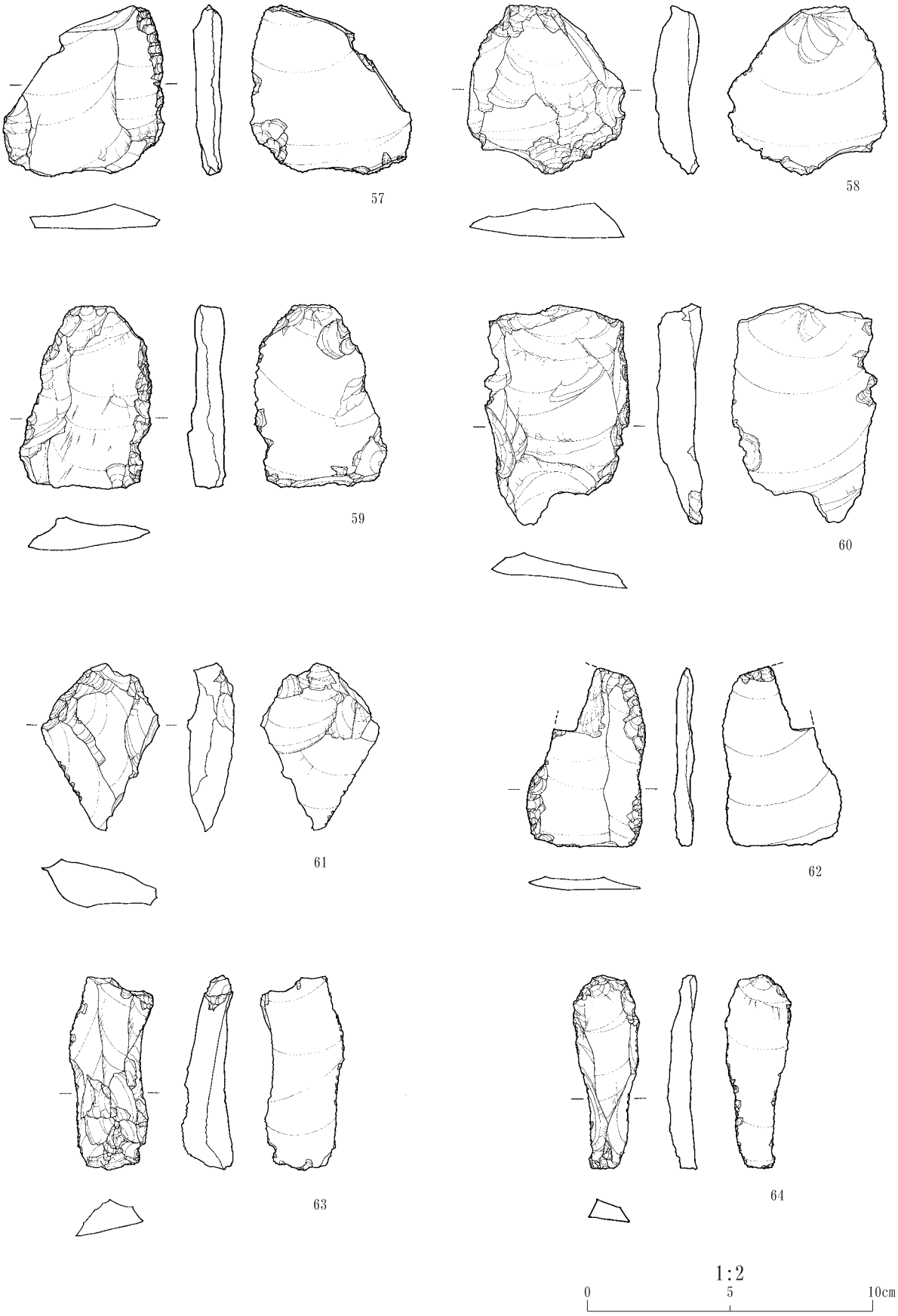
第40図　遺構外出土遺物　石　器１



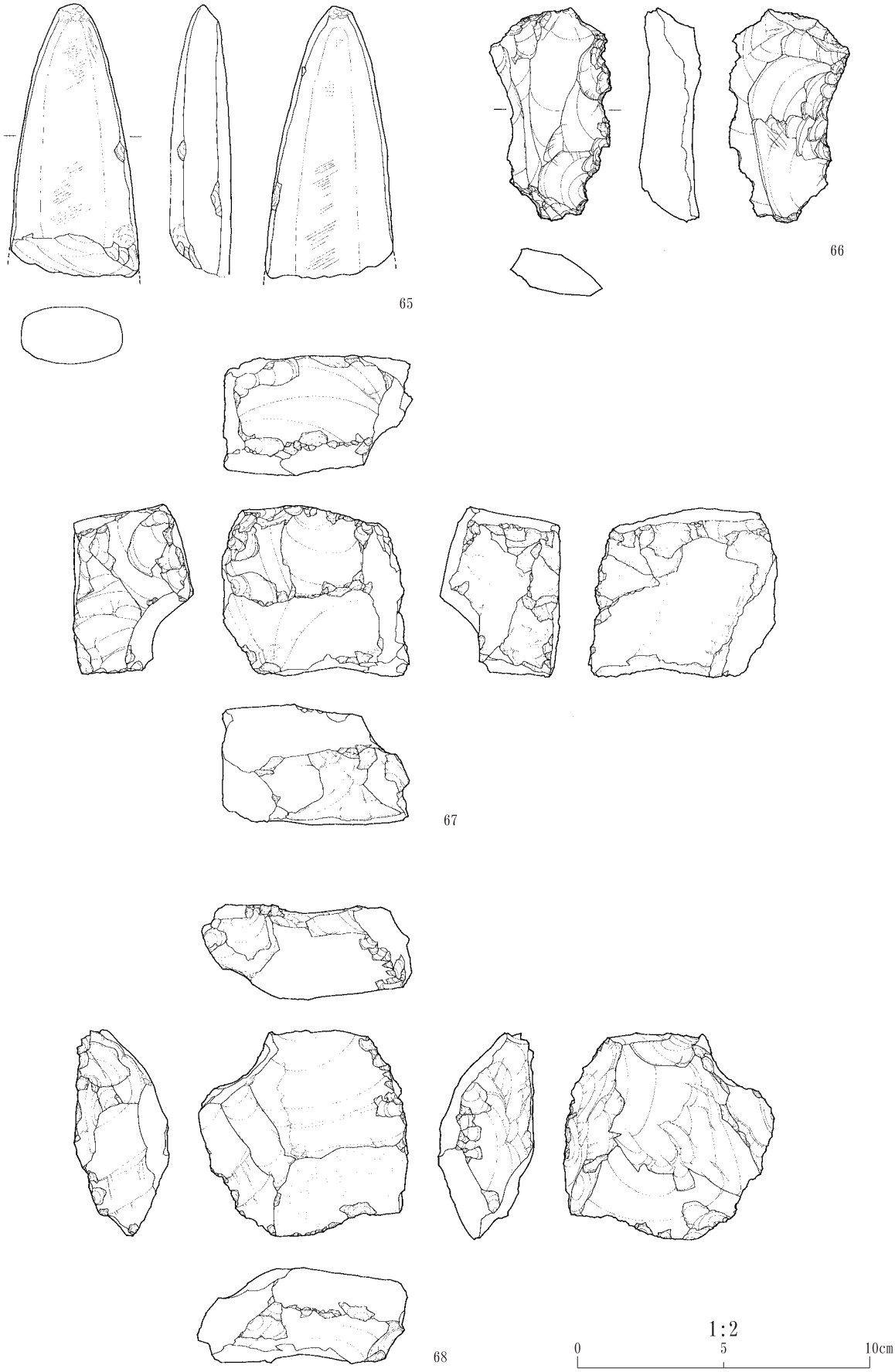
第41図　遺構外出土遺物　石　器２



第42図　遺構外出土遺物　石　器３



第43図　遺構外出土遺物　石　器４



第44図　遺構外出土遺物　石　器５

２　中世の遺物【第45図（Ｐ67）／図版10】

出土した遺物は、陶器片が極少量である。第45図に出土した陶器片の一部を掲載する。あわせて、第12表による、出土位置・器形・部位・所見・時期の５項目の提示をもって、遺構外出土中世陶器の調査報告とする。

第12表　中世陶器一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器形	部位	所見	時期
69	45	10	MF52	小皿	口縁部	瀬戸系・内外面施釉（淡い黄緑色）	16世紀
70	45	10	ME56	小皿	口縁部	瀬戸系・内外面施釉（淡い黄緑色）	16世紀
71	45	10	LP56	擂鉢	口縁部	珠洲系Ⅲ～Ⅳ期・内外面ロクロナデ・内面ヘラナデ	13～14世紀
72	45	10	MC54	擂鉢	口縁部	珠洲系Ⅵ期・口縁やや外反・内外面ロクロナデ	15世紀後半
73	45	10	MB54	擂鉢	胴下半～底部	珠洲系Ⅵ期？・胎土低質・焼成不良	15世紀後半？
74	45	10	MD56	擂鉢	胴部	胎土低質・焼成不良	不明
75	45	10	MD56	擂鉢	胴部	オロシメ細く密集	不明
76	45	10	ME45	甕？	胴部	外面タタキメ	不明
77	45	10	MC52	甕？	胴部	外面タタキメ	不明

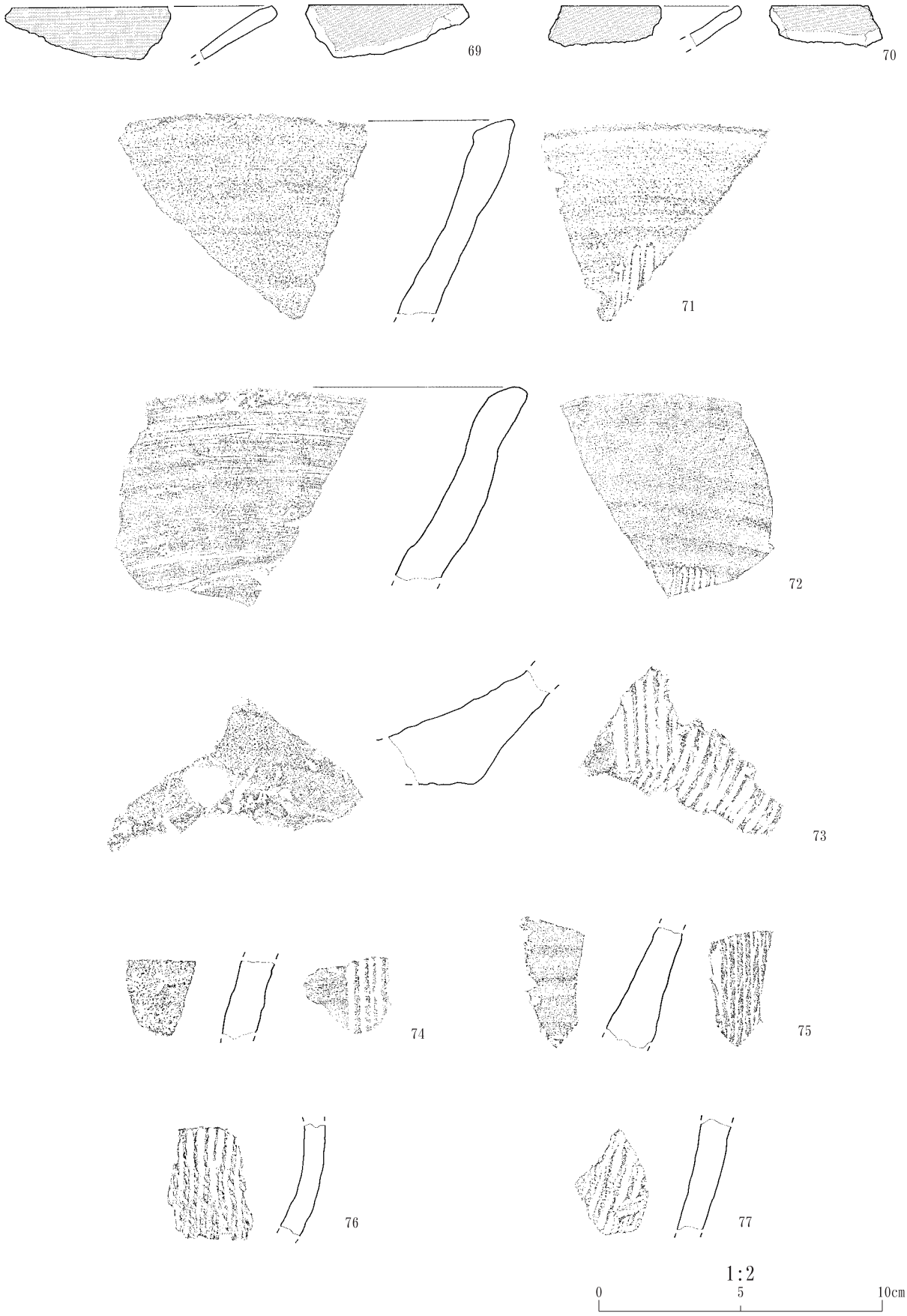
３　近世の遺物

（１）陶器【第46・47図（Ｐ68・69）／図版10】

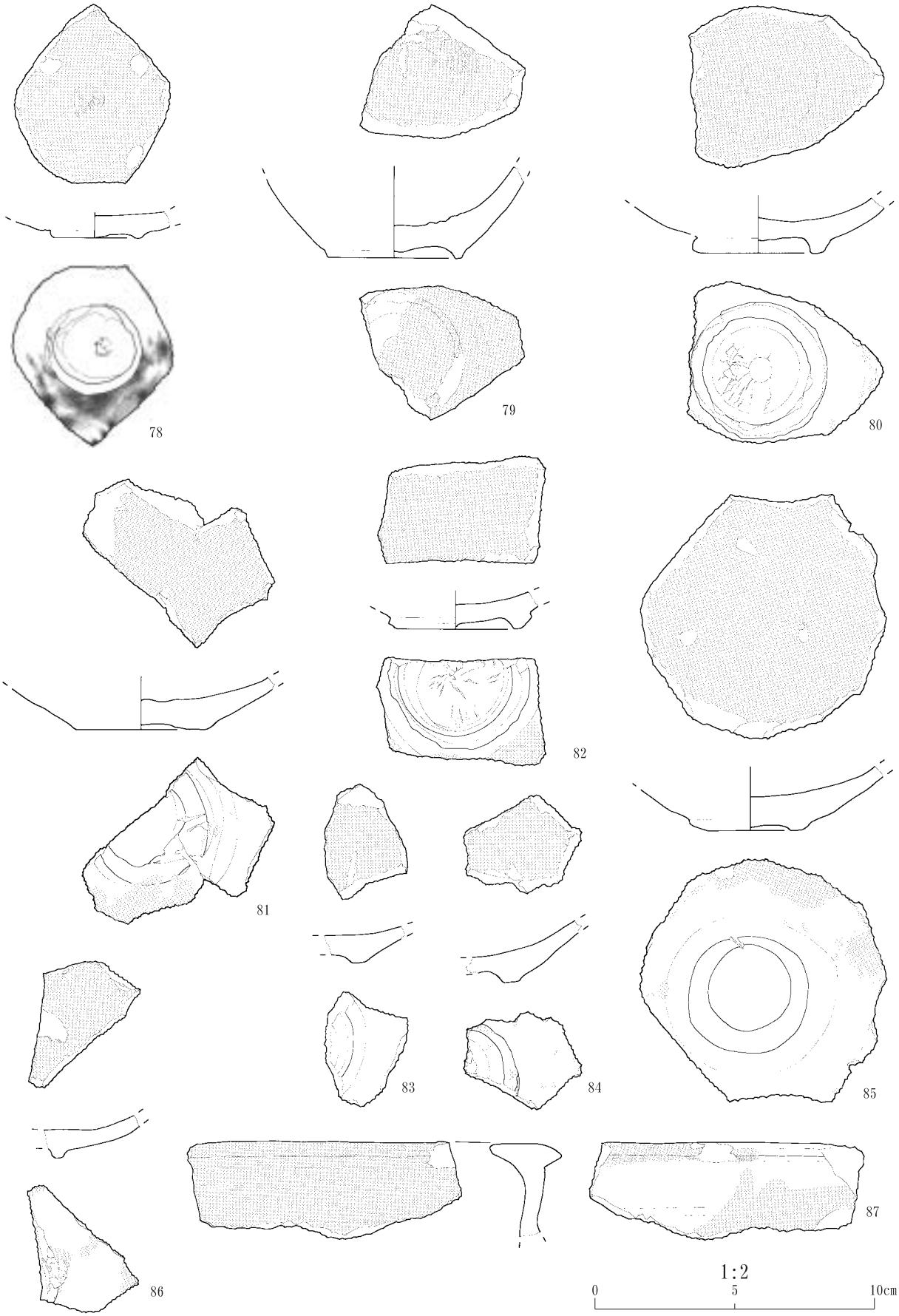
出土した近世陶器は破片が極少量である。肥前（唐津）系と思われるものと在地系と思われるものが混在している。第46・47図に出土した陶器片の一部を掲載する。あわせて、第13表による、出土位置・器形・部位・所見・時期の５項目の提示をもって、遺構外出土近世陶器の調査報告とする。

第13表　近世陶器一覧表

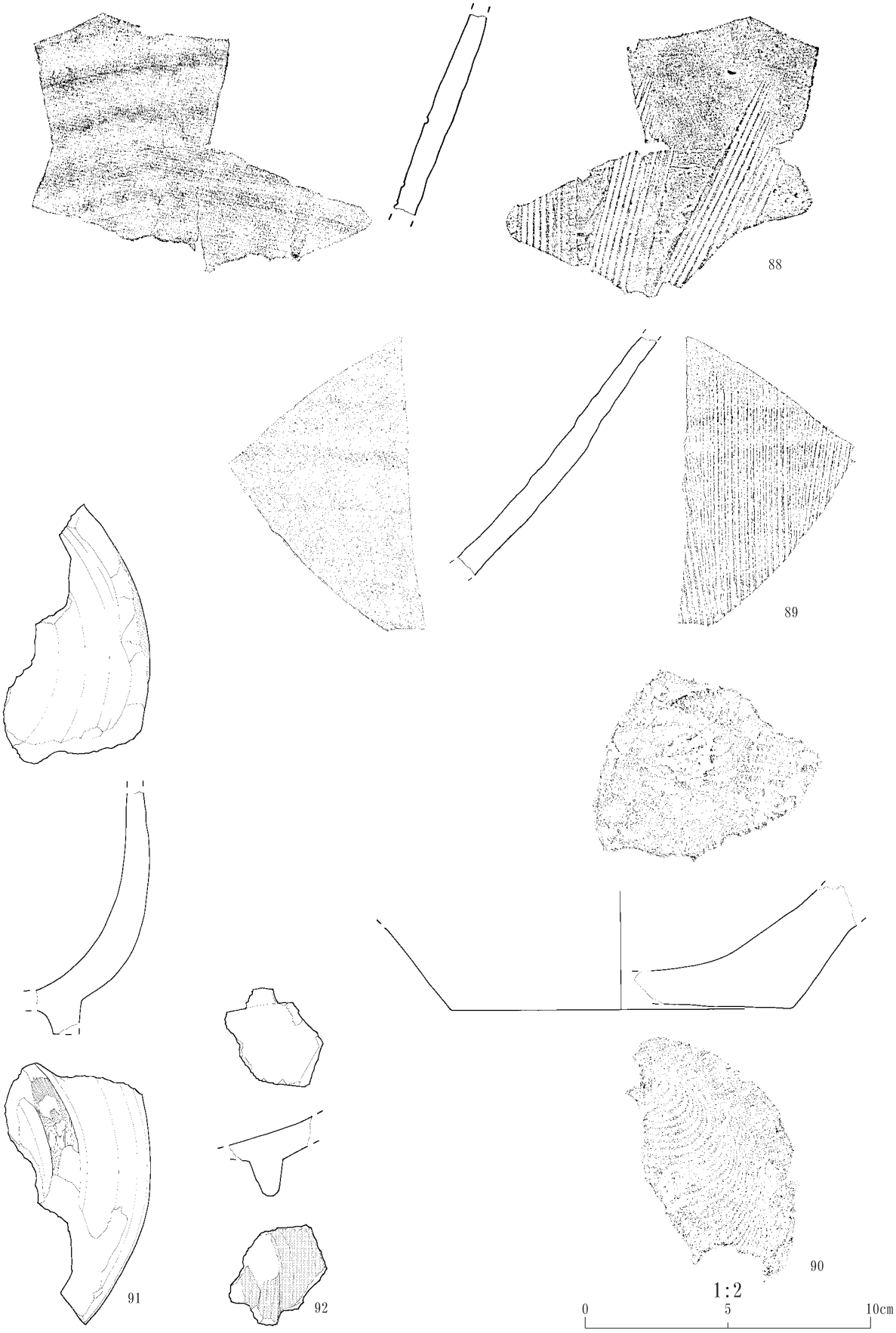
遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器形	部位	所見	時期
78	46	10	MD51	皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉・砂目積み痕	17世紀
79	46	10	LT56	碗	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉	17世紀
80	46	10	MD55	皿	底部	肥前（唐津）系・内面灰釉	18世紀
81	46	10	LT56	皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉	18世紀
82	46	10	MF57	皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉	18世紀
83	46		LS51	小皿	底部	肥前（唐津）系・内面灰釉・砂目積み痕	18世紀
84	46		MC55	小皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉・砂目積み痕・被熱	18世紀
85	46	10	MG55	皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉・砂目積み痕	18世紀
86	46		LT53	小皿	底部	肥前（唐津）系・内面/外面一部灰釉・砂目積み痕・被熱	18世紀
87	46	10	LD57	甕	口縁部	外面/内面一部鉄釉	18～19世紀
88	47		MD55・LQ58	擂鉢	胴部	無釉・オロシメ原体8本	18世紀
89	47		MA51	擂鉢	胴部	全面施釉・オロシメやや細く密集	19世紀
90	47	10	MD51	擂鉢	底部	堺産？・無釉・糸切り痕あり	17世紀
91	47		MF57	壺	底部	外面一部鉄釉・内外面ロクロナデ	19世紀以降
92	47	10	MC57	鉢	底部	在地系・内面ナマコ釉・外面鉄釉	19世紀以降



第45図　遺構外出土遺物　中世陶器



第46図　遺構外出土遺物　近世陶器１



第47図　遺構外出土遺物　近世陶器２

（２）磁器【第48・49図（Ｐ71・72）／図版10】

出土した近世磁器は破片が極少量である。肥前系と思われるものと在地系と思われるものが混在している。全般に、近代に近い時期に生産された新しいものが多い様相である。また、大半が広域に流通していたと思われる、いわゆる雑器の類である。第48・49図に出土した磁器片の一部を掲載する。あわせて、第14表による、出土位置・器形・部位・所見・時期の５項目の提示をもって、遺構外出土近世磁器の調査報告とする。

第14表　近世磁器一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器形	部位	所見	時期
93	48	10	LS51	碗	胴下半～底部	肥前系青磁	18世紀
94	48	10	表採	碗	底部	肥前系染付・砂目積み痕	17世紀
95	48	10	MD54	皿	底部	肥前系（波佐見産）・内側釉剥ぎ痕・高台無釉	17世紀
96	48	10	LP51	皿	口縁～胴部	産地不明・染付・内面草花文・外面「了」？字文様・漆継ぎ痕	17世紀
97	48	10	ME56	碗	胴部	肥前系染付・一重編目文	17世紀
98	48	10	LS51	小皿	底部	肥前系染付・内側梅樹文・砂目積み痕	17世紀
99	48		MA56	小皿	口縁部	肥前系染付・文様不明	18世紀
100	48		LS56	碗？	胴部	産地不明・染付・文様不明	不明
101	48		MB53	碗？	胴部	産地不明・染付・外面草花文	不明
102	48		MH44	碗？	胴部	産地不明・染付・文様不明	不明
103	48		MA51	皿	口縁部	産地不明・染付・内面渦巻文	不明
104	48		MH44	碗？	口縁部	瀬戸系・染付・文様不明	18世紀？
105	49		MC55	皿	底部	肥前系染付・文様不明・砂目積み痕	17世紀？
106	49		LT59・MB57	皿	底部	肥前系染付・文様不明・砂目積み痕	17世紀？
107	49		MD53・MC50	皿	底部	産地不明・染付・文様不明	不明
108	49		LT55	皿	底部	産地不明・染付・文様不明・砂目積み痕・高台底部無釉	不明
109	49		MC59	皿	底部	在地系・染付・文様不明	18～19世紀
110	49		MC52	皿	底部	産地不明・染付	不明
111	49		LS51	徳利	底部	産地不明・染付・内面無釉・外面草文	不明
112	49		MF57	碗	底部	瀬戸系・染付	19世紀

《第４章　参考文献》

佐原真　「特論－縄文施文法入門」　『縄文土器大成　５』所収　講談社　1982(昭和57)年

丹羽茂　「中期の土器　大木式土器」　『縄文文化の研究　４』所収　雄山閣　1981(昭和56)年

本間宏　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」　『よねしろ考古　１』所収　1985(昭和60)年

本間宏　「大木10式土器の考え方」　『しのぶ考古 10』所収　1994(平成６)年

鈴木道之助　『図録・石器入門辞典〈縄文〉』　柏書房　1994(平成６)年

吉岡康暢　『日本海域の土器・陶磁（中世編)』　人類史叢書10　六興出版　1989(平成元)年

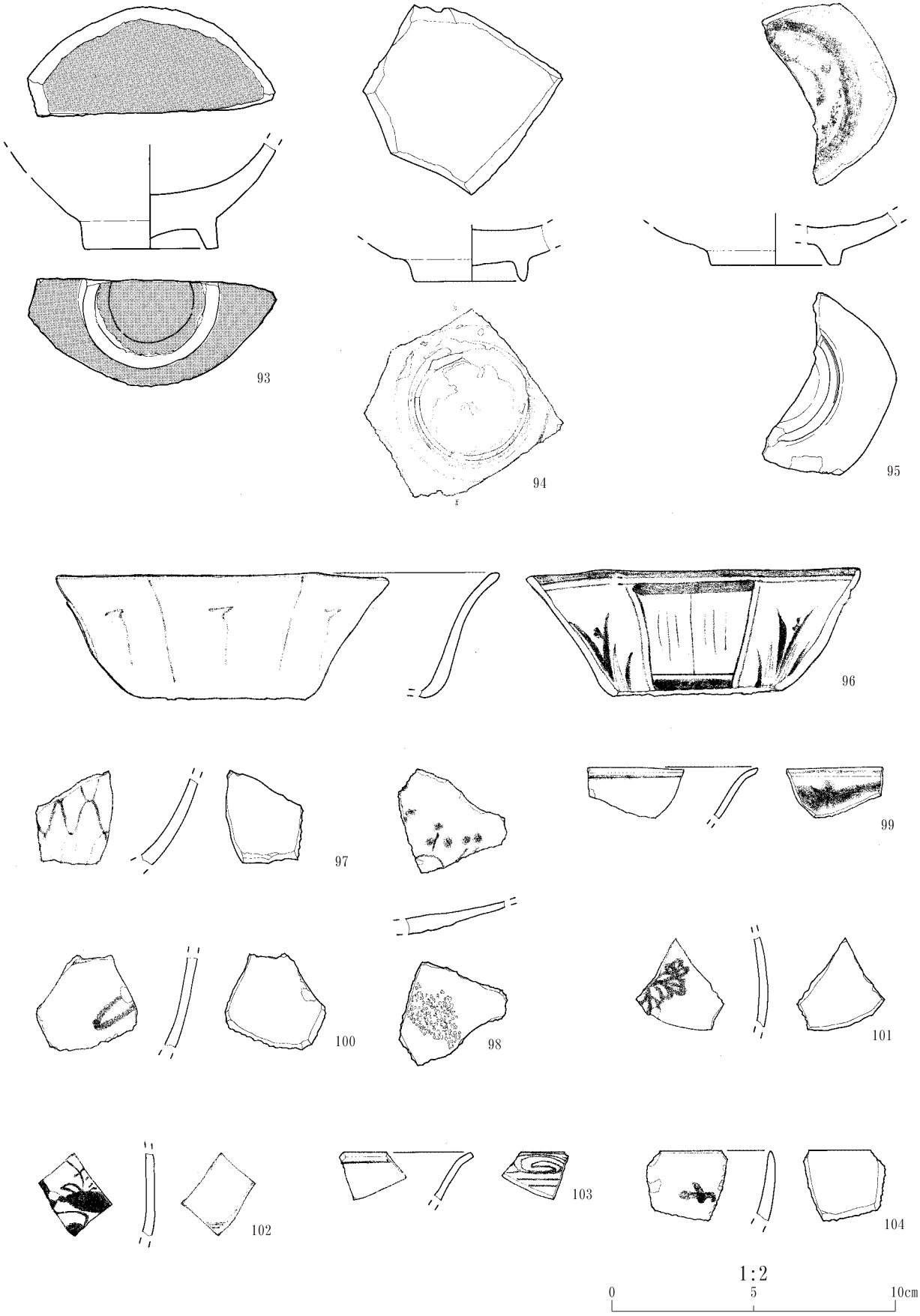
吉岡康暢監修　『珠洲の名陶』　珠洲市立珠洲焼資料館　1989(平成元)年

大橋康二　『肥前陶磁（考古学ライブラリー55)』　ニューサイエンス社　1990(平成２)年

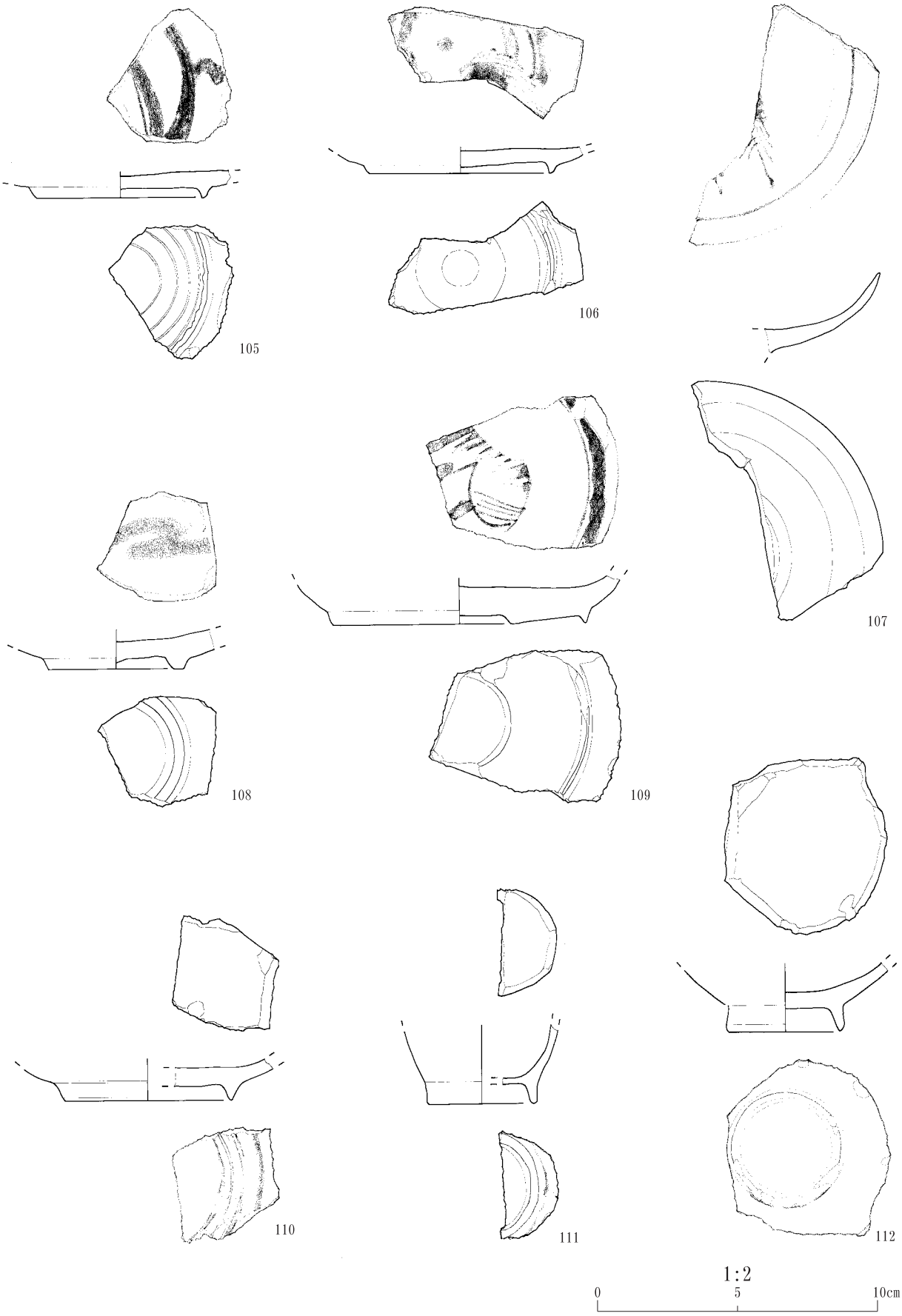
九州近世陶磁学会　『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会10周年記念－』　2000(平成12)年

九州近世陶磁学会　『国内出土の肥前陶磁　－東日本の流通をさぐる－』　2001(平成13)年

秋田市教育委員会　『藩校明徳館跡　－市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書－』　2002(平成14)年



第48図　遺構外出土遺物　近世磁器１



第49図　遺構外出土遺物　近世磁器２

第５章　自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第１節　放射性炭素年代測定

１．試料

試料は、石組炉（ＳＢ184炉）・竪穴状遺構（ＳＫＩ41）・掘立柱建物跡の柱穴（ＳＢ46Ｐ１・ＳＢ121Ｐ１）・土坑（ＳＫ43）から各１点採取された炭化材計５点である。

２．分析方法

放射性炭素年代測定は、株式会社加速器研究所の協力を得て、ＡＭＳ法により行った。なお、放射性炭素の半減期は、Libbyの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

３．結果

放射性炭素年代測定結果を第15表及び第16表（Ｐ74）に示す。試料の測定年代（補正年代）は、ＳＫ43出土炭化材(試料番号５)が約1,150年前の９世紀頃、ＳＢ184炉・ＳＫＩ41・ＳＢ46Ｐ１・ＳＢ121Ｐ１出土炭化材(試料番号１～４)が約340～510年前の15～17世紀頃に相当する値を示す。なお、炭化材の年代測定値は、古材の利用や樹齢を重ねた樹木の利用部位の違いによる年代差等の理由により、出土した遺構の構築年代や堆積層の形成年代と異なる場合がある。

第２節　樹種同定

１．試料

試料は、第１節と同様である。

２．分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を第15表（Ｐ74）に示す。炭化材の樹種同定では、試料番号１及び２にそれぞれ２種類が確認された。これらの炭化材は、針葉樹１種類（ヒノキ科）と広葉樹４種類（クリ・キハダ・

トチノキ・エゴノキ属）に同定された。

第15表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果表

試料番号	遺構	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	ＳＢ184炉	炭化材	キハダ,トチノキ	340±40	-22.47±0.72	300±40	IAAA-31705
2	ＳＫＩ41	炭化材	ヒノキ科,エゴノキ属	510±40	-23.33±0.77	480±40	IAAA-31704
3	ＳＢ46Ｐ１	炭化材	キハダ	410±40	-21.03±1.00	350±40	IAAA-31701
4	ＳＢ121Ｐ１	炭化材	クリ	350±40	-25.24±0.97	350±40	IAAA-31702
5	ＳＫ43	炭化材	ヒノキ科	1150±40	-22.39±0.79	1110±40	IAAA-31703

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第16表　暦年較正結果表

試料番号	遺構	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
1	ＳＢ184炉	338±38	cal AD 1,492 － cal AD 1,528 cal AD 1,552 － cal AD 1,603 cal AD 1,609 － cal AD 1,632	cal BP 458 － 422 cal BP 398 － 347 cal BP 341 － 318	0.320 0.462 0.218	IAAA-31705
2	ＳＫＩ41	511±38	cal AD 1,405 － cal AD 1,437	cal BP 545 － 513	1.000	IAAA-31704
3	ＳＢ46Ｐ１	413±39	cal AD 1,436 － cal AD 1,439 cal AD 1,601 － cal AD 1,612	cal BP 514 － 511 cal BP 349 － 338	0.914 0.086	IAAA-31701
4	ＳＢ121Ｐ１	345±40	cal AD 1,487 － cal AD 1,525 cal AD 1,557 － cal AD 1,631	cal BP 463 － 425 cal BP 393 － 319	0.340 0.660	IAAA-31702
5	ＳＫ43	1150±38	cal AD 783 － cal AD 789 cal AD 828 － cal AD 840 cal AD 863 － cal AD 903 cal AD 915 － cal AD 964 cal AD 970 － cal AD 975	cal BP 1,167 － 1,161 cal BP 1,122 － 1,110 cal BP 1,087 － 1,047 cal BP 1,035 － 986 cal BP 980 － 975	0.051 0.089 0.346 0.483 0.031	IAAA-31703

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

筆者注）自然科学的分析に関する語彙を一般化するために、若干の補足を施したい。放射性炭素年代測定とは、生物体（植物等も含む）が生きている間は常に体内に取り込まれる放射性炭素（^{14}C）が、生物体の死後、一定の割合・速度で壊れていく特性を利用して年代を測定するものである。生物体内に残る放射性炭素（^{14}C）の割合が、その死から半分の量になるまで要する期間が半減期であり、現在では5,730±40年が有力となっているが、本節では5,568年（1947年に放射性炭素年代測定を開発した人の名「Libby」を冠している）を使用している。以上の基本的な前提をもとに、試料内に放射性炭素（^{14}C）がどれくらい残っているかを直接数える測定方法が、ＡＭＳ法である。また、暦年代への応用は、時間的なずれを調整した上で換算される。放射性炭素年代測定は、考古学における絶対年代測定として標準的になっており、年代観の一基軸となっている。しかし、一定の仮説〔例えば、生存する同種の生物体内の放射性炭素（^{14}C）濃度は常に等しいと仮定する等々〕に基づいた統計確立的年代であり、絶対視はできないことを申し添えておきたい。

《参考文献：田中琢・佐原真他編　『日本考古学事典』　三省堂　2002(平成14)年》

第６章　まとめ

第１節　竪穴状遺構について

１．一般的な捉え方を通して

本遺跡で１基のみ検出された方形を基調とする半地下式のいわゆる竪穴状遺構は、1979(昭和54)年、中世鎌倉遺跡の発掘調査で初めて認識されて以来[注1)]、関東以外の東北・中部地方や南九州にまで確認されており、特に中世東国の広い地域に検出例が認められる特色のある遺構である[注2)]。

竪穴状遺構の出自・系譜には諸説あるが、東国の竪穴状遺構においては、古代期の竪穴住居がカマドや炉を失った結果、徐々にその機能を居住施設から作業関連施設に移行していった過程の遺構であると一般的に捉えられている。一方、古代期で竪穴住居が絶えたとされる西国においては、全体としての登場は東国の諸地域よりも遅れるとされ[注3)]、成立状況に関しては不明瞭な部分が多い。ただ、東国と西国では竪穴状遺構を考える上で出現する時期や歴史的背景に差はあるものの、その機能については、同じく非居住性の強い作業関連施設としての性格が与えられている。東国・西国を問わず、しばしば職能民との関わりが論議され、出土遺物・形態などより、職人住居兼用の作業場・鍛冶工房・皮革製品加工場（及び動物解体場）・物資倉庫等の機能を有していたのではないかという推論がなされる。このような推定機能は、竪穴状遺構の最大機能及び特徴が、非居住性の強い作業関連施設であるという傍証となっている[注4)]。

また、竪穴状遺構自体の一般的な形態的特徴として、飯村均氏は次のような項目をあげている[注5)]。

①一辺２～４ｍの方形を基調とする
②堆積土は人為的埋め戻しである
③共伴遺物（遺構と関連して出土する遺物）がない・または少ない
④床面が踏み締まっているものが少ない（⑤と相関関係）
⑤長期間の使用が認められない（④と相関関係）

このうち、「床面が踏み締まっているものが少ない・長期間の使用が認められない」という形態的特徴に着目すれば、使用者が初めから長期間の居住を目的としない建物として竪穴状遺構を築造したのではないかという推定が可能である。移動を伴う人々の、いわば簡易的な仮設住居及び作業関連施設として機能していたと考えることができよう。前述したように、職能民との関わりに重きを置き、職能民＝遍歴・漂泊民と捉えれば、このような仮説に一定の正当性が与えられるであろう[注6)]。

注１）1982(昭和57)年刊行の、『御成町860－３番地地点　鎌倉考古学研究所調査報告２』による。

注２）本節においては、できるかぎり多くの検出事例を参考にしたいため、狭義の中世期竪穴状遺構（竪穴建物）の域を超えた「竪穴状遺構」全般を扱うこととし、「竪穴状遺構」の用語を中心的に用いることとする。

注３）堂込秀人氏の論考によれば、新平田遺跡（鹿児島県大口市）検出の竪穴状遺構は12世紀後半頃所産とのことであり、鎌倉御家人の地方各地への下向を間接的な一因とする竪穴状遺構成立の時期が、全国的に同時性を持つ可能性も高い。

注４）中世期竪穴状遺構（竪穴建物）についてのこれまでの研究動向は、堂込秀人氏による、『季刊考古学』第85号所収の

「竪穴建物」に首尾よくまとめれており、そのなかでも職能民との関わりが論の骨子となっている。

注５）加えて、工藤清泰氏による、いわゆる「竪穴建物」の規定概略は以下の通りである。①方形を基調とする、②上屋構造がある、③構築～廃絶まで確実に中世期の所産である、④明確な炉及びカマドがなく張り出しを持つことが多い。なお、79頁第17表では、以上の４点に該当するのは175基に上り、張り出しがあるものに限定すれば56基となる。

注６）宗臺秀明氏は、方形竪穴建物に関わった諸集団（職能民）とその背景にある有力者の把握から、より具体的な方形竪穴建物の機能と変遷を論ずる必要性を強調している。同時に、検出した遺構自体の属性や存在様式よりも、職能民の存在や特殊性といった歴史的背景に視線が偏ることに警鐘を鳴らしている。筆者もこの立場を強く支持するが、本節ではあえて職能民の存在を鍵とする仮説的モデルを提示した。検出遺構を主とした客観性に立脚しつつ、新たなモデル提示を地方各地の動向を踏まえて継続させていくことは、文献資料の少ない地方史にとって重要であるからとの考えによる。

２．秋田県内の検出例・立地状況を通して

竪穴状遺構の立地状況に関しては、交易・流通網が整備された中世鎌倉のような構造的な都市空間においては、主として都市中枢部周辺の町屋地域や海浜地域に築造される傾向が強い[注7)]。交易拠点であった能代や秋田湊近辺以外、構造的な都市を有さなかったであろう秋田県内では、大きく二系統の検出ケース及び立地状況に分類できると思われる。一つは、単独に近い形で検出されるケースと、もう一つは、複数のものがときに切り合いを持ちながら検出されるケースである。そして、78頁第50図及び79頁第17表にあるように、両者にはその立地状況及び主要性格の間に明らかな数的相違がある。

78頁第50図及び79頁第17表で前者のケースにおける秋田県内の立地状況を概観すれば、能代市・琴丘町・昭和町・秋田市・本荘市・仙北町・千畑町・横手市（番号22～37）と、羽州街道・羽州浜（秋田・酒田）街道沿い及びその近辺に分布している[注8・9)]。検出数に若干の差はあるものの、集中的な検出はなく、複数期間の変遷を想定できない。他方、後者のケースにおける立地状況は、鹿角市・小坂町・大館市・鷹巣町・比内町・二ツ井町・雄勝町（番号１～20・38～40）となる。これらのなかには、道路開発に関する調査面積が狭い遺跡も含まれるため、検出数が少ない遺跡もあるが、一定の生活空間内部に集中的に築造された痕跡が認められる遺跡が多い。そして、その生活空間は、すべて「城館跡」という人工的な場所である。なかでも、鹿角市の新斗米館跡（番号７）・乳牛平遺跡（番号10）・妻の神Ⅲ遺跡（番号12）は、いずれも30基以上の検出があり、数期にわたる変遷が想定できる。78頁第50図及び79頁第17表は、街道沿い及びその近辺で検出される数は少なく[注10)]、「城館跡」で検出される数は多いという明白な事実を示している。

このような事実の差は、竪穴状遺構の機能に関係して存在したであろう、職能民層の社会への組み込まれ方の差違によるものではなかろうか。中世を主とした職能民層の生業的自由がどの程度のものかは、ここでは到底論じきれないが、広い試論を呈する立場からあえて二元化すれば、以下のように分別可能であろう。すなわち、遍歴・漂泊という本来の生業形態を色濃く残しているグループと、地方各地の有力者と契約関係を結び、その配下で定住(土着）を選択したグループとの分別である。前者は幹線街道沿いの集落を中心にその都度仮住まい・仮操業を繰り返し、各地を遍歴したモデルを想定できる。前述したように、単独に近い形で検出される遺跡は羽州街道・羽州浜（秋田・酒田）街道沿い及びその近辺に分布しており、このモデルを根拠づけている。対して後者は、定住（土着）の時期差こそあれ、元々は専門的技能を生業としていた者（職能民）が、生活的安定と引き替えに地方有

力者の配下に下り、その領地（城館）内に仕えたモデルを想定できようか[注11)]。安易な図式化のきらいがあることは承知するが、少なくとも、中世期の地方有力者が近傍の商業圏を掌握する一要素として、その配下に専門的技能を持つ職能民を内包していたことは、集中的な竪穴状遺構検出という事実から導き出せるだろう。城館主と職能民の関係について付言すれば、城館主が職能民を招聘して一定期間作業をさせていたという捉え方もある。すなわち、城館主が職能民層に課す代表的な諸役が領国内の土木・建築事業全般であり、そのための臨時的作業施設が城館内の竪穴状遺構であるという見方である[注12)]。

秋田県内における中世期竪穴状遺構（竪穴建物）の初現及び成立年代に関しては、科学的根拠を持つ最も古いものが、盤若台遺跡（秋田県琴丘町）検出の放射性炭素年代測定による13世紀半ばという事例である。しかし、大半は出土遺物や他の検出遺構との関係から時期を推定しているにとどまり、初現及び成立年代さらにはその系譜など、今後の発掘調査事例の増加を待つべきところが多い。また、秋田県内における中世期の主要な城館跡は、安東（秋田）氏が居城とした檜山安東氏城館跡（秋田県能代市）・湊城跡（秋田県秋田市土崎）・脇本城跡（秋田県男鹿市）等があるが、いずれも本格的な発掘調査が為されておらず、竪穴状遺構も未検出である。上記したような竪穴状遺構の機能に関わる社会的モデルも、東北北部日本海側の中世社会にどのように適用されうるかは、これら著名な城館跡での当該遺構の在り方に大きく左右される。今後の発掘調査成果に期待したい。

注７）「今小路西遺跡群」・「由比ガ浜遺跡群」など、中世鎌倉遺跡の立地状況に顕著である。

注８）羽州街道は、五街道たる奥州街道桑折宿（福島県桑折町）から左に分かれ、奥羽山脈を越えて山形・秋田に至り、さらに青森へと北上するルートである。秋田県内においては、県南部の雄物川・県北部の米代川水系をたどる幹線街道であり、古代・中世期にまで遡ることが可能な古来からの交通網である。本格的な整備は、参勤交代や領内巡視などを背景とする近世期においてであり、それまで県北部はかなりの悪路であった。また、羽州浜（秋田・酒田）街道は秋田～越後村上を結ぶ日本海沿岸沿いのルートであり、その素型は古代官道の北陸道に遡ることができる。

注９）洲崎遺跡（番号26）検出の竪穴状遺構は18基と多量だが、上屋構造を想定させるものはない。遺跡の特殊性ゆえ、検出された竪穴状遺構のなかには作業関連施設も含まれるかもしれないが、ここでは性格不明竪穴状遺構として捉え、参考資料とする。

注10）森吉家ノ前Ｃ遺跡（番号21）は、幹線街道沿いにも、いわゆる脇街道沿いにも位置しない。阿仁鉱山に至る阿仁街道から小又峡に通じるルート上にあり、かなりの山間部で中世期竪穴状遺構（竪穴建物）が検出されたこととなる（森吉山ダム建設事業区域内では初検出）。中世期の交通及び交易・流通網が想像以上に広範囲であることを暗示していよう。その意味において、本遺跡のような立地状況で、典型的な中世期竪穴状遺構（竪穴建物）が検出された意義は小さくないだろう。

注11）城館主の勢力が違い過ぎるが、以下のような捉え方の小規模モデルを、地方各地の城館跡に適用させる可能性は大いにありえると思われる。松崎水穂氏は、中世半ば～後半期の勝山館跡（北海道上ノ国町）に見られる、職能民層を含む諸階層が組織的に包括されながら集住化及び占地築城を遂げたとすることを、発掘調査結果と松前藩最古の歴史書である『新羅之記録』の記述を提示して論証を試みている。そして、勝山館跡検出の伝侍屋敷跡の分析から、蛎崎氏という地方有力者が鍛冶作業集団をはじめとする職能民を配下に組み込み、直接遠隔地商業活動を掌握していくモデルを見いだしている。また、それを受けて工藤清泰氏は、浪岡城（青森県浪岡町）主の勢力範囲が旧安東(藤)氏領と重なることか

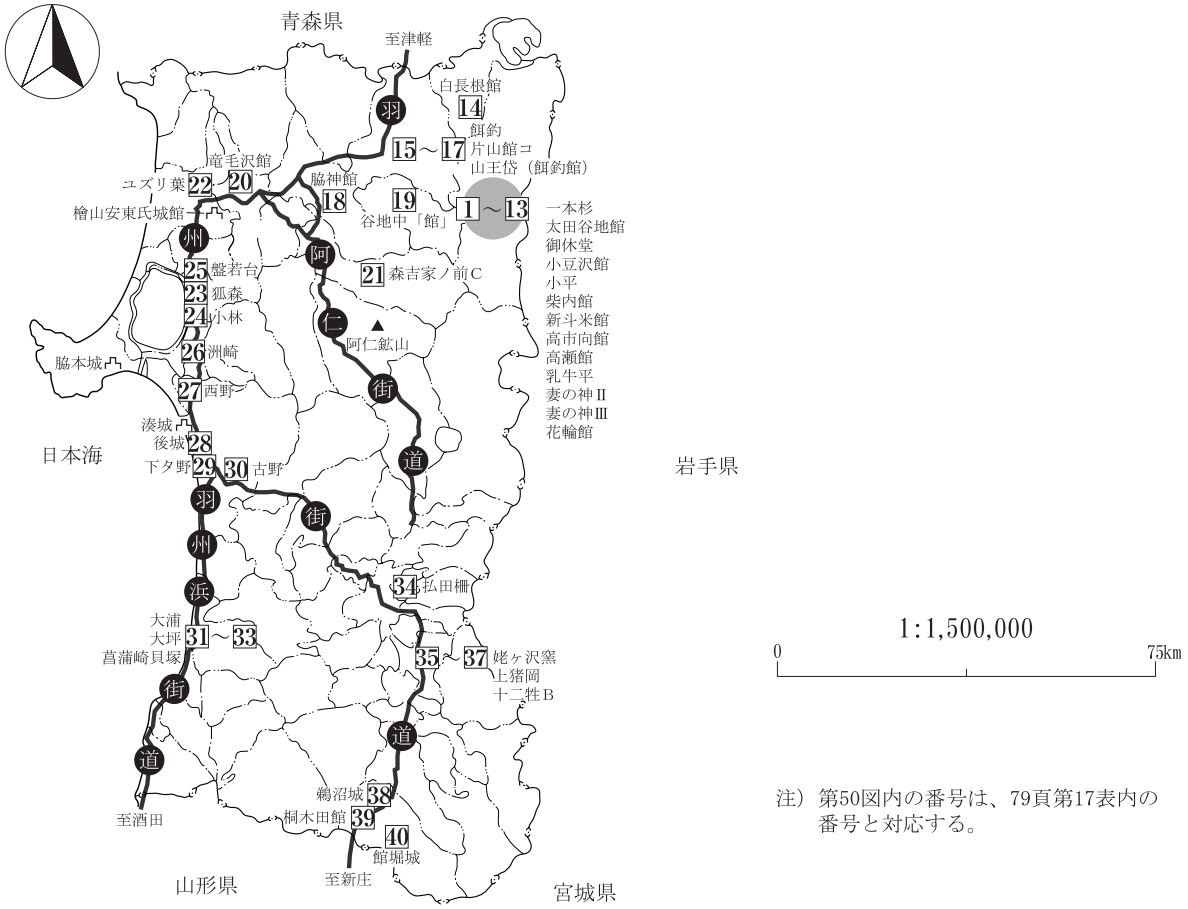
ら、職能民を自領地内に囲い込みつつ、日本海交易圏を受け継いだ可能性が極めて高いことを述べており、発掘調査結果を城下（遺跡）構造と領国支配の内部にまで応用させる有益性について論じている。

注12）室伏徹氏は、勝沼氏館跡（山梨県勝沼町）検出の外郭工房施設と武田氏に関わる職人宛文書を結びつけ、城館主が職能民を招聘する権利を握っていたことを提示している。なお、秋田県内の職能民に関する体系的な論文等はないに等しいが、塩谷順耳編『中世の秋田』では以下のような記載がある。「また当時（戦国・織豊期）は、その仕事をする家に招かれて、食料を与えられながら作事に従事する出職（でしょく）が一般的形態であった。湊城修築の際職人は、手間賃と共に飯米・酒をそれぞれ一人一日につき二升二合ずつ支給された。」また、梵鐘鋳型が出土した中世初期（13世紀）鋳造関連遺跡である堤沢山遺跡（秋田県本荘市）を調査した藤田賢哉氏は、白山社遺跡（岩手県平泉町）鋳造の梵鐘が大和系鋳物師製作と思われる事例を引きながら、以下のように述べている。「（中世初期は）寺院を中心とする需要者の近辺に鋳物師が出向いて製作をおこなう出吹きという形態が一般的であった。〈中略〉新しい地頭職が新領地のため寺院建立を計画し、その梵鐘鋳造のため畿内の鋳物師を呼ぶことは考えられることである。」

表注１）古代期・中世期を通した広義の竪穴状遺構を集計した。なお、秋田城跡の事例は省いている。

表注２）※を付した遺跡から検出した竪穴状遺構は、「非居住性の強い作業関連施設」という特色に適合しない可能性が高いが、参考資料として掲載した。

表注３）本遺跡に近接する森吉家ノ前Ａ遺跡では、作業関連施設とおぼしき複数の中世期竪穴状遺構（竪穴建物）を検出しているが、全面調査と報告が為されていないため未掲載とした。



注）第50図内の番号は、79頁第17表内の番号と対応する。

第50図　秋田県内検出竪穴状遺構立地状況図

第17表　秋田県内検出竪穴状遺構一覧表[表注１～３)]　　（ ）番号は明らかな古代期所産

番号	遺跡名	所在地	検出数	上屋あり	張り出しあり	主要時期	主要性格	備　　考
1	一本杉	鹿角市	3	3	3	中世期	集落・城館跡？	中世期の竪穴住居跡７棟も検出されている（地床炉中心）
（２）	太田谷地館	鹿角市	不明	不明	0	古代末期	城館跡	竪穴住居跡51軒の検出中、カマドを持たないものが36軒に上るとの報告である
3	※御休堂	鹿角市	1	1	0	古代末期？	集落跡	第４号ＳＩは7.88×7.01mと大型で、焼土・粘土範囲が２カ所／カマドのない建物の素型か？／砥石出土
4	※小豆沢館	鹿角市	1	1	1	中世期	城館跡	中央に地床炉があるため、住居跡とする
5	小平	鹿角市	3	3	2	中世期	城館跡	鉄製品、銭貨等出土
6	柴内館	鹿角市	23	20	4	中世半ば～後半期	集落・城館跡	鉄製品、鉄滓、銭貨等出土多数
7	新斗米館	鹿角市	35	34	4	中世期（４期に渡る）	城館跡	鉄・銅製品、鉄滓、砥石、銭貨等出土多数
8	高市向館	鹿角市	22	18	2	古代末期～中世初期？	城館跡	４基より鉄器、鉄滓出土
9	高瀬館	鹿角市	11	10	2	古代末期～中世最初頭？	城館跡	鉄製品、銭貨出土／中世最初頭の所産か？
10	乳牛平	鹿角市	32	32	8	中世期	城館跡	切り合い多数／変遷あり
11	※妻の神Ⅱ	鹿角市	1	1	1	中世半ば	城館跡	中央に地床炉があるため、住居跡とする
12	妻の神Ⅲ	鹿角市	42	42	18	中世期	城館跡	馬金具、銭貨等出土／変遷あり
13	花輪館	鹿角市	12	不明	不明	中世期	城館跡	詳細不明
(14)	※白長根館	小坂町	11	11	0	古代期	城館跡	基本的に竪穴住居跡だが、６軒は古代期工房跡の可能性ありとしている
15	餌釣	大館市	4	4	3	中世期	集落・城館跡	１基より砥石出土／中世城館の一部
16	片山館コ	大館市	1	1	1	中世期	城館跡	詳細不明
17	山王岱(餌釣館)	大館市	2	2	2	中世期	集落・城館跡	中世期火葬墓検出／中世城館の一部
18	脇神館	鷹巣町	4	2	2	古代末期・中世後半期	集落・城館跡	ＳＫＩ137は16世紀後半と思われ、焼失した食料倉庫と思われる
19	谷地中「館」	比内町	6	6	2	古代末期～中世初期？	城館跡	２基より鉄滓出土／住居跡を含む可能性あり
20	竜毛沢館	二ツ井町	4	4	2	中世前半期	城館跡	ＳＩ103より炭化材・炭化穀類出土
21	森吉家ノ前Ｃ	森吉町	1	1	1	中世半ば	集落跡	15世紀前半の所産／山間部の立地
22	ユズリ葉	能代市	4	3	0	古代末期～中世初期？	集落跡	未確定要素大
23	狐森	琴丘町	1	0	0	中世期	集落跡	ＳＫＩ13は鍛冶関連遺構と推定される
(24)	小林	琴丘町	4	3	1	古代期	集落・生産地跡	ＳＫＩ5200は、平安時代所産の張り出しを持つ竪穴状遺構であり、珍しい検出例と言える
25	盤若台	琴丘町	2	2	2	中世初期・半ば	集落・生産地跡	2000(平成12)年度調査のＳＫＩ101は13世紀半ば所産で鉄滓出土
26	※洲崎	井川町	18	0	0	中世期	集落跡(大規模)	区画を施された特殊な集落跡、竪穴状遺構も他遺跡検出のものとは形態的に異質である
(27)	西野	昭和町	1	0	0	古代期	集落跡	小規模／古段階の竪穴状遺構
28	後城	秋田市	2	1	0	中世期	集落跡	ＳＫ059より中世初期の銭貨出土、上屋ありのＳＩ111からは鉞(マサカリ)出土
29	下夕野	秋田市	２？	1	0	中世初期	集落跡	溝と重なる土坑も複数あり／未確定要素大
30	古野	秋田市	1	1	1	中世初期	集落跡	ＳＫＩ15は、ＳＢ22と一対で「家」を構築する付属屋と推定される
31	大浦	本荘市	1	1	0	中世期	集落跡	鉄生産跡、道路跡検出
(32)	大坪	本荘市	1	1	0	古代期	集落・生産地跡	周囲の溝跡に伴う遺構とされる
33	菖蒲崎貝塚	本荘市	2	0	1	(縄文期)・古代期・中世期	貝塚・集落跡	遺跡の主要部は縄文早期の貝塚だが、古代期及び中世期集落痕跡あり
34	払田柵	仙北町 千畑町	2	不明	不明	中世前半期(13世紀)	(古代城柵跡) 墓域・集落跡？	2002(平成14)年の第121次調査において、中世期所産の竪穴状遺構を初検出／砥石・鉄滓出土
(35)	姥ヶ沢窯	横手市	4	2	0	古代後半期	生産地跡	ＳＫＩ01内部にロクロピット／明確な窯業生産遺跡であり古代期工房跡だろう
(36)	上猪岡	横手市	4	4	0	古代期	集落・生産地跡	古段階の竪穴状遺構／窯跡検出
(37)	十二牲Ｂ	横手市	2	0	0	古代期	生産地跡	古段階の竪穴状遺構／土師器焼成遺構検出
38	鵜沼城	雄勝町	4	0	1	中世後半期	城館跡	未確定要素大
39	桐木田館	雄勝町	21	1	1	中世後半期	集落・城館跡	張り出しを持つＳＫ12以外、未確定要素大
40	館堀城	雄勝町	7	3	1	中世初期～半ば	城館跡	骨片（種別不明）等出土、ＳＫＩ1465からは漆の皮膜片・人骨片出土

第２節　掘立柱建物跡について　－住居跡と思われる４棟の掘立柱建物跡に関して[注1)]－

１．ＳＢ46　掘立柱建物跡【文：Ｐ24／図：Ｐ24・25／図版４・７・９】

［梁行２間×桁行３間　　直家］

［梁間平均値：2.08m（6.86尺）　桁間平均値：2.19m（7.23尺）］

［平面積：27.3㎡（8.3坪）］

一見、いわゆる律令型と呼ばれる古代期の梁間二間型住居だが、Ｐ５・Ｐ10の妻側柱穴が微妙に建物内によること、側柱より小さめで浅いことを見れば、棟持柱を持つ梁間一間型住居と捉えたい。中～下層民クラスの住居と見なされている、東北各県で検出例がある中世末期～近世初期の長方形を呈するものと近似している。だが、７尺以上の桁間平均値と明確な間仕切り痕跡がない広い一室型であることから、中世後半期のものと認定したい。中～下層民クラスの住居において、近世初頭に確立すると思われる居住部分（ネドコ・チャノマ）と土間部分が明瞭に分化する以前の建物跡であろう。

２．ＳＢ47　掘立柱建物跡【文：Ｐ26／図：Ｐ26・27／図版４・９】

［梁行３間×桁行５間　　直家］

［主屋梁間平均値：2.01m（6.63尺）　主屋桁間平均値：2.11m（6.96尺）］

［平面積：63.0㎡（19.1坪）］

20坪にも満たないが、本遺跡検出の掘立柱建物跡のなかでは、一番大規模のものである。柱間がＳＢ46よりも狭く７尺（2.12m）を切ることから、築造・運営時期は中世後半期～近世期直前の間と捉えたい。北東の付属屋的な庇は建て増しであり、桁行の延長上の柱間は主屋桁間平均値の一間分よりも若干広い。作業スペースを確保する増築であろうが、一部分が馬屋であった可能性もあり得る。ならば、一番大規模な建物跡であることも含め、居住人の身分は小規模の自作民クラスと推定できよう。

３．ＳＢ121　掘立柱建物跡【文：Ｐ28／図：Ｐ30・31／図版４・７・９】

［梁行３間×桁行４間　　直家］

［主屋梁間平均値：2.71m（8.94尺）　主屋桁間平均値：1.94m（6.40尺）］

［平面積：47.3㎡（14.3坪）］

住居跡と思われる４棟の掘立柱建物跡の中で、唯一桁間平均値が２m（約6.5尺）より短い。だが、各柱間寸法にかなりのばらつきがあり、桁間平均値による時期決定は信頼性に欠ける。出土遺物も近世後期に広範に流通する在地系磁器片のため、後世に流れ込んだ遺物と思われる。放射性炭素年代測定の結果では、16世紀後半～17世紀前半となっており、中世末期～近世初頭にかけてのものと言える。明らかな一面庇が付く掘立柱建物跡は本遺構のみであり、他の建物跡と時期差がある傍証となろう。また、南東側のＰ９とＰ11の間には柱穴が確認できず、倒木根等による後世の攪乱も見受けられなかった。このことは、Ｐ９とＰ11の間が出入り口であった可能性を強めている。いわゆる妻入り型の住居であり、ある地域を除き平入り型が多数を占めることを考えれば、比較的珍しい検出例と言えるだろう。

４．ＳＢ184　**掘立柱建物跡**【文：Ｐ33／図：Ｐ33～35／図版３・９】

［梁行１間×桁行４間　　直家］

［梁間平均値：4.33m（14.29尺）　桁間平均値：2.21m（7.29尺）］

［平面積：38.3㎡（11.6坪）］

中世期に典型的な、いわゆる梁間一間型住居である。梁行一間が桁行一間の約２倍であり、梁間一間型住居の特性と適合する。中世初期に盛行する総柱型住居の影響を多分に受けていれば、側柱間に柱穴があったり、下屋を取り付けてあったりするが、本遺構は身舎のみの構造である。総柱型住居形式の影響がかなり薄れてきた時期の住居と捉えることができ、中世後半期～末期という放射性炭素年代測定の結果は時期的に矛盾がない。内部構造は一面土間であったと思われるが、石組炉が中央部より１m弱北東にずれることに注目すれば、居住部分（ネドコ・チャノマ）と土間部分が分かれる間取り形式の素型となり得るかもしれない。ここでは、石組炉のある北東側が主たる居住部分、南西側が後に土間部分に発展するスペースと見ることが可能であろう。また、建物跡の南端部には、直径約90㎝・深さ約35㎝の円形状落ち込み（ＳＫ90）があり、簡易的な厠やごみ捨て穴等の付随施設である可能性がある。石組炉に強い被熱があることと砥石が出土していることから、作業場を兼用する職能民（工人）の住居であったのかもしれない。

注１）「律令型」・「梁間一間型住居」・「梁間二間型住居」等の語彙は、宮本長二郎氏の用法にならうこととする。

第３節　結び

１．歴史的背景をめぐって

森吉家ノ前Ｃ遺跡は、阿仁川右支流の小又川右岸上にある秋田県森吉町森吉地区に立地する。現在の集落域の原型となる、近世期に入ってからの本格的な各地域開村以来、森吉地区は小又川流域において最も人口が多かったところで、古くから地域全体の拠点的役割を担ってきた集落である。この地に住んでいた人々の生活痕跡を、局所的ではあるが、一遺跡全面の発掘調査という形を通じて室町時代半ば（15世紀前半）にまで遡ることができた。遺物だけを見れば、縄文時代にまで遡ることができ、当期に本遺跡近辺で暮らした人々の存在を推測することもできよう。

近接する遺跡との詳しい関連は定かではないが、森吉家ノ前Ａ遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡ともに中世期の遺構が検出されており、各遺跡間の時期的な近似性がうかがえる。特に、森吉家ノ前Ａ遺跡は中世期全般を通して営まれた大規模な遺跡である可能性が高く、遺跡の全面調査と報告が加わることで、中世期における本遺跡近辺の様相が一層明らかになるであろう（歴史的環境を記述したＰ10・11も参照されたい）。

検出遺構・遺物から導かれる本遺跡の主要時期は中世半ば～近世初期であるが、その具体的な歴史的背景は、文献資料の少なさもあり不明な点が多い。よって、歴史的背景を加味した本遺跡の位置づけも素描にならざるをえないが、以下のような事象が本遺跡形成の間接的要素となると思われる。

第１点目に、地方有力者の存在であるが、本遺跡を含む森吉・阿仁地方一帯は、室町時代中期頃

（1450年頃）より、米内沢城に居城した嘉成氏の勢力範囲であったと言われている。嘉成氏は奥州惣奉行であった陸奥国葛西氏の一族が土着したとされ、檜山安東氏成立後はその配下になったとされている。檜山安東氏成立は、1456(康正２)年、安東政季が当主のとき、蝦夷地（北海道）から本州南下に成功したことによるため、16世紀には檜山安東氏の勢力範囲に入ったと考えられる。しかし、嘉成氏は檜山安東氏重臣という立場は変わりないが、自領地内の実権を実質的に掌握する、いわゆる国人領主的存在だったという見方もあり、詳しい支配権の動向は明らかでない。とはいえ、徐々に檜山安東氏という一大戦国大名の統括圏内に入っていったことは疑いなく、嘉成氏は木材調達を中心とする、当地域の代官的存在であったのだろう。なお、戦国・織豊期には、北方の比内地方に浅利氏、南方の仙北地方には戸沢氏という有力者が割拠しており、勢力圏抗争も盛んであった。安東氏を助けた嘉成氏の軍功も、1565(永禄８)年の鹿角攻めや、1590(天正18)年の大館城攻略を記載した諸文献に散見する[注1)]。

第２点目に、人々の集住化を促進させる、商品となる資源の問題である。言うまでもなく、本遺跡南方には日本有数の鉱山である阿仁鉱山が位置する。開山は1309(延慶２)年であり、中世前期から採鉱が行われていたのだろう。鉱山への入口であり、阿仁川舟運の拠点であった水無村（秋田県阿仁町水無）は、佐竹氏入部直後には人口一万人を超えていた。この事実からすれば、採鉱や精錬に要する木材及び薪炭を産出し、それらの運搬に従事する人々が居住する集落が、小又川流域においても古くから開かれていたとする想定は自然であろう。近世期には、木材の伐採等の労働は、各地平民の強制徴収による体制が佐竹氏＝秋田藩によって確立されていくが、中世期の様相は定かではない。だが、檜山安東氏麾下にあった嘉成氏が実権を握り、阿仁川・米代川舟運を利用して日本海交易拠点の能代港へ、という資源供給ルートがあったことは間違いないだろう。

第３点目に、人々及び物品を往来させる交通網の問題である。本遺跡へ通じる道は、佐竹北家の小城下町として有名な角館と、羽州街道沿いの小繋（秋田県二ツ井町）もしくは坊沢（秋田県鷹巣町）を結ぶ、阿仁街道の一支道である。本格的な阿仁街道とその支道の整備は、阿仁鉱山開発を重視した佐竹氏＝秋田藩による近世期だが、阿仁鉱山の開山が中世前期であることを考えれば、大きな政治的背景によらずとも、舟運も合わせた付近の交通網開発が漸進的に為されていったと推定できる[注2)]。

以上を集約すれば、漠たる素描に過ぎないが、本遺跡近辺における中世期からの歴史的背景は以下のようになろう。中世期における本遺跡近辺の区域は、浅利氏配下にあったと思われる初期から集落形成及び交通網開発が行われていた可能性が高く[注3)]、その背景には阿仁鉱山及び秋田杉という一大資源の存在がある。その流れは当地の有力者が嘉成氏となった中世半ば以降も続き、能代港を交易拠点としていた檜山安東氏勢力圏内に入った後は加速化するであろう。佐竹氏入部とともに訪れる近世初期からは、鉱山の道である阿仁街道整備が進められ、周辺の集落形成は一段と進み、その流れは近代へと至る。この過程に本遺跡を明確に位置づけることは困難だが、阿仁鉱山とその場につながる阿仁街道及びその支道、そして舟運を背景にした、平民主体による集落形成の一例であろう、という定義づけは可能である。

注１）『秋田風土記』・『郷村史略』・『奥羽永慶軍記』等による。

注２）本遺跡に近接する森吉家ノ前Ａ遺跡では、多数の大規模な総柱型掘立柱建物跡を検出している。切り合いを持つその柱

間は8.5尺（約2.6m）が多く、中世前期からの築造・運営を想定できる。中世期における本遺跡近辺の集落形成及び交通網開発を、前期にも遡行させることができる資料である。遺跡全面の発掘調査と報告による全容解明が待たれる。

注３）塩谷順耳編『中世の秋田』では、南部氏や津軽曾我氏の歴史を伝える『新渡戸文書』にある、３地域の田畑を一族に譲渡したことを明記した「沙弥浄光譲状」を根拠に、次のような推論を展開している。「ともかく浄光を浅利氏とすれば比内郡地頭の立場から阿仁川流域は（浅利氏が）当然押さえていたと考えねばならない。」

２．おわりに

本遺跡に居住していた人々は、富裕さとはかけ離れたところで生活を送っていた下層民クラスと捉えている。文献上には載ることの少ない、一般民衆レベルの遺跡を発掘調査したこととなろう。ともあれ、多少時代が下った近世後期の文献には、一般民衆の日常がかなり具体的に記録されている。なかでも、江戸時代後期の紀行家菅江真澄〔1754(宝暦４)～1831(天保２)〕は、1802(享和２)年12月に小又川流域の各集落を探訪しており、12月４日に本遺跡が立地する森吉村（森吉町森吉）で宿を取っている。そして当地においては、特権層クラスの豪家ではなく下層民クラスの貧家で厳寒の夜を越しており、そのときの様子は、1802(享和２)年10月16日～12月末日までの旅程を著した『雪能秋田寝(雪の秋田寝)』のなかに描かれている。文中、住人は「まぢ人＝貧民」と著述され、「とみうど＝富民」と対比させられている。そして、寒さをしのぐ夜具さえ貧相であったことを伝えており、朝まで眠りにつけなかったとこぼしてもいる。

残念ながら宿泊した住居の詳細な形式や構造は記述されていないが、それでも相当みすぼらしい建物であったことはすぐに想像できる。恐らくは、貧弱極まりない文字通りの掘立小屋であったと思われる。同時に、住人の生活状況が劣悪であったことは言うまでもないだろう。下層民クラスにおけるこのような生活レベルは、本遺跡検出の竪穴状遺構・掘立柱建物跡等が存した各時期においても大差はないと考えるのが自然であろう。

菅江真澄の書物には、歴史の表面に刻まれることのない、多くの人々の言葉にならない日常が静かに記録されている。菅江真澄の視線を、実証性を重んじる考古学的立場から心理と言って退けることはたやすい。しかし、実証性のみには存しえない、ある歴史的側面に触れているのではないだろうか。

《第６章　参考文献》

青森県浪岡町教育委員会　『昭和58年度浪岡城発掘調査報告書　浪岡城Ⅶ』　1985(昭和60)年

塩谷順耳編　『中世の秋田』　さきがけ新書２　秋田魁新報社　1982(昭和57)年

よねしろ考古学研究会編　『よねしろ考古　４』　よねしろ考古学研究会　1988(昭和63)年

石井進・萩原三雄編　『中世の城と考古学』　新人物往来社　1991(平成３)年

東北中世考古学会編　『掘立と竪穴　中世遺構論の課題』　東北中世考古学叢書２　高志書院　2001(平成13)年

東北建設協会製作　『羽州街道　－秋田県北部一般国道七号その生い立ちを訪ねて－』
建設省東北地方建設局能代工事事務所　1990(平成２)年

渡辺信夫監修　『東北の街道　道の文化史いまむかし』　東北建設協会・無明舎出版　1998(平成10)年

網野善彦　『増補　無縁・公界・楽　日本中世の自由と平和』　平凡社ライブラリー150　平凡社　1996(平成８)年

網野善彦　『日本中世の百姓と職能民』　平凡社ライブラリー468　平凡社　2003(平成15)年

飯村均　「中世の『宿』『市』『津』」　『中世都市研究』第３号所収　中世都市研究同人会　1994(平成６)年

堂込秀人　「中世南九州の竪穴建物跡」　『南九州城郭研究』創刊号所収　南九州城郭談話会　1999(平成11)年

堂込秀人　「竪穴建物」　『季刊考古学』第85号所収　雄山閣　2003(平成15)年

宗臺秀明　「方形竪穴建物の機能と変遷　－中世東国の半地下式建物－」　『考古学研究』第46巻第３号所収
考古学研究会　1999(平成11)年

小山彦逸　「中世竪穴建物跡の張出し出入口の位置について　－七戸城北館曲輪検出事例を中心として－」
『青森県考古学会30周年記念論集』所収　青森県考古学会　2002(平成14)年

高橋学　「井川町洲崎遺跡とは何か　－洲崎遺跡に見る中世出羽北半の一様相－」　『研究紀要 16』所収
秋田県埋蔵文化財センター　2002(平成14)年

室伏徹　「館・屋敷の工房施設」　『戦国時代の考古学』所収　高志書院　2003(平成15)年

藤田賢哉　「本荘市堤沢山遺跡　－梵鐘鋳造遺構をはじめとする鋳造関連遺構群－」
『東北中世考古学会第10回研究大会（男鹿大会）資料集』所収　東北中世考古学会　2004(平成16)年

宮本長二郎　「日本中世住居の形成と発展」　『建築史の空間　－関口欣也先生退官記念論文集－』所収
中央公論美術出版　1999(平成11)年

宮本長二郎　「古代末から中世の住居建築」　『研究紀要 16』所収　秋田県埋蔵文化財センター　2002(平成14)年

高橋與右衛門　「掘立柱建物跡の間尺と時代性　－民家の間尺と比較して－」　『紀要Ⅸ』所収
財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1991(平成３)年

高橋與右衛門　「発掘された中世の建物跡」　『北の中世』所収　日本エディタースクール出版部　1992(平成４)年

高橋與右衛門　「中世の建物跡」　『戦国時代の考古学』所収　高志書院　2003(平成15)年

関口欣也　『秋田県の民家』　秋田県文化財調査報告書第27集　1973(昭和48)年

五十嵐典彦編　『秋田の民家』　秋田県企画調整部企画調整課　1982(昭和57)年

草野和夫　『近世民家の成立過程』　中央公論美術出版　1995(平成７)年

内田武志・宮本常一編訳　『菅江真澄遊覧記　４』　平凡社　1967(昭和42)年

内田武志・宮本常一編　『菅江真澄全集第三巻』　未来社　1972(昭和47)年

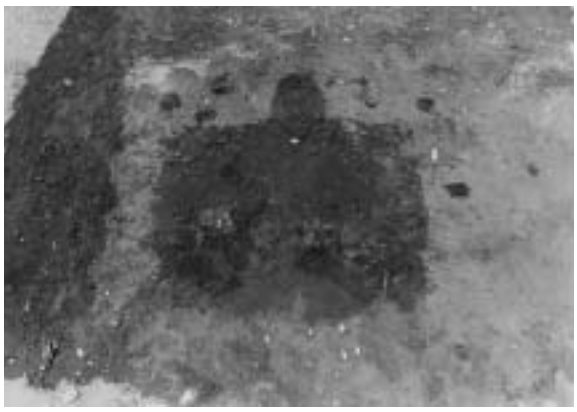
田口昌樹・福岡龍太郎他　『森吉山麓　菅江真澄の旅』　モリトピア選書10
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1999(平成11)年

※78頁第50図秋田県内検出竪穴状遺構立地状況図作成にあたっては、秋田県教育委員会が編集・発行している、各『歴史の道調査報告』内の街道概念図及び記載事項を参照した。

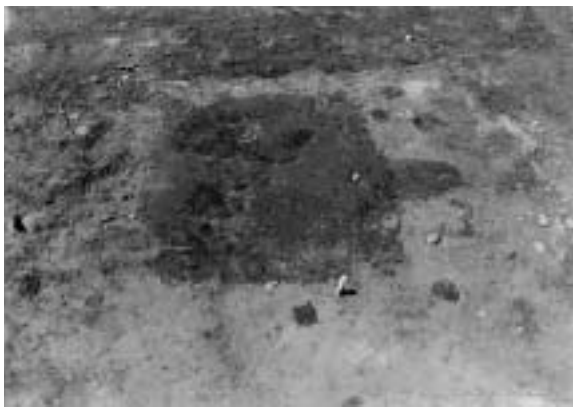
※79頁第17表秋田県内検出竪穴状遺構一覧表作成にあたっては、各遺跡発掘調査報告書及び各市町村史記載事項を参照した。

1　遺跡遠景（北東→）

2　遺跡全景（南→）



1　ＳＫＩ41竪穴状遺構　確認（南東→）



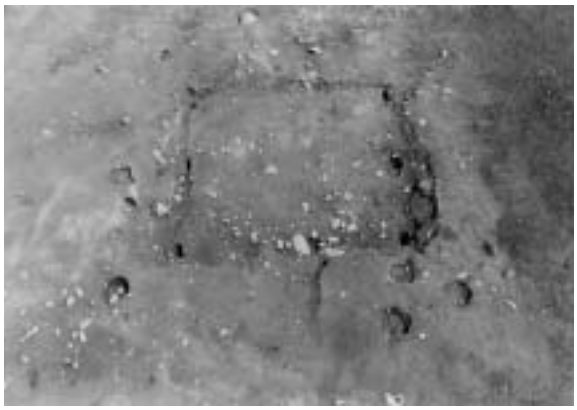
2　ＳＫＩ41竪穴状遺構　確認（北東→）

3　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ａ－Ｂ断面Ａ側（南東→）

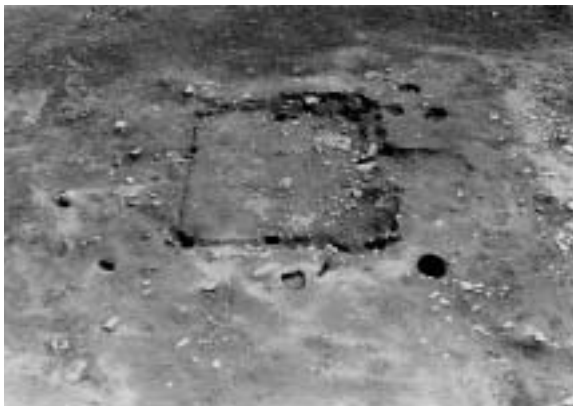
4　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ａ－Ｂ断面Ｂ側（南東→）

5　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ｃ－Ｄ断面Ｃ側（南西→）

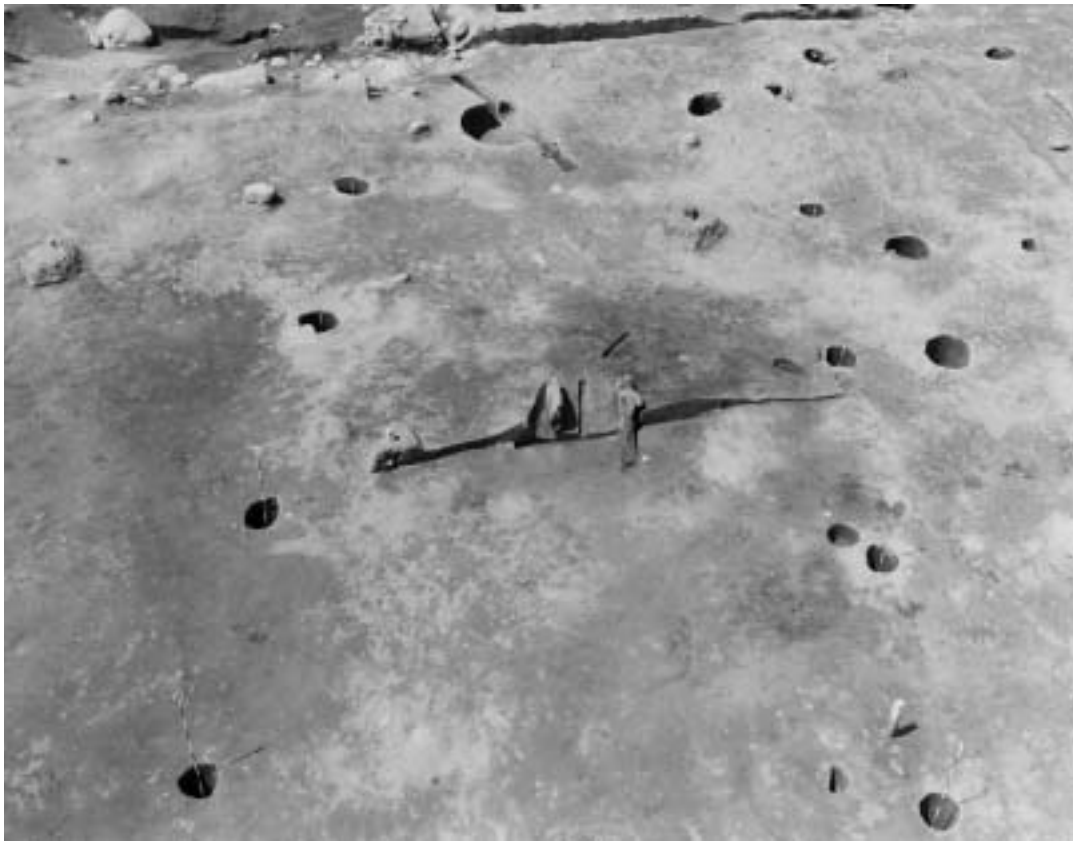
6　ＳＫＩ41竪穴状遺構Ｃ－Ｄ断面Ｄ側（南西→）



7　ＳＫＩ41竪穴状遺構　完掘（北西→）



8　ＳＫＩ41竪穴状遺構　完掘（北東→）



1　ＳＢ184掘立柱建物跡　完掘（北東→）

2　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　確認（北東→）

3　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　現況（北東→）

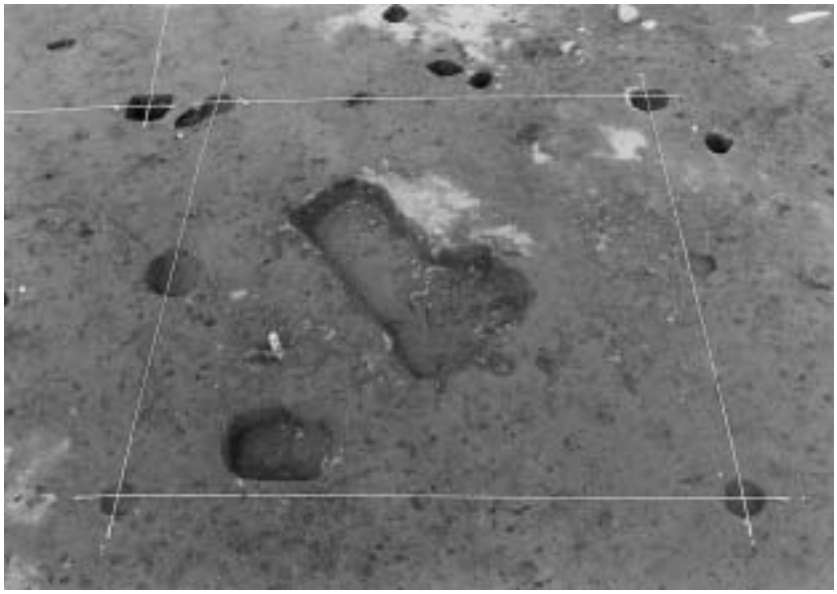
4　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　断面（北東→）

5　ＳＢ184掘立柱建物跡　炉　断面（南東→）

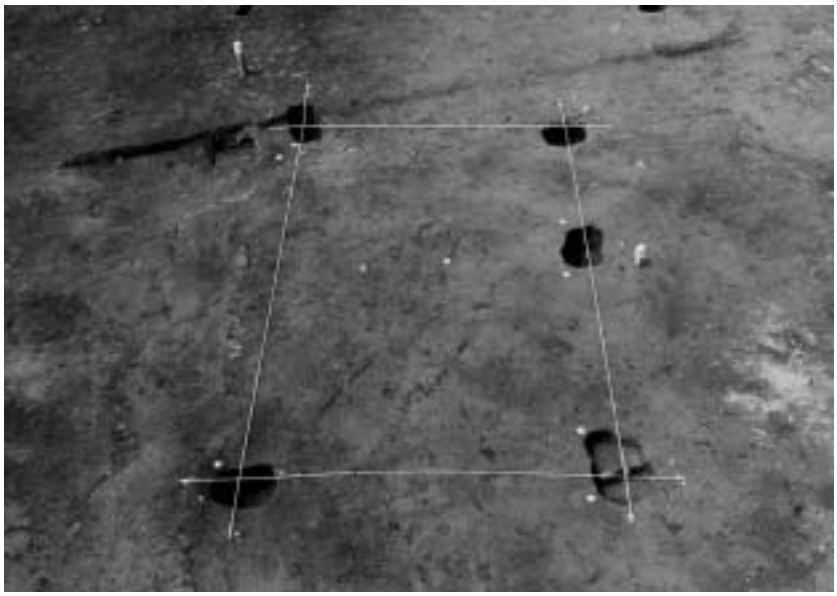
1　ＳＢ46・47・121・357掘立柱建物跡　完掘（北東→）

2　ＳＢ47・121・357掘立柱建物跡　完掘（南東→）

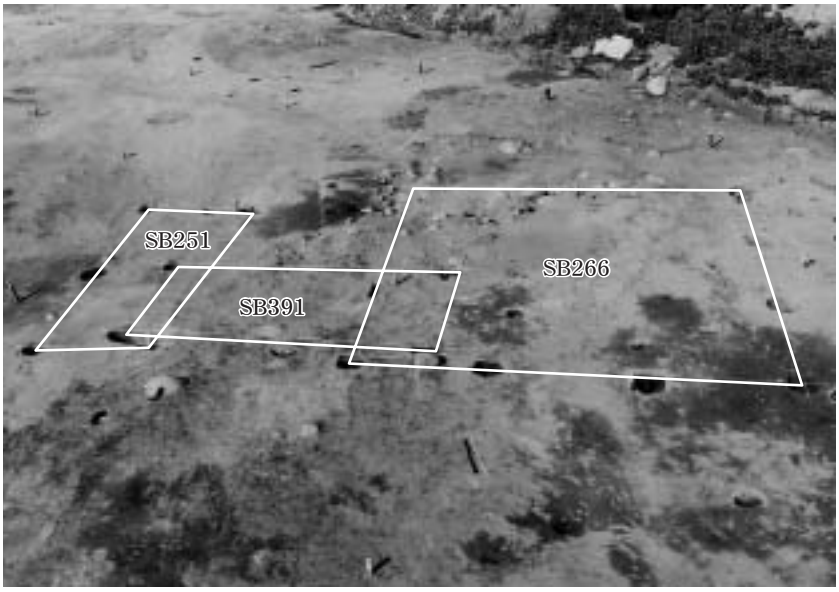
1
ＳＢ116掘立柱建物跡
完掘（北西→）



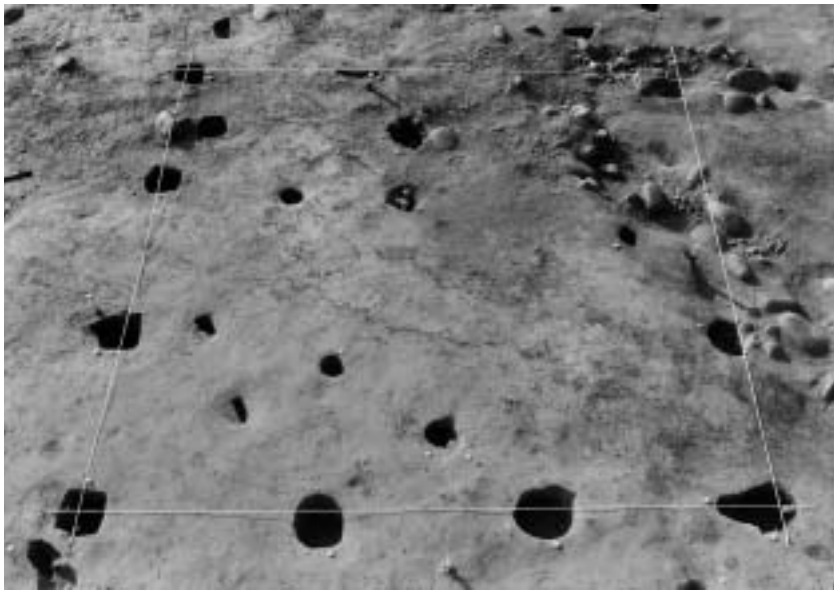
2
ＳＢ246掘立柱建物跡
完掘（南西→）



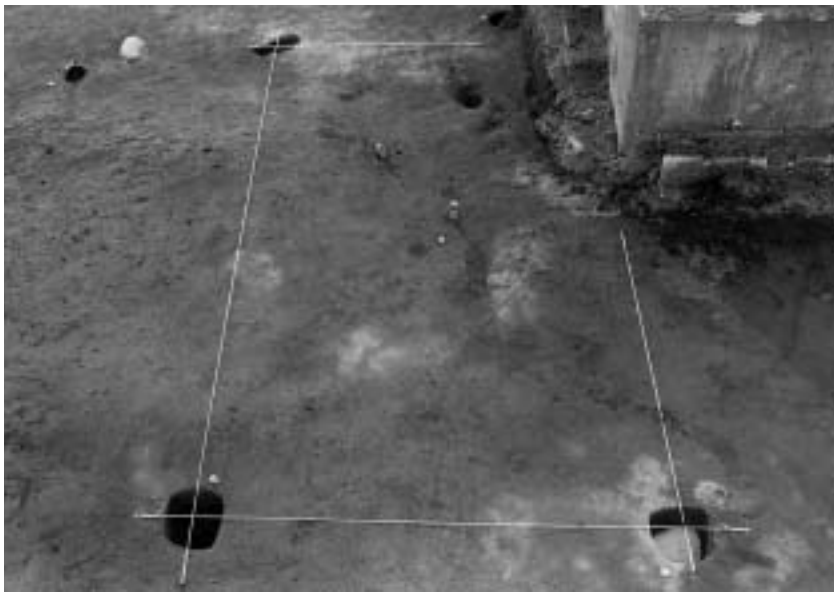
3
ＳＢ248掘立柱建物跡
完掘（北東→）



1
ＳＢ251・266・391掘立柱建物跡
完掘（南西→）



2
ＳＢ266掘立柱建物跡
完掘（南東→）

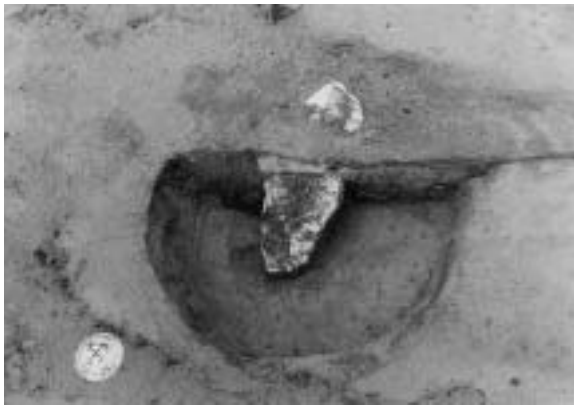


3
ＳＢ374掘立柱建物跡
完掘（南東→）

1　基本土層断面ＭＤ56付近（北東→）

2　ＳＢ46掘立柱建物跡Ｐ５礫出土状況（南東→）

3　ＳＢ116掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（南東→）



4　ＳＢ251掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（西→）

5　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ１礫出土状況（南西→）

6　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ２礫出土状況（北東→）

7　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ３礫出土状況（北東→）

8　ＳＢ121掘立柱建物跡Ｐ４礫出土状況（南西→）

1　ＳＮ40焼土遺構　確認（北東→）

2　ＳＮ40焼土遺構　断面（南西→）

3　ＳＫ43・44・45土坑　確認（南東→）

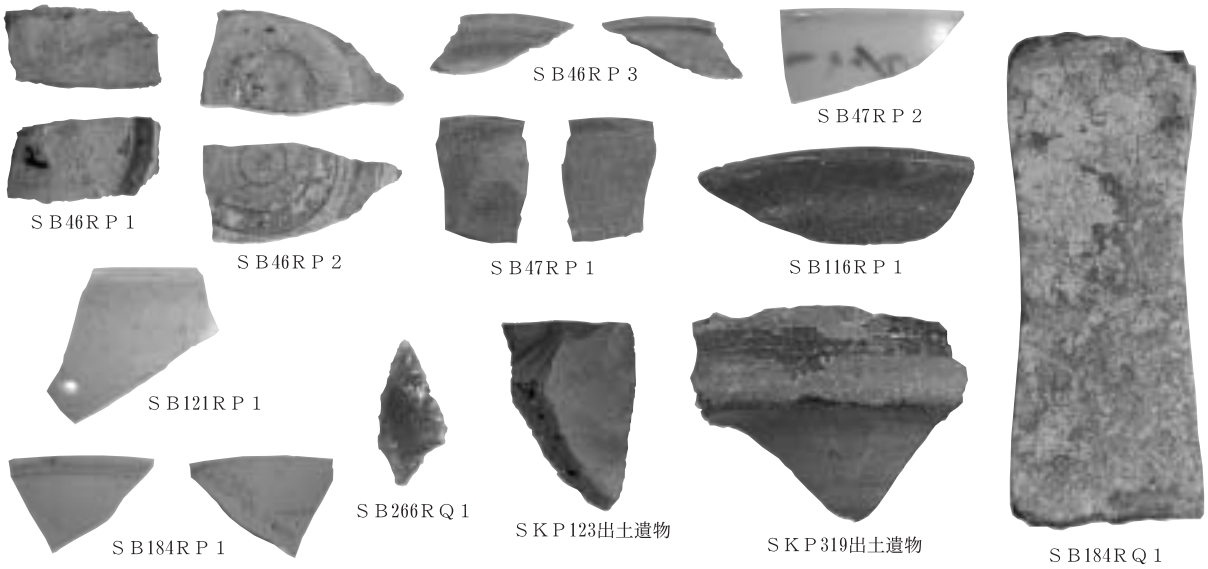
4　ＳＫ43土坑　断面（南東→）

5　ＳＫ44土坑　断面（南→）

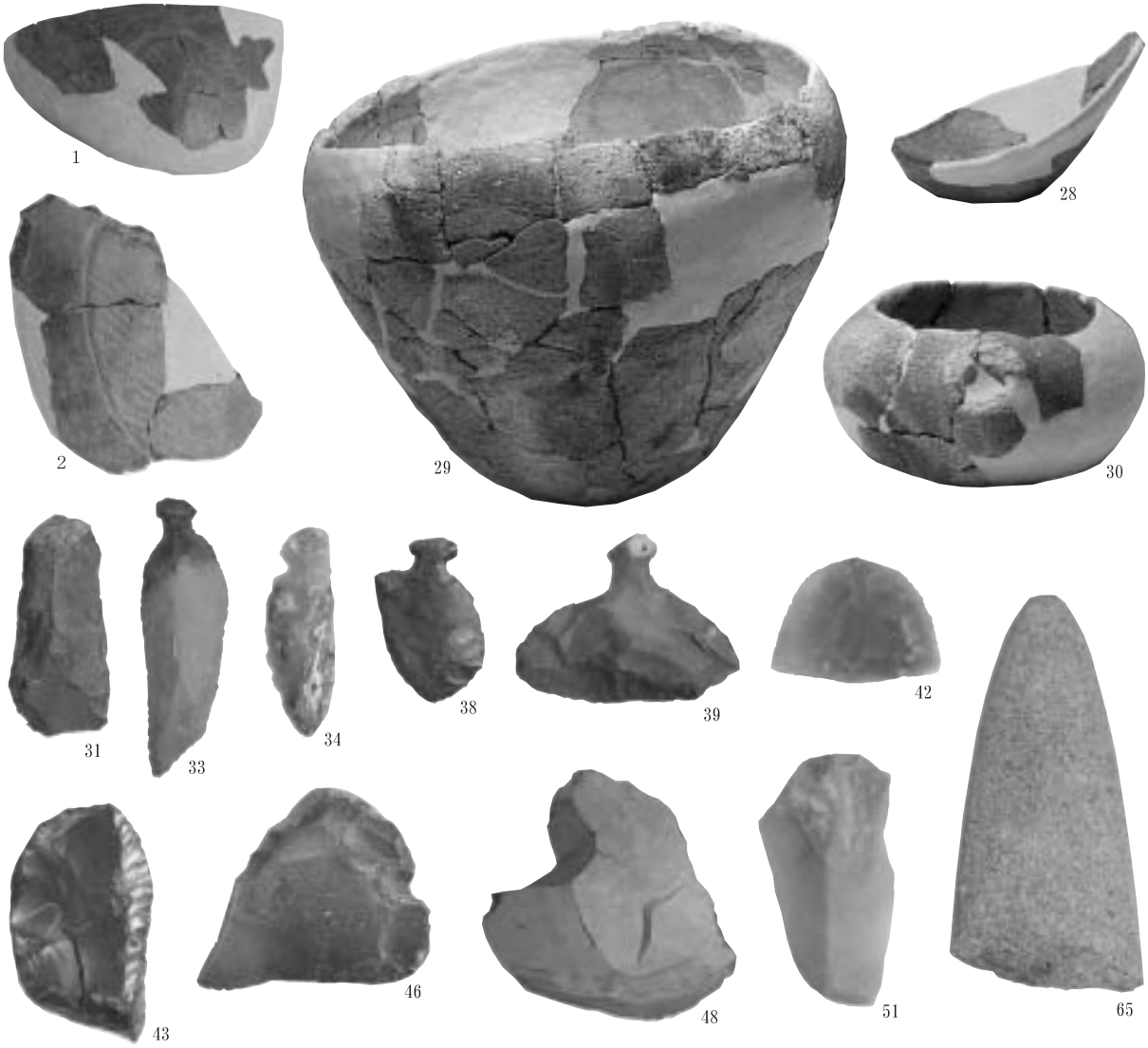
6　ＳＫ52土坑　断面（南東→）

7　ＳＫ53土坑　断面（北西→）

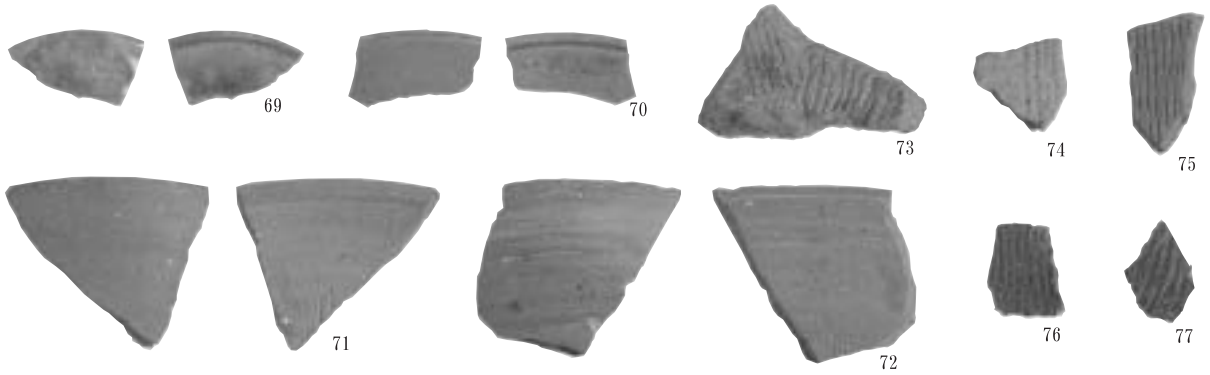
8　ＳＫ90土坑(内ＳＫＰ51)　断面（西→）



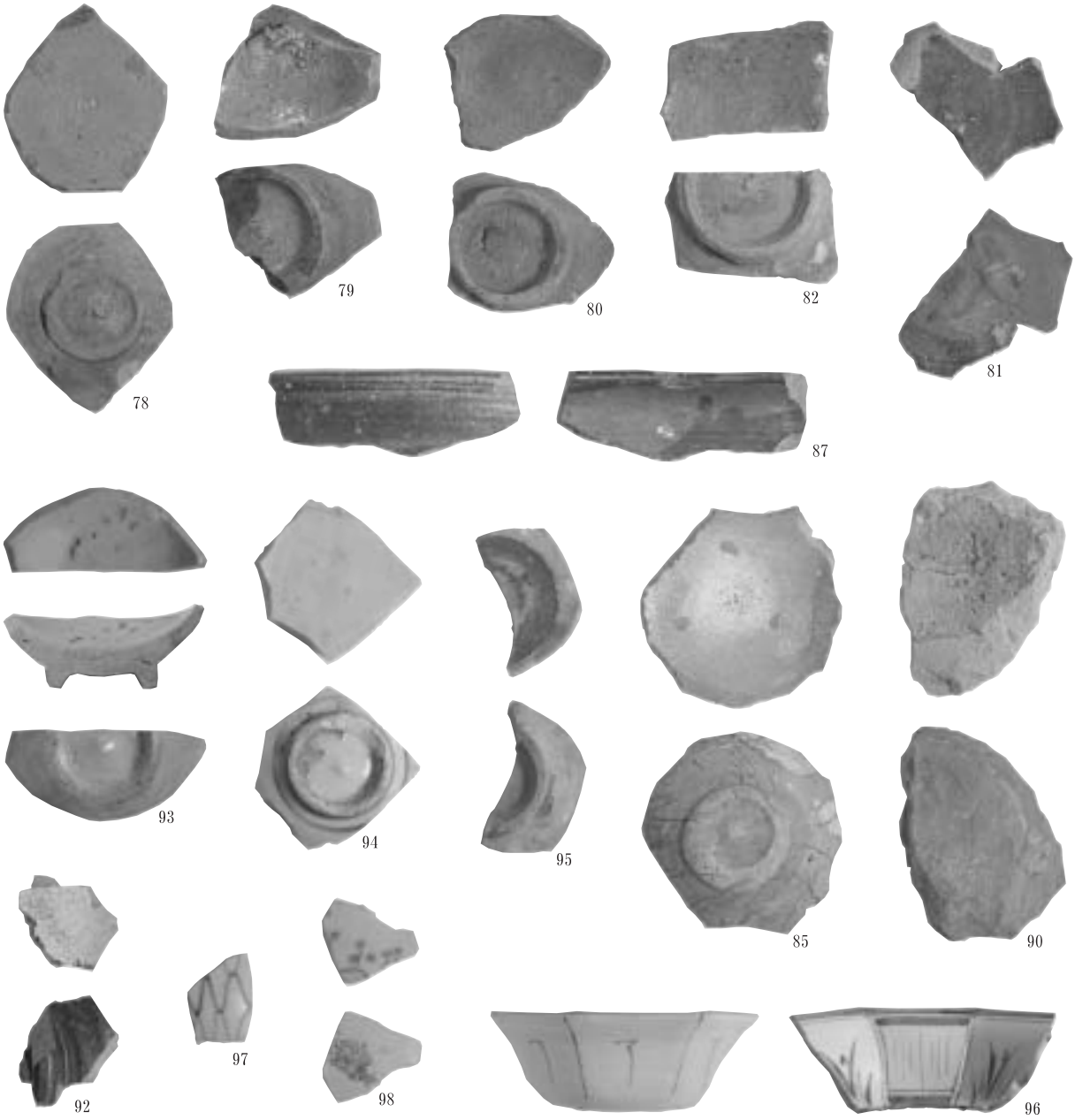
遺構内出土遺物



遺構外出土遺物　縄文土器・石器



遺構外出土遺物　中世陶器



遺構外出土遺物　近世陶器・磁器

報　告　書　抄　録

ふりがな	もりよしいえ　まえ　いせき
書名	森吉家ノ前Ｃ遺跡
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XIV
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第393集
編著者名	石川和良
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号　TEL 018-860-5193
発行年月日	西暦2005年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もりよしいえまえ 森吉家ノ前Ｃ いせき 遺跡	あきたけん 秋田県 きたあきたぐん 北秋田郡 もりよしまち 森吉町 もりよし 森吉 あざもりよしいえまえ 字森吉家ノ前 114外	05323		40° 03′ 05″	140° 29′ 33″	20030513 ～ 20030801	6,000㎡	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
森吉家ノ前Ｃ 遺跡	集落跡	中世半ば ～ 近世初期	竪穴状遺構 掘立柱建物跡 焼土遺構 土坑	1 13 1 17	縄文土器 石器 中世陶器 近世陶器・磁器	中世半ば～近世初期を主とする小規模な集落跡

秋田県文化財調査報告書第393集

森吉家ノ前Ｃ遺跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ－

印刷・発行　平成17年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

TEL 0187-69-3331　FAX 0187-69-3330

発　　行　秋田県教育委員会

〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号

TEL 018-860-5193

印　　刷　有限会社　大館孔版社